
レイモンドール綺譚（転成の章）

青蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイモンドール綺譚（転成の章）

【Nコード】

N0252E

【作者名】

青蛙

【あらすじ】

三年前、魔術によって守られていた結界が無くなり、混乱状態に陥ったレイモンドール国。魔道師の手から取り戻したかに見えた権力もいつの間にか、魔道師の元に戻ろうとしていた。州候の娘、アリスローザ、騎士、元レジスタンスのリーダー、小さい廟の魔道師ら4人が立ち上がる。果たしてレイモンドールはどうなるのか・・・。

1・変革のとき（前書き）

これは、「レイモンドール綺譚」の続編となっております。

感想をお気軽に書いてくださると力になります。ただいまレイア
ウトを変更中のため、

読みにくいと思いますがよろしくお願いします。

1・変革のとき

朝の淡い水彩の光がやつと石造りの小さな廟の屋根に届く頃。

その廟の戸をしつこく叩く音に仕方なく中年の魔道師が戸を開ける。

「誰ですか、こんなに朝早く……あ、あなたは」

絶句する魔道師の肩に手を置いて廟に勝手に入って来た小柄で細い男に魔道師はおろおろと周りを伺って戸を閉めた。その顔にかんている表情は歓迎とは正反対に歪められている。

「何なんですか。何だってここへいらしたんですか、アリスローザ様」

「せっかく久しぶりに会ったというのにあんまりね、ダニアン」

はああとわざと聞こえるようにため息をついて、側にある椅子に座るダニアンと呼ばれた頭がやや薄くなった中年の魔道師。

「あれからあたしは州宰代理の任を解かれて、この小さな廟主として慎ましく暮らしております。だいたい、あたしは三年前の謀反の事なんてちつとも知らなかったんですよ。本当にいい迷惑ですよ、あやうくあたしまで牢屋行きになりそうだったんですからね」

魔道師はふくれつつらで言いながらもアリスローザにお茶を出す。「悪かったと思っているわよ、もちろん。だけど、わたしの話を聞いて。ボルチモアでわたしの昔のことを知っていて助けてくれそうなのはあなただけなのよ」

「めっそももない！ これ以上あたしを窮地に追い込むようなことに巻き込まないでください。あたしはただの魔道師ですよ」

顔の前で手を振る魔道師の腕を男装したアリスローザが掴んで引き降ろす。一瞬三年前に戻ったのかと錯覚するくらい、彼女の顔は毅然としていた。

「ハーコート公の命を助けるのよ。そして今の王をひっぱたいて目

を覚まさせてやるわ」

「で、あたしに何をしろと」

「とりあえず、寝かせて。丸一晚歩きづめでくたかなのよ」

アリスローザはそう言うのと勝手に奥に入ってしまった、魔道師の男はまた一つため息をついた。

事の始まりは一通の手紙。

レイモンドール国の北部ボルチモア州、州都ケスラーにある州城の一角。

水分を含んだ少し冷たい風が城の壁を下から吹き上げて若い女の頬をなぶるように通り過ぎていく。

ああ、あの時もこの季節だったと彼女はつぶやく。

ただ、そう思うだけで自分の意識はあの頃に帰っていく。

彼に会いたい。

そう、願っているのに。

「アリスローザ様、文が届いております」

自室の出窓に腰をかけて外を眺めている女性に、黒い女官のお仕着せを着た少女が声をかける。

「ありがとうございます、イライザ。そのテーブルに置いておいて」

窓から視線を移さずに言葉をかけるアリスローザに女官はぺこりとお辞儀を返す。

彼女は大事そうに手にしていた書簡をテーブルに置くと室を出る。

それにしてもわたしに文を送る人間がいようとは。

出て行った女官の足音が消えてから、彼女は首を傾げながらも足早にテーブルに向かうと書簡を開く。

大罪を犯したことで親も知り合いも失くし、あえて自分に関わろうとする者もいるはずが無かった。

訝しく思いながら書簡を読んでいたアリスローザの顔が次第に綻ぶ理由。

それは三年前の謀反を起こそうと画策していた時に自分と動いていた男の一人からだった。

三年前今はこの国にいない魔道師、クロードという少年によって自分の父親　ここ、レイモンドール国の北部のボルチモア州、州公の謀反は暴かれたのだ。

父親は斬首され、自分も同じ運命だろうかと思っていたのだが……。

結局、王弟でもあるクロードという少年魔道師に命を助けられて。今はボルチモア州の新たな主であるスノーフォーク侯爵に養子にいった義兄の所にお預けの身になっている。　半分は血の繋がっている兄のこと、不自由無く暮らしてはいる。　だが、監視がついているため昔のように男のなりをして出歩くわけにはいかなかった。地下のアジトから州兵の追跡を免れて逃げのびることが出来た、レジスタンスのリーダーがいたことにアリスローザは心底ほっとする。

あの頃、自分は玉座を狙う父親の上辺の甘言に惑わされて謀反の片棒を担がされていた。　それは自分だけでなく大勢の仲間を巻き込んで結果、たくさん命を奪うことになってしまった。

それなのに自分はこうしてのうのうと生きている。

「わたしは生きる価値があるのかしら。クロード、教えてほしい」
懐かしい名前を口にしながらアリスローザは華奢なドレスに付けるのには少し不似合いな燦し銀の丸くてごついペンダントにそっと触れた。

別れるときにクロードが持っていてくれと彼女に託していったものの。

そして……触れるだけのくちづけ。

ふふ、とアリスローザは微笑む。　自分もクロードもまだまだ子どもだったのだ。　二年前自分は十七、クロードは十五だったのだ。

今ならどうなのだろう、もつと自分の気持ちに正直になれたのだろうか。

王の資格を持ちながらそれをあつさり捨てて旅立っていった少年のことを、アリスローザは今も忘れることができないでいる。

月の光を溶かし込んだような髪、深い湖の底のような美しい瞳の少年を。

揺らがないそのまっすぐな横顔を。

2・手紙

「彼は変わったかしら」

アリスローザは壁に掛けてある鏡に映った自分の姿にはつとずる。三年前の少女の面影はすっかり影を潜めたように感じる。黄みの強い明るいブロンドでスカイブルーの瞳。しかし、無邪気に正義を振りかざしていたあの頃とは違う。

大人の分別を備えた貴族の娘。あと暫くすれば、豪商か、近隣の貴族との婚姻が決められてしまう。十九歳では遅いくらいだが、いわくつきの娘を嫁にもらうのは持参金の額だけでは覚悟がいるのだらう。

しかし、クロードは十四歳のまま歳を取っていないはず。

彼は身の内に魔教の書を封印され外見の変化を止めてしまった。

そして、旅立っていったのだ。手の届かない遠くへ。自分も行きなかった。

連れて行って欲しかったのに。

彼女はいつの間にか自分の手からすり抜けて落ちていた書簡に気付いて我に返る。

書簡には他愛も無い日常の話がちらちらとそれこそしつこいくらいに書いてあるが。

アリスローザはその書簡を拾い、テーブルに置く。

羽ペンをインク壺から引き抜いて、ある法則に従って線を引き、言葉を入れ換える。一通りやり終えると満足そうにくすりと笑った。

その書簡に書いてあったのはレイモンドル国の首都サイトスの国府の内情。三年前、魔道の結界が無くなり政治の主導権は魔道師の手から王の元へ帰ったはずだった。

ところが王弟のクロードが国を出奔した後、たったの半年ほどで王のたつての希望により祭祀長だった魔道師コーラルが宰相の任に就く。

そして暫定的だったとはいえ、混乱の一番大変な時期に労を尽くした前国王の兄、ハーコート公は補佐という立場に落とされる。

その不名誉にもハーコート公は国のためにサイトスに留まりつけてはいたが、コーラルの力はますます強くなってきた。

せっかくなさんの血で魔道師から勝ち取った権力。それを新しい王、クロードの双子の兄であるクライブは簡単に手放そうとしているのだ。

「まったく、何てこと。クロードには悪いけどクライブが王になったのは絶対間違いだわ。一体何を考えているんだか」

書簡にはこの度、ハーコート公の所領モンド州で父に代わり州公代理を務めている嫡男、ダリウスが深刻な病にかかったことが書いてあった。

そのため、一時ハーコート公がモンド州に帰ることになった事を知らせる内容。しかし、この話には裏がありそうだと文は続いている。

この国を魔道師の国に戻したいコーラルにとってハーコート公は目の上のたんこぶでしかない。血の繋がりでいえばこの二人は兄弟なのだが、情ということで言えば二人の間には全く通じる物が無かった。

双子で生まれた前王とコーラルだが、魔道師として生まれて直ぐに魔道師の本山であるゴートの廟に連れて行かれた瞬間からコーラルはこちらとの縁が切れたのだ。

躊躇だったのはその内面。

彼にはハーコートや前王に対する思慕の情も親愛の情もまったく無い。あるのは盲目的に帰依している魔道教への思いと自分が王になるという野望だけ。

「ハーコート公の嫡男の急病の知らせはガセかもしれない、か」

と、なんとサイトスからの道程のどこかでハーコート公は命を奪われる可能性がある。今、ハーコート公に亡くなられたらこの国は大変なことになる。

アリスローザは思わず唇を噛んだ。ここでうじうじと昔のことを懐かしんでいる場合では無くなった。

兄には悪いがわたしは行動を起こす。

アリスローザは手にした書簡をびりびりと破り広く開けられた窓から投げ捨てた。

投げ捨てたのは手紙だけでは無い　　今までの自分。自分の身を嘆いている不甲斐ない心そのもの。

「アリスローザ様、ワインをお持ちしました」

言いつけていたワインを夕食後に持って来たのを知らせるイライザの声。

「入って」

女官のイライザが盆の上に背の高い杯に入れたワインを載せてそろそろと部屋に入ってくる。

「ああ、イライザありがとう。ねえ、ちょっと頼みがあるのよ、こっちへ来て」

衣裳部屋のほうから声が聞こえてイライザはただいま、と応じて盆をテーブルに置くと声のした方へ向かう。

「アリスローザ様？」

「ねえ、この夜着なんだけど、どのガウンがいいかしらねえ」

いつもあまり着飾ることなどしないアリスローザが夜着のことなんかで迷っているのを不思議に思いながらも、イライザは首を傾げながら何枚かを引き出しから出して広げる。

「この薄い桃色のガウンはいかがです？」

「そうねえ、この水色はどう？」

そう、言うてからアリスローザがぱんと手を打った。

「あなた、ちょうど私と同じくらいの背格好だもの。ちょっとこの夜着を着てみてくれない？　桃色にするか、水色にするか、見てみ

たいわ」

「そ、そんな。わたしなんかアリスローザ様のお衣装を着るなんてとんでもない」

驚くイライザにアリスローザはまあまあと笑いながら手招く。

「衣装って言ったって夜着だし、ここはわたしとあなただけじゃないの。あなたが黙っていたら誰にも知られる事なんかないでしょう？　ちよつと合わせるだけよ」

そこまで言われたら女官の立場で何も言うことはないが。それに美しい服なら夜着だと言えど年頃の少女にとって嬉しくないわけではない。

イライザが夜着に着替えるとアリスローザはうん、うんと笑いながら桃色のガウンを渡した。

「あら、あなたの言う通りね。その色がいいわ」

トロンとした絹の手触りにうっとりしながらイライザはあっさり決まったことに内心がっかりしながら夜着を脱ごうと手をかけたが、アリスローザが当身をしたためにそのまま床に崩れ落ちた。

「ごめんね、イライザ。明日の朝までわたしの代わりを頼むわ」

少女の体を寝台に運び込み、掛け布を頭まで引き上げた後、自分は女官の脱いだ服を着込む。そして寝台の奥に手を突っ込んで一抱えの荷物を抱える。

その日の変わらぬうちに元ボルチモア州、州姫アリスローザの姿は州城から消えた。

3・沈む心

レイモンドール国の首都、サイトスの主城。

やっと一人になって寝所に帰ったこの国の王、クライブはため息をついて寝台に腰をおろした。

王に即位してから毎日、まるで空気を求めて水面近くに口をぱくぱくと開けている魚のような息苦しい気持ち。

長い長い悪夢の中にいるようだ。それでも初めの頃は、違っていた。

弟が、クロードがいたからだ。双子で同じ歳のはずなのにいつも決然と前を向いていた彼。王になれど、君ならやれると力強く言うてくれた彼。

即位式の時の自分に笑いかけてきた、あの笑顔がずっとクライブと共にあると思っていたのに。

「クロード、わたしを裏切って。国を裏切っていたのか」

何度も繰り返し返す問いかけに答える相手はもうこの国にはいない。頼りになるのは亡き、父王の双子の片割れである魔道師のコーラルだけ。

この国は五百年もの長い間、双子の一人が王になる運命だった。

そして双子のもう一方は魔道師になる。

この国は国境を魔術で封じて王は魔道により加護を受ける代わりに、王は自分の半身を差し出してきたのだ。

お任せくださいと、その彼は優しく言うのだ。まだお若いのですから政務がお解かりにならないのも仕方ありませんよと慰めてくれる。

「そのために私がいるのですよ、陛下。どうぞ、私に全ておまかせを。陛下はゆっくりお勉強なさってくださいませ。政務ばかりに煩わされるお暮らしでは陛下の御身に障ります」

コーラルはそう言つてクライブのために度々豪華な宴を開き、狩獵をすすめ、旅行をすすめてくれるが。

クライブはそれにも心底疲れていた。

まだ、国の基板がしつかりとしていないというのに王である自分が遊んでいていいはずがない。ハーコート公をモンドに帰す命を出したのは早計だったかもしれない。

彼はコーラルのように耳障りの良いことばかりを言う人間でもない。厳格で自分にも妥協しない。

頼りになるが一緒にいると自分がいかに矮小かと思ひ知らされるように辛いのもまた事実だった。

「ラドビアスを置いていつてくれたらよかったのに」

クライブは自分の弟の従者の名をつぶやく。

三年前の混乱の時、サイトスであつたという間に国府内を掌握し、次々と片付けていく彼の辣腕ぶりに驚いたものだった。

しかし、奢ることも無く控えめな態度で宰相の座をハーコートー公に決めてからはあつさり元の一介の従者に戻った男。

ずるい、ずるいとクライブは思う。

クロードは自分の持つていない物を何でも持つているのだ。確固たる自分の意思、頼りになる従者。

そして 自由だ。

「不公平だ」

口に出すと自分があまりにも可哀想になつてクライブはきつく目を閉じた。この世は何て不公平なんだ。玉座なんて今すぐ欲しい奴にくれてやる。

クロードを悪者にしなくては今の自分がつかばれない。

自分を哀れむ悲しい穴を自らがせつせと掘り続けているのに気付かないほど、クライブは自分を見失っていた。

ボルチモア州のとある小さな廟。

アリスローザが起きたのはそれから一刻半ほど経った頃。先ほどから彼女は、ダニアンの用意したパンケーキをおいしそうに食べている。

「このパンケーキおいしいわね、黒すぐりのジャムがあればもっといいんだけど」

「何、ぜいたくを言っているんですかね、まったく。ところでいつまでここにおられるんです？」

食べたらしつさと出て行って欲しい事を前面に出しながらダニアンはぶつぶつと言いながらもお茶を入れる。なんと言っても気の悪い男なのだ。

「ごめんね、ここで人と落ち合うことにしたのよ。それまでよろしくね、ダニアン」

「なっ……」

またも絶句するダニアンをよそに指差される空いた皿。

「もう少し、パンケーキが欲しいんだけど、ダニアン」

廟の前庭を掃いていた歳若い魔道師の目前に、道でも聞くように声をかけてきた小汚いマント姿の大男。

「ここにダニアンという魔道師はいるか」

「はい、ここの廟主様ですけど何か」

魔道師の返事にそうか、と笑った男はそのまま廟の中にずかずか入って行く。

驚いて止めようとする魔道師を従えながら入って来た男に気付き、アリスローザが声を上げた。

「ウイリアム」

「アリスローザ、久しぶりだな」

男の顔を見てアリスローザの顔が曇る。

「助かったのは二人だけだったと聞いたわ。わたし、本当ならあなたに顔向けなんてできないのに」

アリスローザの言葉にウイリアムは微かに顔を歪めたが、伸ばされた手はしっかりと彼女の手を握った。

その握られた手の力強さにアリスローザは、ほっと息をついて力を込める。

「おまえも俺も国のためにやったことだ。人のせいなんかにおれはしないさ。そしてまた、おれはやるし、おまえもやるんだろう?」

ぼさぼさのレンガ色の髪をがしとかきながら、無精ひげの垢じみた顔をにやりとさせてウイリアムと呼ばれた男はどっかりとその主のように椅子に座る。

「腹へったなあ、何か食わしてくれ」

「あんた達と来たらここを宿屋か何かと勘違いしてるんじゃないかね、まったく」

ダニアンの文句に男は豪快に笑う。

「思ってたねえって。宿なら金が必要だろう?」

「な、何だってえ」

うーんと薄い頭を抱える魔道師に少し悪いと思いつつもアリスローザは厨房に何かないかと捜しに行った。

結局、ここをアジトに提供することにダニアン自ら言い出したことになってしまう。

この廟にサイトの様子知らせてくれたステファンが揃うといよいよ動き出す。彼らの仲間を足しても微々たるものだろうがこのままこの国をコーラルの思い通りにさせるわけにはいかない。

クロードにこの国の行く末を見て欲しいと自分は頼まれているのだ。彼が帰ってくる頃にまた、元の魔道の国になってたりしたら彼はがっかりするだろう。

そこまで考えてアリスローザは自分の中のクロードの存在の大きさに苦笑いする。

まったく自分は勝手にクロードを美化し、神格化して崇めているのだろうか。実際の彼はあんなに子どもっぽい少年だったではないか。

「いえ、違うわ。わたしなんかよりずっと大人だった」

そう、口にしてクロードにまんまと騙されていたことまで思い出

してしまった。無邪気に装っていた二つ下の少年に自分たちの浅はかな企みを暴かれたのではなかったか。

その時のクロードの纏っていた覇気は正に王の物だったと今ならわかる。彼ならコーラルに干渉されることも無くこの国を正しく導いていけたはずだったのに。

それなのにあっさりと王の立場を兄に譲り、魔道師としての道を選んでこの国から出ていってしまったのだ。

「無責任すぎるわ、クロード。今度会ったら思いっきり文句を言うてやる」

アリスローザは拳を握って宣言した。

4・一人目の男

廟にある食材といえば、野菜などしかない。

魔道師は戒律で動物性のものは鳥の卵や、牛の乳、それで作られる油類くらいしか食べられない。

その上、アリスローザは料理なんてしたことなど無い。　そういう事で結局ダニアンがさつきから厨房に籠っている。

「マッシュポテトのパイと豆のスープくらいしか用意できませんよ」
「それにしてもコーラルが宰相に返り咲いたというのに不景気な感じね」

マッシュポテトをかき回しているダニアンの背後から器の中に指を突っ込みながらアリスローザが言うのにダニアンが怒ったように答える。

「サイトスにいる魔道師たちと他の廟にいる魔道師たちの縁は切れておりますよ、今は州庫のほうからの補助金しか収入はないのですから」

「そうなの？」

「モンド州、ゴートの廟長だったルーク様がいらした頃は、魔道師庁も何も統制がとれておりましたがね。今はゴート山脈の廟はうち捨てられているようですよ。竜道が使えなくては不便極まりますからね、あの場所は」

言いながらも手は滑らかに動いていく。

「かまどにパイ生地を入れますからそこをどいてください。それよりこれからどうするんです？　どれほど人間が集まったとしてもコーラル様に敵うわけはございませんよ」

「これを鍋に入ればいいの？　ダニアン」

危ない手つきで、鍋に戻し汁ごと豆を入れようとするアリスローザからダニアンが奪うように鍋を取り上げる。

「ふやかした豆だけを入れてくださいよ。いや、もうあたしがやり

ますから本当に」

「それなら最初に言ってくればそうするわよ。けどねえ、廟が互いに連絡が無いのなら何とかなりそうじゃない。それに、あなたたちだって今の状況には納得していないんじゃないの。なら力を貸さなくちゃ」

アリスローザが勢い良くスープをかき混ぜたため、中身が刎ねてしまう。ダニアンはため息をつきながらこぼれたスープを拭く。

ああ、このままあたしはまた、巻き込まれてしまうのかと。

やっと出来た料理を運び込んだ途端にくだんの男は物も言わずに食べ続けて、あっという間に鍋一杯に作ったスープも大皿に盛ったパイも平らげてしまった。

ダニアンはこれは早く約束の男と合流させないと廟の存続に関わると冷や汗をかく。

「サイトスからのどこで仕掛けてくる思う？」

満足そうにゲップとともにウイリアムと呼ばれた男が緑色の目を細めてアリスローザを見る。

それに応えて彼女は腕を組んでウイリアムを見返す。

「わたしはここ、ボルチモアだと思うのよね」

「おまえもそう思うか」

ウイリアムが我が意を得たりとにこりと笑った。

「もう争いごとはこりごりですよ、魔道師は荒事とは無縁の者ですからね」

ダニアンの言葉にウイリアムが噛み付くように言う。

「よく言うぜ。おまえら魔道師ときたら自分の手を汚さないくせに頭ん中物騒なことばかり企んでやがるじゃないか」

「その魔道師を頼って来て、面倒かけているのはどこの誰ですか。どうしてボルチモアでハーコート公様のお命がねらわれると思うんですか」

空いた皿を片付けながらダニアンが心配げに顔を向ける。

どの魔道師が腹黒くともこの男だけはそれとは無縁に見えるが。しかし、魔道師相手に戦うためには魔道師の内情を知っているものがどうしても必要なのだ。

それにこの情けない顔をこちらに向けている男は、元ボルチモア州の州宰代理だった男だ。

本来ならこんな小さな廟主で収まっているはずの魔道師ではない。どうしても仲間に取り入れなければ。

アリスローザはどうやってこの哀れな魔道師を丸め込もうかと思いつきながらウィリアムの横に座る。

5・魔道師の心（前書き）

今回はちょっと長いです。

5・魔道師の心

「ボルチモアは前州候のおかげで悪名高いじゃない。ごたごたの最中だったから係累の一扫には手を付けられなかった。そのせいで前国王を悪く思う者たちが残っている。と、いう話をでっち上げ易いってことだわ。ここでレジスタンスの残党あたりが前王弟である、ハーコート公様を逆恨みでもしてお命を狙ったことにすればみんな納得だわ」

「そ、そんな」

ダニアンはアリスローザが澄まして言う話に顔色を変えた。

しかしそこで、彼女の胸にあるペンダントに気付いて大慌てで思わず手に取ろうとしたが、アリスローザにその手を払われる。

「アリスローザ様、それは竜印のペンダントでは？」

「そうだけど、何？」

「なぜ、あなたが持つていらっしゃるんです？ わたしが頂いておりました物は主がご逝去された時に崩れてしまったのですよ。残っている物があるなんて」

物欲とは無縁のはずの魔道師の瞳に、せつないくらいの光を見つけてしまつてアリスローザは思わず身を引いた。

「これはわたしがクロードから預かった物だわ。そんなに大事な物なの？」

「勿論でございますよ。ペンダントには主自らが呪を封印なさつておられたのですよ。我ら魔道師にとってイーヴァルアイ様は神にも等しいお方だったのです。あたしはそれなのに……」

絶望の表情を浮かべてダニアンはがっくりとうな垂れた。あのモンド州の公子の一人が我らが主だったとは。

ゴートの廟にいる魔道師やサイトスの魔道師庁の魔道師、それも上位の者にしか姿を見せないはずの主にあたしは会っていたのに。
「あたしはお助けすることもできなかった」

みすみすこのボルチモア州城内で誘拐されることになるうとは。女性と見紛うほどの美しいお方だった。お声をかけて頂いたのに、そしてあと一人は『鍵』と契約されたクロード様だったとは。今でもダニアンの中では王とは『鍵』と契約を交わされた者、だった。自分はそれと知らず、貴い二人の方に出会っておきながら知らなかったとはいえ、その二人を亡き者にしようと企む側についていたのだ。

その思いは結界が消えた今も絶えず体の中を焼いているのだ。後悔という名の業火が休むことなく今もこの身を焼いている。

「あたしは最低の魔道師ですよ」

つぶやくダニアンの肩をアリスローザが優しく叩く。

「大丈夫、わたしに協力すればあなたの後悔も消えるわ」

「え？」

「わたしがやろうとしていることはきつとクロードも望むこと、だからよ」

強引に話を持っていくアリスローザにはっきりと不信を滲ました表情をダニアンは見せる。

「わけが分かりませんか？」

「このペンダント、欲しいでしょ？」

「い、頂けるんですか」

再びペンダントに手を伸ばしたダニアンの手をそのままアリスローザががしりと掴む。

「クロードに聞かないとね。でも口添えはしてあげるわよ。一緒に来てくれたらね」

「い、一緒ですって？」

ダニアンの青い顔を見てアリスローザはにこりと笑った。

ああ、この娘に関わるとロクな事にならなかったんだった。ダ

ニアンは大きく息を吐いて顔を逸らせる。

「話をついたのか」

ウイリアムの問いかけにいいえと言う声とええと言う声が重なっ

た。はるかに是と言う声に勢いがあってウィリアムは堪えきれずに大声で笑った。

「……仕方ありません、主の名前を出されちゃあ断るいわれがないのですから」

ダニアンはため息まじりに言うのと修行中の魔道師たちを集めるとさらさらと書簡に何かを書き付けた。

「おまえたち、悪いがこの書簡を持って隣のリュール村の廟に行っておくれ」

「廟主様、お一人になりますよ」

「それはいいんだ。だが、お前達を巻き込むことは出来ない。この書簡にはお前達をしばらく預かってもらえるように書いておいたからね。少しの辛抱だ、事が済んだらすぐに迎えに行くよ」

歳若い魔道師たちを送り出してダニアンは胸元から呪符を取り出すと廟の敷地の塀へと歩いていく。

塀の東西南北へその呪符を貼ると印を組んで呪を唱えた。呪符は姿を消して何事も無かったようにダニアンは廟内へ戻って来た。

「何をしたの？」

アリスローザの問いにダニアンは素っ気無く答える。

「軽い結界を張りました。不信な者が来たらあたしに知らせるようになっています。あなたが来る前に講じておれば良かったですがね。もう一人のお仲間がいらしたら早速計画を立てられるようにサイトの知り合いに文を飛ばします」

引き出しから丁寧に折りたたんだ羊皮紙を広げると印を組んで古代レーン文字の呪を唱える。

『アンズス、アンスル、オス』

ぶつぶつ呟きながら印を組んで指で羊皮紙の上をなぞっていくと尖った物で引っかいたような文字が浮かんだ。

それを畳むとダニアンは印を組んでさっきとは違う文字を空に描いた。羊皮紙は途端に姿を変えて大型の猛禽類の型をとると、机の上から力強くはばたいて空へ飛び出していった。

「こりゃあたまげた」

ウィリアムが感嘆の声を上げるのにダニアンは構うことも無く机の引き出しをばたりと閉める。

「何を呆けた顔をしてるんですか。あたしだって魔道師のはしくれなんですからね、術くらい使えます」

人の良い男に見えるこの魔道師もやはり裏がある　魔道師の一見おとなしそうな外見に騙されると痛い目にあうのだ。

高位の魔道師になればなるほど内面は外からは窺いしれない。

州宰代理だったこの男も間違いなく魔道師、なのだ。

アリスローザはしかし、ダニアンが仲間になってくれたことに大きく安堵のため息をつく。

レイモンドール国の魔道師の祖であるイーヴルアイが三年前に死んだ事により、国を覆っていた結界は消えた。

そして彼の僕である竜印を授けられていた上位の魔道師たち二百人あまりが一瞬で消えたのだ。

この国を動かしていた上位の魔道師たちが居なくなった事でこの国は今、混乱の極みにある。その上位の魔道師たちに仕えていたのがダニアンら次位の魔道師だった。竜印が無い為、主と同じように長い寿命となっていたわけでは無いがそれなりの術を使う上級の魔道師である。

「さっきのは便利だな。おれにも貸してくれないか」

「おいそれと貸すものではありませんし、あなたの汚い手で触ってほしくありません。さっさと湯でも使ってきれいにしないと牛に変えますよ」

ダニアンの言葉に慌ててウィリアムは浴室に姿を消す。

「ダニアン、あなたそんな事ができるの？」

「出来るわけじゃないでしょう」

アリスローザに不機嫌そうに応える魔道師はそのまま立ち上がって歩いていく。

「どこに行くの？」

「晩はとうもろこしの粉のパンにかぼちゃのシチューにしますんで納屋にとうもろこしの粉を取りにまいります」

「パンね、わたしも手伝うわ」

「いいえ、結構です」

アリスローザの申し出をばさりと断ってダニアンはそそくさと室を出て行く。

もう、自分のペースを乱されるなんて我慢がならない。 まったくこれだから、身分の高い者と付き合うのは嫌なのだ。

何のかんと言つて、最後は自分の思うとおりになんか動くと思ひ込んでゐるのだから。

酷い目にあつたと言つてゐる本音は今いる、小さな廟主として落ち着いてほつとしていたのだ。

ボルチモア州候や、気の強い州宰に仕えていたときは、本当に神経をすり減らす毎日だったのだから。

早く事が収まってあたしを放つておいて欲しいもんだ。

ダニアンは今日何度目かのため息をついて、とうもろこしの入っている麻袋の中から器にすくおうとした手を止める。

「これごと運んだほうがいいかもしれない。どれだけ食べることやら……」

ぶつぶつ言いながら麻袋を引きずっているダニアンは、すっかり自分でも気付かぬうちに賄い婦気分になっていた。

6・二人目の男

もう一人の男、ステファンがサイトスからやって来たのはそれからたつぷり十日経った夜更け。

インクで塗りつぶしたような何も見えないほどの闇の中に響く、金属をカンカンと叩くような音が聞こえて。

「誰か来たようですよ、結界を破った者がこちらへ向かっています」
ダニアンの声に緊張の面持ちで戸の両側にアリスローザとウィリアムが剣を構えながら潜む。

手燭を持ったダニアンが戸の向こう側に向けて声をかける。

「誰かいるんですか」

「モンドの蝶は、蜘蛛に捕わる。だったよな」

その声を聞いてウィリアムが相好を崩して戸を勢い良く開けた。

「ここでもよかったんだよな、ウィリアム」

戸の外に立っていたのは一見魔道師かと思うほど細面の神経質そうな少年と言っているくらいの子供の顔の男。

その男の首にがしりと太い腕を回して引っ張り込んだウィリアムが反対の手ではんばんとその男の背中を叩く。

「ステファン、相変わらずがりがりだなあ。おまえ飯食ってんのか」

「あんたも相変わらず、おっさん臭い上に言う事は食べ物のことばかり、だな」

笑いあったステファンの目がウィリアムの後ろにいたアリスローザへと移る。

笑い顔が固まり暫く無言のままだったが、思いきったようにアリスローザに声をかける。

「久しぶり　あんたに会うのは不本意だったけどぼくも……加わることにした」

「ありがとう、ステファン」

ぼく、と言った男はやはり歳もアリスローザと同じくらいか、わ

ずかに上なのか。大人の分別を見せるウィリアムと違ってまだこだわりを持っているらしい。

が、しかしそれを押さえて挨拶するステファンにアリスローザはそれでもありがたいと思った。

「おまえも疲れたろう、飯にするか」

回した手をそのままにウィリアムが顔を魔道師に向ける。

「まさか、寝るよ」

断るステファンの声に魔道師もすかさず応じる。

「あたりまえですよ、いい加減にしてください。何時だと思っているんですか」

ダニアンの不平めいた言葉にもウィリアムは気にする風も無い。

「そうか？ おれは何か小腹が減ったんだけどな。ステファンにかこつけて飯が食えると思ったが仕方がない。朝まで待つとするか」

「おっさん、いいからとつと寝ろ」

ステファンの遠慮の無い言葉にダニアンは大きくうなづいた。

まったくいい加減にして欲しい。

そして ステファンと言う男。これはまた、やっかいなことが増えた。

魔道師は顔を曇らせてつぶやく。

「あたしは呪われているみたいだ」

朝の日差しが窓から差し込むのをアリスローザは寝台に腰掛けながら眺めていた。

朝の光は何と美しいのだろう。

それは闇を越えて、生まれたばかりの光だからだろうか。

あれから目が冴えて一睡もできなかった。

ステファンの態度に少なからずショックを受けているのを認めないわけにはいかない。三年前の出来事の責任はわたしにある。

自分も父親に踊らされていたなどと逃げることは出来ない。

上に立つと決めた瞬間に大きな責任をも背負うのは定めだったのに　自分は気付いていなかった。

自分のしている事の後ろにある抱えなければならぬ諸々の事などわかっていなかった。しかし、わかっていたならあまりの大きさに自分は潰されて動けなかったろう。

今は、こうしてステファンの言葉、態度、そのわずかに咎める気配一つでこんなにも動揺している自分。

そこへ戸を無遠慮にどんどんと叩く音がして、驚いて開けるとそこにいるのは大柄な男。

「あ、ウイリアムお早う。すぐ降りるわ」

「なあ、気にするな。と言ったって気にするんだろうが。おれたち関わった者は皆一様に被害者でもあると同時に加害者でもある。ただな、今度は失敗なんてごめんだ。物事を見誤るのもな。前を向いて行こうぜ、アリスローザ」

首の後ろを掻きながら一気にしゃべると返事も待たず、ウイリアムはすたすたと階段を降りて行く。

「ウイリアム、ありがとう」

降りて行く男に後ろから声をかけると男は振り向かなかったが。

「おれって良い事言うだろ？　惚れたか」

へへっと笑う声が帰ってきた。

7・ 始動

食堂に降りるとステファンがダニアンを手伝って朝食の用意を整えている。

「お早う、ステファン」

アリスローザの声にぎこちなく一拍おいて、ステファンは皿をテーブルに置きながら顔を向けた。

「お早う、すぐに朝食の用意ができるよ」

「わたしも手伝うわ」

「いいですよ、止めてください」

ダニアンがすかさず間に入ってばさりと断る。

「手伝うのはステファンだけでいいですよ。あなたがやると手間が余計にかかります。さつさと座ってください」

朝食を済ますと、ウィリアムが食器を片そうと立ち上がる魔道師を制してステファンを見る。

「サイトスの様子を教えてくれ」

「そうだな」

ステファンは椅子に深く座りなおしてウィリアムの方へ向く。

「祭祀庁はまた魔道師庁と名前を変えたよ」

「で？　どういう事なの」

名前が戻ったことがどういう事なのかアリスローザはわからず、ステファンに問いかける。

「前にレイモンドールの政務を担っていた頃の名前に戻したって事はその意思があるって事だと思う」

「前に戻るですって？」

あまりの事に声が裏返ってしまうがそんな事を気にする暇も無い。あれ程大変な思いをして政治から魔道師を排除することにしたというのに。

王の初心表明、初勅の内容を王自らがこつも早々と破るつもりな

のか。

「それでハーコート公はもうサイトを出了たのか」

「ああ、ぼくがサイトスから出た五日後に出るはずだったからあと十日ほどでこちらにさしかかると思う。仲間の何人かを護衛の兵士に紛れ込ませているが」

「そうか おれはちよつとこれから出てくるよ」

ウィリアムは言うが早いか立ち上がった。

「どこへ？」

「おれもつては持つているんだ。州境から街道沿いに見張らせる手配をしてくる」

そこへ大型の鳥の羽ばたきが聞こえる。皆の注目が窓に集まる中、ダニアンが窓を開けるとふわりと彼の腕に飛び込む。

その姿は瞬時に一枚の羊皮紙に戻った。その羊皮紙を丁寧に広げて目を通していたダニアンが顔を上げる。

「ハーコート様の馬車は三台、真ん中の馬車にハーコート様が乗られておられるようですね。荷馬車が十台。随従している兵士が三十名ほどもです。見た限りでは魔道師はいないようです。なにぶんお急ぎの事で人数を絞っているようですね。宿泊の予定地と宿の名前が書いてありますよ」

「ダニアン、おまえの知り合いって誰だ？」

詳しい内容に驚いてウィリアムが尋ねる。

「そんな事言うわけないでしょう。魔道師の口は堅いんですからね」人が良いのか、悪いのか。仲間になったからといってこの男はすべてを仲間と分かち合おうとは思ってないようだった。

「じゃあ、ぼくはアリスローザとダニアンの三人でモンド州に行つて来るよ」

「モンド州に？ わたしが……」

自分の名前が出てきたのに驚いてアリスローザがステファンを見る。

「ダリウス様に会って州兵を差し向けていただこうと思ってさ。事

の真相がわかったら手を貸してくださるだろう。そのためには顔を知っているアリスローザがいたほうが話が早い。それに　上手くいったらモンド州を拠点にできるかもしれないだろう」

モンド州が味方になったらそれは大変な事だ。三年前にぼろぼろになってしまった州が多い中でそれまで州府に魔道師を置いていなかったモンド州はほとんど影響を受けなかった。

今ではレイモンドール国の中で一番栄えているといっている。

首都サイトを凌ぐとさえ言われる州になっているのだ。

隣の州の誼でアリスローザも以前は何度となくモンド州を訪れていた。それが少しでも役に立つなら勿論行かなくては。

「それにしても大胆なことを考えるわね」

アリスローザの言葉にステファンはちらりと冷たい視線を走らせた。

「ぼくはやると決めたら中途半端なことはしたくない。できるか、できないかわからないけど精一杯やる、なんて気持ちで関わるんだつたら止めて欲しい」

「ステファン！」

ウイリアムの大声にステファンは黙って横を向く。

「やるわ。いえ、やらせてステファン。あなたの期待に応えてみせる」

「ステファン」

ウイリアムに促されてステファンは顔を背けたままアリスローザに答える。

「言い過ぎた。あんたがいないとモンド州に行ってもぼくだけじゃ話なんか聞いてもらえないだろうし。その点ではあんたはやっぱり必要だ」

「おいっ！」

ウイリアムはため息をついて横を向いたままの若者を見たが、これでも相当譲歩したつもりなのだろう。　ぶすっとしている若い仲間をやれやれと眺めた。

「で、何であたしまで行かなきゃならないんですか」

「あんたはさっきの鳥を飛ばしてハーコート様にダリウス様あての手紙を書いてもらってくれ。メッセージを届けるくらいの術はできるんだろ？ それとモンド州には魔道の本拠地があっただ。あんたが行ったら何かわかることがあるかもしれない」

「そりゃあ、できますけどね。本当に人使いの荒い」

「じゃあ、それぞれ十日後までにはここに帰ってくる事。行ってくる」

ウイリアムはそう言うと言と大きく戸を開け放って出て行った。

「わたしたちも出発しなきゃね」

「その前にこれを片付けなくては」

食器を手にダニアンは立ち上がった。

それから出発までたつぷり一刻半もかかってしまった。と、いつもの旅に出るのだからとダニアンが廟の掃除をさせたせいだ。

そのあと、飼っている鶏の世話を近所の農家に頼みに行つて、そこから何とか馬を二頭貸してもらつ手筈を整える。

それから弁当を作つて……ということだ。ダニアンの支度の遅さに辟易したステファンが引きずるように廟を出たのであった。

「馬に一人で乗れる？」

「自慢じゃありませんが馬には触ったことすらありません」

二人がかりで馬の上に中年の魔道師を乗せると、アリスローザがその後ろにひらりと跨った。もう一頭の馬にステファンが乗って先に進める。

「急いで行こう。走らせるぞ」

「ええ？ 落ちちゃいますよ」

「大丈夫、しっかり捕まえててあげるから」

ダニアンの悲鳴と共に二頭の馬は土煙をあげて街道を駆けて行つ

た。

それから二日後。

昼食時にハーコート公は休憩用に入った宿の部屋で寛いでいた。そこへノックの音がして声がかかる。

「宿の者がお茶を差し上げたいと参っておりますが」
外に控えている兵士の声にハーコートが応えた。

「よい、入れ」

入って来たのは若い女。慣れた手付きでお茶を入れて軽食を皿にいくつか持ってテーブルに並べながらハーコートの顔をまっすぐに見つめる。

「ハーコート様、お話があります」

ところが、うら若い女の口から出てきた声は低い男の声だった。

「おまえ 何ものだ？」

「お静かに。モンド州におられるご子息はご健勝であらせられますよ」

女の言葉にハーコートは声を落とした。

「詳しく話を聞こうか」

その後、ダニアンのメッセージを伝えた女は口を閉じる。ハーコートの書いた手紙を受け取ると女はお辞儀をして下がって行く。

そのまま兵士たちの間を通り抜けて階段の脇に降りると、女の姿は溶けたようにドレスがくたりと山になる。

その服の中から大型の鳥が顔を出す。鳥は器用に窓を足で開けると飛び立っていった。

8・伝えたい事

アリスローザら一行は三日かかる行程を二日ほどで駆け抜けて、モンド州の州都エリアルに入った。州境の関所もダニアンのおかげで難なく通り過ぎることができたのだ。

この中年の魔道師を仲間に引き入れることが出来たのは本当に幸運といっていいだろう。州城内に入るのには何かと面倒らしい。と、するならば。

「ダニアン、お願いするわ」

「これだけこき使ってるんですからペンダントの件はよろしく願いますよ」

魔道師は印を次々組んでレーン文字を唱える。

州城の門番が目の前にいる魔道師に型どおりの質問をしていく。

「何の用でここに来た？」

「州公代理のダリウス様にお会いしに」

「何者だ？」

「さて、何でしょうか」

「入れ」

聞いている事に適当に応えているのにも関わらず、門番は三人をそのまま通す。

ダニアンが澄まして入って行くのでアリスローザとステファンも慌てて遅れまいと小走りして後を追った。

「やっぱり魔道師に権力なんて持たしたら大事になるわね。おそろしいわ」

「利用するだけ、利用してそんな事を言うあなた方のほうがよっぽど怖いですよ」

アリスローザの言葉に鼻息荒くダニアンが返したところで、三人は主城を見上げた。そして彼女は顔をこんもりとした小さな森に目を向ける。

「この森の奥にイーヴァルアイの住んでいた城があるのよね」

「先に行ってみよう」

「さ、さようでございますね」

期待に目を輝かせるダニアンがわれ先にと足を進める。思いのほか歩いた先に灰色の武骨な外観を見せる館が姿を現した。

ダニアンが扉に手をかけると耳障りな音を辺りに響かせながら扉はあっさりと開く。

暗い室内に足を踏み入れると、放っておかれた家が大概そうであるように埃と蜘蛛の巣が室内を覆っている。

「贅沢な品ばかりだな。だが魔術に関する物なんかどこにもないけど。本当にここが魔道師の祖、イーヴァルアイの住まいだったのかい？」

「ユリウスというのがイーヴァルアイだったんだからそのはずだわ」ステファンの問いにアリスローザが答えた後、手分けして三人がてんでに屋敷内を捜し始めて半刻ほど経った頃。

「ありましたよ、痕跡が」

何ということもない壁に手をあててダニアンが二人を呼ぶ。

「どこに？」

「ここですよ。ここに呪がかけられております。しかしあたしにはここを開けることなど出来はしません」

「出来ないの？」

「何でもかんでも出来ると思ってらっしゃるんなら大間違いですよ、アリスローザ様」

無然とするダニアンの横から同じように壁に手を触れようと身を乗り出したアリスローザの首からかけたペンダントが淡い光を出すと壁にうつすらと模様が浮かび上がった。

「こ、これは」

アリスローザが模様だと思った物にダニアンは手を触れながら口に出していく。それは範字とよばれている大陸の東で使われている文字だ。

特に古代バラナシで使われていたという古代文字はその字、一つ一つに力がある。レイモンドールの上級魔道師はそれを学ぶことは必須であるのだ。

それを読みながらその示唆する印を慎重に組んでいく。最後の印が組まれた後、壁はいきなり抜けたように大きな穴が開いた。

「あたしが降りて見てまいります」

ダニアンの言葉にアリスローザが続ける。

「わたしも行くわ。ペンダントの力で開いたようなものでしょう？ 何かあったらこれがいるわ」

「じゃあ、ペンダントをあたしに貸してくださいればいいでしょう。自分の身もどうなるかわからないのに一緒になんて嫌ですよ」

手を出した魔道師の手をアリスローザはぱんつと払う。

「だめよ、ペンダントが欲しいならわたしを連れて行きなさい」

「わかりましたよ、むやみにそこら辺触らないでくださいよ。まったく」

壁際にあった燭台に呪で火を点けるとダニアンは足を慎重に進める。

燭台の明かりが照らす足元以外はまるで見えず、アリスローザは彼の肩にしがみつくように階段を降りて行った。

下についてそこにある燭台全部に明かりを点けると、その部屋の様子にダニアンは声を上げて書棚に走った。

「おお、ここにある書物はどれも大変に貴重な物ばかりです。これは、物質移転の……これは多重結界ですよ。ここはまったくお宝の山です」

興奮して次から次へ本を取り出しては喜びの声を上げるダニアンの横で、アリスローザは部屋の雰囲気にもまれて暫く立ち尽くす。

この地下室は上と違って塵一つ落ちてはいない。天井にはびっしりと円が何重にも描いてあり、その円の中に彼女にはわからない言葉や記号がびっしりと描かれている。

四方の内、三方までが天井まで届く書棚になっている。その中

には丸められた巻物や立派な装丁の書物がぎっしりと詰められていた。

書棚の前には長椅子が置かれていてその上にある、薄い絹のシャツ。

「これは クロードのかしら」

広げて見て大きさをみるとちょうど覚えているクロードの体に合うくらいだった。アリスローザはそれを持ったまま離せなくなってしまう。

ここでクロードは魔術の勉強をしていたのか。

急にこの見覚えの無い部屋に愛着を覚えてアリスローザはぐるりと部屋を見回した。

書棚の無い一方の壁には広い机がびつたりと付けるように配置され、その上には外国語で書かれた本が開かれたまま置いてあった。

そこに挟んだようにある一枚の便箋に流麗な筆跡で走り書きがあるのを見つけてアリスローザはその本を引き寄せる。

『もし、おまえを置いてわたしが居なくなることがあっても悲しくないでほしい。クロード、わたしの弟。いつまでもおまえと共にいたかった。』

死ぬことを望むのと同じくらい、わたしはおまえと一緒にいたかったんだ。送ったペンダントはおまえの支えになるように大事に呪いを込めたからね。いつまでも君を思う。

愛をこめて、ユリウス・ヴァン・ハーコート』

読んでアリスローザは胸が詰まって立ち竦む。あのいつも冷静な顔を見せていたユリウスと名乗っていたイーヴァルアイ。

その彼のこんなにも感情の吐露された文を見て、自分の過去の言動に青くなる。

クロードに対して無遠慮にわたしはイーヴァルアイの死について嬉々としてしゃべっていたのではなかったか。

その時のクロードの心中を察するとアリスローザは、心臓が硬く握られたかのように感じられた。

9 モンド州エリアル

一人の人間としてのイーヴァルアイの事なんてまったく頭に無かった。 忌むべき対象としてしか見ていなかった。

だが、クロードにとっては大事な兄だったはず。 こんなにも愛されていたなんて。 そしておそらくクロードも愛していたのだ。

三年前の自分は全てにおいて何もわかってはいなかった。 レイモンドール国を支配していた魔道師の祖である、イーヴァルアイ。

だが、彼はクロードの前では偽りの身分であるモンド州州公の次男でいたかったのだろう。

だからこそユリウスとしてクロードの兄としての手紙を書いていた。 しかし、それも渡せず死んでしまった。

渡されることの無かった手紙を、持って行こうかと逡巡していたアリスローザに上から声がかかる。

「おまえたち、いつまでそこにいる気なんだ。 いい加減に上がって来い」

ステファンの声に立ち上がったアリスローザは思いを残しながらも本を三冊ほど抱えた魔道師とともに階段を上った。

もう少しで上に出るところでダニアンが足がピタリと止まる。

「どうしたの？ ダニアンったら早く上がってよ」

「足が動かないんですよ」

脂汗を流すダニアンは、しばらく自分の足と格闘していたが、はっと気付いたように自分の抱えている本を見た。

「本に呪がかかっているんですよ」

印を組んで『解』と言いながら本に軽く触れるとダニアンは足を恐る恐る踏み出した。 今度は何の抵抗も無く足が前に進んで、彼は大きく息を吐いた。

「まったく、何の音もしないし、生きたここちがしなかった。 その

ままそこで二人仲良く暮らすなんて言うんじゃないんだろうな」

ステファンは頭を出した二人の顔を見ると嫌味たっぷりに言った。

「冗談じゃございませんよ」

「それはこっちの台詞だわ」

二人が相次いで否定の言葉を口にするがステファンはあっさりとそれを受け流すとダニアンの持つ本に目をやる。

「それは？ 役に立つんだろうな」

「そのときになってみないとわかりませんがね」

そう言いながら穴に向かって先程唱えた範字の呪文を逆に唱えて印を組む。穴は瞬時に塞がって壁に戻る。

それを満足そうに見てからダニアンは持ってきた本の一冊を開いた。次いで、暖炉から埃まみれの炭状になった薪を拾って来て床に円を描いて行く。

本を見ながらその中に丁寧なレイン文字を書き入れる。半時もかかってそれをやりとげると腰をとんと叩きながらこちらを向いた。

「二人ともこの中においでください。でも線を踏まないでくださいよ。それとその二冊の本も持って来てください、ステファン」

物問いたげな二人が魔方陣の中に入ったのを確認して魔道師は印を組み始める。

「目を閉じていた方がよろしいですよ」

慌てて二人が目を閉じると、同時にダニアンの呪を唱える声も止む。

その途端、思わず体が倒れると思うほど外に引っ張られるような感覚にアリスローザは必死で耐えていた。もの凄く長く感じたがやっとダニアンの声がする。

「終わりましたよ」

目を開けた三人の前に、驚きの表情を浮かべた若い男が口を開けたまま、黒檀で出来た立派な机を前に座っていた。

長い真っ直ぐな黒髪を後ろに流した実直そうな、それでいて威厳を漂わせている美丈夫。

「お久しぶりです、ダリウス様」

アリスローザの挨拶に男は目を細めて記憶を辿る。そしてその目は大きく見開かれた。

「ボルチモア州のアリスローザ姫ですか」

男の成りをしているために思いだすのが遅れたようだ。だが、何でここに？　ダリウスは不思議に思いながらもアリスローザに手を差し出す。

「ダリウス様、警備の者を呼びましょう」

側付いていた官吏がやっと驚きから自分を取り戻して扉に向かう。それをダリウスが落ち着いた声で止めた。

「エヴァンス、静かに。この者はわたしの知り合いだ。皆も少し席を外してくれ」

「何を仰います。こんなわけのわからない者どもとダリウス様を置いて出て行くななんてとても出来かねます」

「いいから、大丈夫だ。何かあったらすぐ呼ぶから」

重ねてダリウスに言われたのとざっと見回した限り、彼のほうが剣も腕つぶしも強そうだと思った官吏がやっと立ち上がる。

「廊下に兵士を配しますからね。その者ども、ダリウス様に指一本でも触れることは許さんからね」

官吏は見下すように三人に言った後、ダリウスに礼をとって部屋を出て行った。

「気を悪くしないでくれ。このモンド州の者は魔道師をあまり見ることがないのだ。ところでアリスローザ姫、君は他出できる立場ではなかったはずだが」

ダリウスは言いながら部屋の椅子を指差して三人に座るように勧めると自分も椅子に座りなおす。

この三年、父親に代わりモンド州、州公代理として仕切ってきた

自信が彼を二十二歳という歳よりも大きく大人に見せていた。

「はい、仰る通りです。しかし、国の大事が起ころうとしているのです。ダリウス様」

「国の大事？」

ダリウスは疑わしそくに目の前にいる女性を見つめる。

10・ダリウスへの話

カナリヤのような黄みの強いブロンドの髪を無造作に後ろに括つて、粗末な男の成りをしている娘。化粧気の無い顔は少年のように見えるが。

しかし、彼女は前国王の時代、謀反を起こしたボルチモア州の州候の娘だ。

今も何を企んでのことか、慎重に対処する必要がある。ダリウスはそう思いながら彼女の連れに視線を移す。

一人はまだ未成年ふうの痩せた少年だ。赤味の強い茶色の髪。前髪は長いが全体は無造作に短く切つてある。

こちらを真つ直ぐ見る青い瞳にある、皮肉っぽい光。これまたアリスローザと似たような格好。どこかで見たような気がするが。そして中年の魔道師。

ここ、モンド州には魔道師が驚くほど少ない。この地がかつて魔道教の本山を抱えていたと言う経緯を考えると不思議なほどだ。以前この国が魔道師に支配されていた頃、他州で権威をふるっていた州宰たちはすべて魔道師だった。

しかし、ダリウスの父親が統治していたこのモンド州は、例外的に州府に魔道師を置いていなかったのだ。

そして三年前の魔道師の祖、イーヴアルアイの死後、モンド州のゴート山脈にあった数々の廟から魔道師が消えてしまつてから、この州は魔道師の気配が薄い。

そのせいか目の前にいるしよぼくれた感じの中年の男に何の感慨も抱けず、ダリウスはもう一度アリスローザに目を戻す。

「話だけは聞くとするが聞くだけに終わるかもしれないぞ」

頬杖をついてダリウスは先を促す。

「あなたのお父上のハーコート様が宰相の座を魔道師のコーラルに譲られた事はもうお聞き及びですよね」

頷くダリウスを認めてアリスローザは話を続ける。

「魔道師のコーラルは魔道師が権力を持つことを復活させて国をのつとるつもりです」

「ばかな、何を言っている。国王陛下はそんなことをお許しなるはずがない」

「いいえ」

ダリウスの言葉は即座にアリスローザによって遮られる。

「祭祀庁として権を手放したはずが、この度魔道師庁と名前を変えたことを知っておられますか。それを国王陛下はお許しになっておられるんです。いえ、その前に魔道師を宰相とされるのに是と答えておられる時点で国王陛下はコーラルの言うがままです」

「……それで？」

「このモンド州へハーコート様が向かっておられるのをご存知ですか、ダリウス様」

「父上が？」

思っていないかった事にダリウスは大きく身を乗り出す。

「サイトスにダリウス様急病のため御身が重篤な状態であるとの知らせが入ったからです」

「まさか、誰がそのような」

「ハーコート様を快く思っていない者の仕業です」

以前なら国内どこにしようとも竜道によってサイトスはおるか、どこの地の情報もわずかな時間で届いていたはずだ。が、今は伏せられている事など間諜を使って調べる以外知りようがない。

「と、いうことは父上のお命が危ないと言いたいのだな」

「はい」

思わず、全面的に信じそうになってダリウスはあやうく踏みとどまる。

「その話、裏づけがあるのだろうか。あなたの話だけでわたしが動くなどという事は出来ない」

やはり、そうなるかとアリスローザは唇を噛んだ。 自分の信用

の無さと州事を預かる者としての当然の反応なのだろう。

突然、黙って座っていた魔道師が立ち上がると窓辺に寄って窓を大きく開ける。

「ダニアン、一体何？」

驚く皆の視線を集めながら魔道師は大きく手を広げた。そこへ飛び込んできたのは大型の鳥。

「ダリウス様、これをご覧になってから、あたしどもの話をお考えください」

魔道師は鳥の足から一通の書簡を抜き取ってダリウスの机に置く
と印を組んだ。

『解』声とともに鳥は一枚の羊皮紙に戻ってダニアンの手の上にふわりと落ちる。

あつという間の手妻のような出来事にダリウスは用心深く机に置かれた書簡を手にとった。

「この筆跡は父上の」

書簡に書かれていた力強い角ばった特徴のある字は確かにダリウスの父親の物。

何度も確かめるように彼はその書簡に目を通してから顔を上げてアリスローザと目をあわせた。

「これは確かに父上の書いた物だ。わたしは今から州兵を率いて父上をお迎えに行く」

「それはダメですよ。まるつきりダメです」

ダリウスの思い詰めた声に今まで黙っていた若い男が否定の言葉で応じる。

「なぜだ、父上のお命が狙われているのだぞ」

「ダリウス様、考えてもみてください。モンド州が兵を立てて州境を越えて行くのを他州侯が黙って見ていますか。それもサイトスの方向へ向かってですよ。ぱつと見て父親を迎えに行く孝行息子になんか見えるわけがない。すわ、三年前の悪夢の再来かと大

騒ぎでしょうね」

「ステファン！」

ステファンのあまりの遠慮の無い言い方にアリスローザは叱責の声を上げる。しかしステファンは彼女のことなどいらないかのよう
に話を続けた。

「表立って兵を挙げるのは自殺行為だ。それに今はコーラルには自分の愚策が上手くいったと思い込ませるのが……良策というものでしょう？」

「と、いうことは？」

「ハーコート公には闇討ちに遭って憤死してもらいます」

「ぶ、無礼者！　そこに直れ！　許さぬ」

怒りで我を失ったダリウスが立ち上がり机を回ってステファンの胸倉を掴んで引きあげる。

「あ、言い忘れてました。ふり、ですよ。死んだ振り」

「死んだ　振り？」

「そうです。ボルチモアで密かに公をお救いした後、モンド州に隠れてもらいます。そのために信のおける兵士を一旦除隊させてからぼくらにお貸し願いたい」

ステファンが胸倉を掴んだままのダリウスに向かってにこりと笑んだ。

その様子を息を飲んでアリスローザは見つめていた。

二年前のレジスタンス活動のときも策を練るのはステファンだった。腕っぷし、というより頭の良さでリーダー格の一人として動いていた。

みんなの信頼厚いヘンリーの弟として活動に加わっていたが、実際彼があの時アリスローザたちと心を一つにしていたかどうかは今でも疑問だった。

彼は兄を助きたい一心で動いていたにすぎない。

今は　どうなのか？

11・肖像画の女

「おまえは父上のお命を確約できるのだな」

「出来ます。但し、ぼくが揃えるように言う物は例外なくすべて揃えてください」

「わかった」

そこでダリウスは自分が若い男の胸倉を掴んで持ち上げていたまま喋っていた事に気付き手を離す。

「出来ると言った言葉、忘れるでないぞ」

「ぼくはどちらか分からないことを口にしませんよ、ダリウス様」
ステファンは豪胆に言い放つと横の魔道師に向く。

「こつちには良い手駒があるんですよ。ちよつと見目は相当悪いんですけど」

「そ、それはあたしのことですか」

「他に誰がいるんだよ、はげ魔道師」

「だ、誰がはつ、は……」

「言えてないぜ、禿げだろ、禿げ」

「いい加減にしなさい。わたしの前でふざけるのはやめるのだ」

凜としたダリウスの声に二人も口を閉じるが、声を上げたダリウスが今度は怪訝な顔をして二人を見る。

「どうしたんですか、ダリウス様」

「いや、こんな事が前にもあつたような気がしたただけだ」

「州城内にもお知り合いの禿げがいたんですか」

「いや、そうじゃない。はげ、じゃなくて……」

考えに浸るダリウスを見ながら魔道師が一番働かされている自分に向けられた酷い言葉に大きくため息をついた。

早く事を収めてこんな薄情者たちとさっさと別れるのだ。

そこへ外から従者の声がする。

「ダリウス様」

「今は誰もここに入れるな。何だ？」

困ったような声の後に大きく扉が開く。

「あなた、官吏を全員下からせて何のご相談かしら」

現れたのは、はっとするほど美しい女性だった。 明るい金髪を高々と結い上げて宝石を散りばめたその姿は豪華だがそれ以上に見る者を威圧している。

サファイア色の目が厳しくアリスローザたちを値踏みしていた。

「何なんですか、このみずばらしい者どもは？」

一瞥しただけで何の価値もないと踏んだのか、女性は吐き捨てるように言々とダリウスの方へ顔を向けた。

「マーガレット、悪いが今は大事な話をしているのだ。席を外してくれ」

「あら、わたくしよりもこんな乞食まがいの者のほうが大事なんですか？」

「マーガレット」

苦い顔を見せるダリウスを見てアリスローザが席を立つ。

「わたしどもは少し下がらせていただきます。お部屋を貸していただいても？」

「うん、ああ、すぐに部屋を用意させる」

出て行く三人を見送りながらマーガレットは苛々と胸元から取り出した香水の小瓶の中身をそこら辺に撒き散らした。

「臭くてたまらないわ。あなた、あんな卑しい者たちをお城に入れるなんて我慢できませんわ。すぐに追い出してくださいませね」

「おまえの目に触れるようにはしないよ。話がそれだけならわたしは失礼する」

ダリウスは早口で言つと何か言いかけた妻を残して部屋を出て行った。

廊下を歩くダリウスはさっきのマーガレットの様子を思い出しますます顔を曇らせる。

貴族の結婚に愛なんていらなと思うていたが毎日あれでは気が

滅入って仕方がない。

一年前に王の姉であるマーガレットと結婚したダリウスだったが、あまりの彼女の高飛車ぶりに怒りさえ感じてとても夫婦らしくなどできないでいた。

（上から降される姫なんてそりゃあ大変……）

頭に浮かんだ言葉にはて？ とダリウスは考える。誰が言っていたのだっけ？ 思いだせないまま今は使われていない部屋に足を踏み入れる。

そこは彼が疲れたときに心を癒そうとこの所よく通っている場所だった。何の変哲もない部屋だがそこには一枚の絵が忘れられたようにかけてあった。

若い女の絵だ。亜麻色の髪を軽く結って紫のドレスを纏い、出窓に軽くもたれている姿。

ある日、いつものようにマーガレットとの気詰まりな会話に疲れて何気なく入ったこの部屋で、これを見た時からダリウスはこの絵の中の女性に心を奪われてしまった。

細い卵型の輪郭。 淡い水色の瞳。 小鼻のすっきりした高い鼻。そして薄情そうな薄い唇。

一見冷たい感じを与える美貌だというのになぜか彼には好ましく親しく感じられた。

おかしいと、絵の中の女に恋着するなんて、自分は今の結婚をどれだけ疎ましく思っているのかとそのせいに見てみるが。

知っているような、そうだ。 生身の彼女をわたしは知っている気がする。 絵の中の女の頬に触れてダリウスはそっとつぶやく。

「おまえは一体何者なんだ」

12・ ステファンの策

一方、従者に案内されて城内に行く三人の前に飛び出すように出てきた女性がぶつかると少し手前で危うく止まる。

「あら、ごめんなさい　って、貴方たち誰？」

あまりにも城内に似つかわしくない三人に目を丸くしてその女性は手前の官吏に尋ねる。　よく見てみると、女性といってもまだごく歳若いのだとわかる。　大きな黒目がちの瞳に興味深々と書いてある。　そして……。

「アリスローザ姫じゃなくって？　そうだわ、何で男の格好をしていらっしやるの？」

「あ、エスペラント様。お久しぶりですわ。でもここでわたしの名前を大声で仰るのは御止めください」

「どうして？」

「わたしがお尋ね者だから、です」

「お尋ね者ってどういう事かしら？　ダリウス兄様に会いにいらっしやたの？」

「ええ、でも奥様が……奥様ですよ。いらっしやったのでお邪魔かと思い退室したのですけど」

「お邪魔と言えばあの女こそ、最大のお邪魔なのよ」

声高らかにエスペラントは言い放ってからアリスローザに顔を寄せてひそひそと続ける。

「サイトスから来たと思って偉そうだったらないのよ。夫であるダリウス兄様や、お母様、にまで上から物を言うみたいな態度なの。わたし、大っ嫌い。あの女がそこら中に撒き散らす香水ごとこの城から捨ててやりたいわ。ここは田舎の匂いでたまらないんだそうよ、あのお姫様には」

最後の方は自分が声を落としていた事なんてすっかり忘れてエスペラントは声を張り上げていたのだが。

「では、あの方はクロードのお姉さまのマーガレット様なの？」

アリスローザの方へエスペラントが自分の口に人差し指をつきつけてシー、と言って眉をひそめる。

「クロードの名を口にするなんて。王陛下の姉君でしょ、それを言うなら。彼は重罪人なのよ。それを友達みたいに口にするなんて」

エスペラントは慌てて厄除けのおまじないをして咎めるような顔を見せる。

「やっぱり覚えてないのね」

落胆したように自分を見るアリスローザにエスペラントは意味がわからず、目の前の男装の女性を見返す。

その様子を見たアリスローザは、クロードが自分を覚えている人が必要だと言った事はこういう事だったのだと実感する。

このモンド州の州城内から次男のユリウスことイーヴアルアイや三男クロードの存在は消えているのだ。

「いえ、なんでもないのよ。変な事を言ってますみません」

「いいえ、こちらこそ久しぶりにアリスローザ姫に会えて良かったわ。もう少ししたら会おうと思ったってどうにもなくなるもの」

エスペラントの言葉に首を傾げたアリスローザへ悪戯っぽい目を向けて彼女は笑った。

「わたし、結婚するのよ。まあ有り体にいえばあの女に追い出されるってわけなんだけど」

そう、とアリスローザは幼さの残る少女を眺めた。十五歳か十六歳、そんな頃だったはず。

早すぎるわけではないが、かわいそうになってエスペラントの手を両手で握った。

「おめでとうと言っていいのかしら。どちらにお興入れになるの？」

「ローデシア州よ。南国のザーリア州のすぐお隣。ねえ、アリスローザ様。わたしに同情していただかなくてもいいのよ。そりゃあ、まだわたしは若いし相手の顔なんかわからないけど。ここを出て行けるのならそれでいいわ。暖かい所に行けるなんて楽しみだもの。」

そう言い聞かせているわたしは偉いでしょ」

ころころと笑うエスプラントを見て世間知らずだと思いつつもそれを羨ましいとアリスローザは思った。こんな顔はもうわたしには出来ない。

エスプラントと別れてやっと三人は案内された部屋に入った。

「まったくいつまで続くかと思ったよ。女つてのは身分の如何いかにに関わらず井戸端会議が好きときてる」

ぶつくさ言うステファンに控えめに魔道師の男もうなづく。

「だからあたしは女の人苦手なんですよ」

「だから男の人が好き、なんて言うんじゃないでしょうね、ダニアン」

「そついうところが嫌なんですよ」

揚げ足を取るアリスローザに嫌な顔全開で魔道師は応じた。

誰もいないかと思っていたのに案内されたその部屋の壁の前に、執務室で別れたはずのダリウスが立っていた。

しかし三人が騒いでいたのにも関わらず気付く様子も無く、彼は壁に掛けられていた一枚の絵を眺めている。

「その絵はユリウス様　あ、女性のお召し物だから違うのかしら」とい口にした言葉にダリウスが反応して振り向く。

「知っているのか、この者の名前を」

あまりの熱い視線に驚いてアリスローザはしまったと後悔する。

「わたしの知っている方にとってもよく似ておられますが違うと思うんです。申し訳ありません」

「なぜ、違つとわかるんだ？　教えてくれ、誰に似ているというのだ」

「それは……」

「イーヴァルアイ様！」

口を閉ざしたアリスローザの横を走り寄つて来た魔道師が嬉しそつに名前を言った。

「イーヴァルアイ様ですよ。しかし、何で主の絵がモンド州城に

？　しかも女物をお召しになつておられるのは？」

アリスローザは夜着とはいえ、以前イーヴアルアイの女装姿を見ているのでこれが本人に限りなく似ているとわかっている。

でもここでそれを言ってもどうなるのか。　ダリウスに説明など出来ないこともわかつていた。

「それより先程の件だけど」

ステファンが話を強引に変えるのを今は助かったと思いながらアリスローザは息をつく。

「そうだな、州軍の内、諜報を得意とする組織があるがそれに任を与えてはと思う」

ダリウスも切迫している状況を思い出して事務的な顔に戻った。

「いきなり、州軍で表立つて何人も辞めてはおかしいし。それでいいですよ」

「しかし、三十人ほどしかないぞ」

「密かに行動するから充分ですよ。第一、そこで交戦はしないんだから」

ステファンの言葉に尚も心配そうにダリウスはいらいらと右手に作った拳を左手に打ちつける。

「一体、どんな策だというのだ？」

「今言っちゃうんですか。ぼくとしてはもっと出し惜しみしたかったんですけど」

ステファンはにまりと笑うと横の魔道師の男の腕をつかんで引き寄せた。

「この魔道師先生にちよつと手妻を披露してもらおうと思っているんですよ」

「手妻？」

「本気になさっちゃありませんよ、ダリウス様。あたしが使うのは呪術ですからね。手妻なんかと一緒にされたくありません」

掴まれた腕をおおげさに振り回してほどくとダニアンは尊大な態度を取る若者の手の届かない所まで下がって嫌そうに首を振った。

「おまえたち、仲が悪いのか？　まあ、そんな事より話を続けてくれ」

そうですねと、顔をダニアンに向けたままステファンは口を開く。
「ボルチモア州に入るのを確認したら公をすりかえて」

「すりかえて？」

「それで終わりです」

「お……終わり？」

妙に居心地の悪い沈黙が流れてその場にいる一人以外、声をつかの間失っていた。

「で、その後どうするつもりなのだ？」

いち早く気を取り直したダリウスにステファンはうつそりと笑う。

「はい、ぼくもモンド州でやっかいになりたいと思ってます」

「それで？」

「正式にダリウス様が州公になる任命式を受けに行く際にサイトスへわたしどもと一緒に行ってもらいます」

一端口を閉じてステファンはダリウスを強く見つめる。

「それまでに内々に各州候に渡りをつけておいて。その後、サイトス城内に入って任命式の時、コーラルの首を取りたいと思ってます」

「首を……取る」

「ごくりと唾を飲み込む音がする。青い顔をしているダニアンという男。それは、コーラルと同じ魔道師ゆえのことか。」

ダリウスは自分が足を踏み入れようとしている事のあまりの深さに、暫く息を飲んで目の前の若い男を眺めた。

13・ダリウスの決意

父親を助けたいと思う気持ちの先に待つものはボルチモア前州公と同じ扱いを受ける自分だ。

謀反を企てた事による斬首。

いや、斬首を恐れているわけではない。その不名誉な罪名ではない。彼が恐れているのは、州公がいなくなった為による州府が働かなくなるということ。

すなわち、州に住む者の生活に多大な混乱を引き起こすということに彼の心は痛むのだ。

「わたしには民の生活を守る義務がある」

「短慮はダメですよ、ダリウス様。今だけをいうならこのまま知らん顔を決め込むっていうのもありだと思いますが。コーラルが実権を握ったらこの州だって今の状態を保ってなんかられないと思うけど」

「少し考えたい。一人にしてくれ」

ダリウスの言葉にステファンは頷くと、立ち上がって他の二人を伴って外で待っていた官吏の案内する部屋に入った。

「ダリウス様はわたしたちの計画にのるかしら」

「のらざるを得ないと思うけど。父親の命がかかっているんだからな」

アリスローザの問いにあっさりとステファンは答えるが自分でも少し心配しているのか、浮かない顔を見せる。

レイモンドール国は今、中央の権威より各州候のほうがあるのだ。

結界をこの国に張っていた魔道師の祖イーヴァルアイが死んで、国中に通っていた竜道というパイプを失ったサイトスは有力な州のやり方に異を唱えることも今は出来ない。

レイモンドールは、遙か昔の魔道師が支配していなかった頃。

五百年前の小国の集まりに戻ったかのようだった。

各州の州境の警備は強化され、人の往来にも厳しくなる。

であるからこそ、ダリウスにはここで父親の命と引き換えに、この争いから身を引いて傍観するという道もないでは無いのだ。

執政者として真面目であるほど彼は悩む事だろう。

「すぐお父さんつ子だったらいいんだけどな」

「大見得切ったんですから、最後までちゃんとやってくださいよ。

でないと、あなたたちがただで飲み食いした分、きっちり払ってもらいますからね」

「ちえっ、そんなケチ臭い事言ってるから禿げるんだよ、おっさん」

「なっ！」

「ちよつとあなた達、静かにしてよね」

二人の男たちはアリスローザの言葉にあっさりと黙り込んだ。

ふざけていたのは内心の緊張を紛らわすためだったのかもしれない。

たつぷり二刻ほども待つてから官吏の一人が部屋の戸を叩いた。

「ダリウス様がお三方にお会いになるそうです」

ダリウスの私室のほうへ案内された三人はぎこちなく部屋の入り口にかたまっていたが。

「こちらへ来てくれないか。話がある」

ダリウスにうながされて部屋のテーブル近くにある椅子に座った途端。

「わたしは父上をお助けして、おまえたちと共にコーラルを討つことを決意した」

いきなり核心の言葉を口にしてダリウスは向かい合う三人を見つめた。

「では、使い魔を残していきますので連絡はこの物をお願いします。あたしたちからの伝言もこれを通しておこないます」

右端のしょぼくれた感じをみせる魔道師が立ち上がったて懐から羊皮紙を取り出す。次いで放たれる言葉。

『アンズス、アンスル、オス』

印が素早く結ばれた直後に羊皮紙は姿を変えた。

うら若い女官の姿の女に変わったのを驚いて見つめるダリウスを残し、三人は部屋を出て行く。

「さっきの魔方陣でさっさとボルチモア州に帰ったほうがいいんじゃないの？」

「あれはそんなに遠距離には対応していませんよ。何せ、前は竜道がありましたからね。長距離を繋ぐ魔方陣なんてこの国にはありません。とにかく……」

アリスローザにそう返してダニアンは二人に向く。

「魔道師は血統だとかでなるんじゃないですよ。魔術は学問と同じです。基本にのっとって勉強し、練習を重ねて会得していく物です。あなた方だってやろうと思えばできる物です。まあ、魔道師になるにはそれ相等の覚悟が要りますが。魔道師だからって何でもできるなんて事はありません。身につけていない術なんてできませんよ」

「そうなんだ。ぼくはてっきり魔道師なんて生まれつき何かの印でも付けて生まれてくるのかと思ってた」

苦々しく言う、ステファンの言葉にアリスローザも内心こっそうとなづいていた。

魔道師は一般の人間と初めから違っているのかと……気がつかないうちに彼らを差別していたのだろうか。

「生まれつきだなんて。あなた方が頭に思い浮かべているのは魔法使いじゃないんですか？ そんなものはおとぎ話ですよ。言っておきますけど、わたしは金物屋のせがれでしたよ」

うんざりした顔を二人に見せて中年の魔道師は体を返すとすたすたと歩き出す。

「おい、偉そうにしているんなら馬にも一人で乗れよ。はげ魔道師」
背中にかけられたステファンの言葉にぎくりと肩を振るわせて急にさがるようにダニアンはアリスローザを見た。

さっきまでの威勢はどこへやら。ダニアンはいつものしよぼく

れた中年の男に戻る。

「仕方ないわね。一緒に乗ってあげるわ。ただし、とばすわよ」
がつくりとうなだれる魔道師を馬の上に押し上げてモンド州城内
の馬丁の男に一頭返すと二頭の馬は走り出した。

14・ ウイリアム

二日後、ボルチモア州の小さな廟。

三人を出迎えたウイリアムは意味あり気にゆっくり見回す。

「で、成果は？」

「うん、モンド州はこちら側に付く」

ステファンがどうだ、と言う顔を見せてウイリアムの横を通り過ぎて中に入って行った。

「で、あなたのほうはどうなの？」

「おれ？」

アリスローザの方へ体ごと向けてウイリアムがその手を彼女の肩にぽんつと置いた。

「ハーコート様の一行が通る予定の街道沿いに仲間を配置したぜ。どこで本人とすりかえることにしたんだ？ ステファン」

ウイリアムにそうだなあと、ステファンは地図を眺めていたが。

「何をするんだ？」

ステファンの取った行動にまわりも驚く。彼は懷から出した短剣をウイリアムの喉元に突きつけていたのだ。

「何のまねだ？」

「ステファン、あなた何しているのよ。離しなさい」

「ステファン、ここを血で汚すなんて絶対嫌ですよ」

最後の言葉だけ、何を心配しているかわからないものだったが、ステファンはふざけた風でもない。

「ぼくは二人助かったって聞いて、実はあんたを疑っていたんだ」
短剣を握ってないほうの手がアリスローザに向けられる。

「それを見極めるためもあった、あんたをモンド州に連れて行っただけどき。違うみたいだったな」

そんなことをステファンが考えていたとはアリスローザはちらり

とも思っていなかった。

「で？ 何で俺なわけ？」

すっとぼけたような声音で言うウィリアムにステファンの短剣がすいっと赤い筋をつける。

その赤の線が滲んでいく。

「すりかえる、なんてぼくはここにいる時、一言だつて言っていないぜ、おっさん」

ステファンの言葉に廟内の気温がすうっと下がった。

「言つてなかったっけ？ おかしいなあ」

ふざけた口調はそのままに突きつけられた剣をあつきり弾くとウィリアムは背後に飛び退いて腰からスラリと剣を抜いた。

「はは……おれとした事がうっかりしていたな。二人つていうのもアリスローザは別だと思はずと思つてたんだが」

「コーラル側に寝返っているのか？ おっさん」

「どうなの？ ウィリアム」

頼りになると 思っていたのに。 アリスローザはいきなり頭を強打されたようにふらりとよろめいた。

また、わたしは三年前のように見誤つたの？

戸惑うように見ると不敵に笑う細められた目とぶつかつた。

「悪いな、だがおれはコーラル側つてわけでもない。まあ黙つてたこともあるが」

「まあ、座つて話を伺いましょうよ、皆さん。お茶が入りましたよ」
ひやりとした空気をぱつさり切つて和やかな声が聞こえ、淹れたてのお茶の香りが広がる。

「そうだな、そうさせてもらおう」

にやりと笑つたウィリアムが剣を腰に納めてどかりと座る。

「おっさん！」

「ステファン、落ち着いて。ウィリアム話を聞かせてもらつたよ」
嫌がるステファンの右手を強引に引いてアリスローザは自分の横

に座らせた。

その横で素早く目配せするのをステファンが見逃すはずも無く。

「こら、はげ魔道師とおっさん。おまえらどっからつるんでいやる？」

鋭い声が飛ぶ。

「止めてくださいよ。あたしだってモンド州に行く直前までこの人が（その人）だなんて思いもしなかったんですからね」

「その 人？」

「おれはあの三年前とっ捕まって殺されそうになったのは本当だ。おれは死んだことになっている」

問いかけようと口を開けたアリスローザをまあまあといさめて。

「おれの命を助けてくれたのはあんたの想い人だぜ、アリスローザ」
思わず我をわすれて立ち上がりかけたのを今度はステファンが止める。

「クロードが？ 一体いつの間に」

「三年前、サイトの地下宮に繋がれたんだ。そのとき彼がひよっこりやって来たんだよ、一人でさ」

「じゃあ、あの時あなたも地下宮に居たの？ 知らなかった そんな事クロードは一言も言わなかったわ」

またしてもクロードにしてやられていたとアリスローザはため息をついた。 わたしにだけ会いにきたと自惚れていたのに。

「ちよつと、おっさん」

ステファンが食卓を叩く。

「何だ？」

「今、サイトの地下宮に居たとか言ったよな？」

「ああ」

「あんた一体何もんだ？ 貴族じゃないとあそこには行かないはずだぜ」

あっと思いいながらアリスローザはステファンに顔を向けた。

15・先の先

「おまえって要らん事ばかりに鼻がきくよな。俺はボルチモアの將軍、トレンスの弟だ。これで納得したか」

そうだったのかとアリスローザは改めて目の前の陽に焼けた人好きのする逞しい男を見上げる。 合った途端に細められる目。

「彼は俺におまえの事を頼むってさ。おまえがもしまた、お転婆な事をしたら助けてやって欲しい。そう言って獄から出してくれたってわけだ。だから、もらった軍資金と何十人かの手勢でこの二年間ボルチモアとサイトを監視してたわけだ。アリスローザ、やけにあっさり州城から出られたと思わなかったか？ 俺の身の上話は以上 納得したか」

「クロード様はこうなることを半ば予想されていたのかもしれないですね。わたしには竜の封印がある書簡を持った者が来たら手を貸すようにとの御命が術によって一度あったきりですが」

そこでダニアンの口調が変わる。

「だったら早く封書を見せて頂いてたらこんなごたごたした事にならなかったんじゃないですか、まったく」

「わりい、忘れてた」

アリスローザは二人のやりとりをぼんやり聞きながら思い出の中にいた。 募るクロードへの郷愁。

先の先を読んで手をつっている彼。 こうなると分かっていたのになぜこの国を出て行ってしまったのか。

アリスローザには彼の事情など分からない。 クロードは自分の事になると途端に寡黙になるのだ。

そして 頑固だ。

作っていた弱さでは無く、少しは本当の悩みや考えを打ち明けて欲しかったのに。

「アリスローザ様、お茶が冷めますよ」

ダニアンの声にやっと我に返った彼女の耳にステファンの声が聞こえる。

「まあそれぞれ色々な事があるさ。で、逐一この魔道師先生があなたに連絡を取っていたということか」

「そういう事だな。おまえには何も無いのか？ ぼうず」

「隠すことがあるほどまだぼくはそんなに歳くって無いからな」

「へええ、いいねえ若いつてさ」

ウイリアムの軽口に応えず、ステファンはボルチモア州の地図を広げた。州境近くの街道沿いの道に付けられている印。

それはハーコート公爵が宿泊する予定地。

その一つを指差す。

「じゃあさ、ここですり替えようぜ。魔道師先生が作った木偶と本人を入れ換える。そしてこの森林地帯を抜けてゴート山脈側からモンド州に入る。州境まで行ったら、魔方阵で空間を飛んで州境越えをすませるってことで」

そこで大人しく聞いているダニアンに向く。

「また、しっかり働いてもらうぜ、先生」

「分かってますよ、クロード様に頼まれてるんですから仕方ありません」

「で、あんたが持っている手勢とダリウス様からもらった手勢で守りしながら速やかにモンド州の州都アリエルにお連れする。と、ここまでではいいか？」

「ああ、おまえはどうする？」

ウイリアムに聞かれてステファンは少し考えていたが。

「今回はあんた達で行ってくれ、森林地帯で待ってるよ。疲れたなあ、先に休むよ」

そう言っただけで立ち上がるとさっさと二階へ上がって行く。

「一緒に行かないって、どういう事かしら」

「あいつにも色々あるって事じゃないの？ さて腹減ったな。ダニアン何か作ってくれよ」

思案顔のアリスローザにウィリアムは簡単に返すとダニアンにさかんに腹減ったを繰り返す。

「いい加減にしてくださいよ、あたしだってたった今帰って来たばかりでくたくたなんですよ。だいたいあたしは、あなたのお母さんじゃないんですからね」

「気持ちの悪くなるような事をいわんでくれよ。想像しちまったよ」「悪うございましたね。スコーンくらいなら出来ますけど」

ぶつぶつ言いながらも腕まくりをしてダニアンは厨房へと消えた。「人数の割り振りと事前準備にかかるうぜ。俺とおまえはダニアンがハーコート公に付けている使い魔がハーコート公に摩り替ったら、速やかに宿から公を逃がす。宿の使用人をそっくり入れ換えるんだ」「ウィリアム、ありがとう。あなたが味方で本当に良かったわ」

アリスローザの差し出した手を掴むとウィリアムがぐいっと引き寄せて彼女を抱きしめた。

「クロード様によろしくって頼まれたからな。と、いう事は全部頂いていいってことか」

「冗談！ それはだめよ」

「そうなの？ 残念」

びつくりする腕の中のアリスローザに悪戯っぽい笑みをを見せてウィリアムは手を離す。

「何をやってるんですかつ」

その大声に振り向いた先にいた、スコーンを山盛りにした皿を持つ顔が真っ赤な魔道師。

「廟の中で破廉恥なマネは止めて下さい」

「ダニアン、これはそんなじゃあ無いわよ」

二人の騒がしい文句、または反論に構わず、ウィリアムはダニアンの手の上にある皿から出来たてのスコーンを掴んで口に放り込む。「んー美味しいな。おまえ女なら、おばさんでもいいから嫁にするのに」

「滅相もない。誰でも良いんですか、あなたは」

「女限定だがな」

「最低だわ」

抱き締められたことより、誰でも良い発言に気分を害したアリスローザだったが。

さっきのは冗談だったのかとほっとしたのか、残念だったのか。複雑な気分で食卓に向かう。

「お茶を淹れるわね」

「ああ、止めてください。あたしがやりますから。手を触れないでください」

自分を大事にしてくれて言っているわけではない。この魔道師は、こと家事の才能が無いアリスローザを信用してないだけなのだ。「お茶くらい淹れられるわよ。でもまあいいわよ、やりたいんなら」譲ってやると言わんばかりの態度に隣の男が大声で笑った。

16・ 使い魔

それから二日後。 ボルチモア州に入ったハーコート一行は予定通りの宿場町に着き、予定通りの宿に入る。

本当に何かあるのか。 そう、懸念するほど何も起きない。

「ここで公には姿を消していただきます」

突然、耳元で囁かれた声に振り返ると。

「お久しぶりです。ハーコート公様」

目の前にいる、宿のお仕着せを着ている女を確かにハーコートは知っていた。

「ボルチモアのアリスローザなのか」

「はい、ハーコート公様。 宿の使用人はすべて我らの仲間になっております。 こちらにおいでください」

「うむ」

立ち上がったハーコートは背後の気配に振り返る。 そこには頭の薄い中年の魔道師が何やら呪文を唱えていた。

「ウルズ、ライゾ、マンナズ、ラグズ、カノ」

素早く結ばれる印。

直後、手にした羊皮紙に変化が起こる。

一瞬、それは燃え上がり即座に消えた。

後に残る、床に煤状になったそれが大きく揺らいで膨らむ。

うねうねと延びていく二つの黒い物の先が五本に分かれて。

その間に現れる大きな丸い物。 それは人の頭か。

腕のようなそれ。

それを支えにしてその黒い物は床からおのれの体を引っ張り上げる。

軽く首を捻るようにして魔道師の前に、それは いた。

「これは？ 何なのだ」

「これは貴方様の代わりでございますよ、ハーコート公様」

気味が悪そうに尋ねるハーコートにやりとした笑いを見せた魔道師。その間にも目の前で変化は続く。

セミの羽化のような　ぶよぶよとした人型に色が付いていく。

「これは……」

「コレハ」

まねて続く声も確かに自分のものか。

ハーコートはあまりの精巧さに言葉も無く出て行くことも忘れていた。目の前にいるのはもはや、わけの分からない物体などではない。

「さあ、ハーコート様こちらに」

アリスローザの声にせかされてハーコートは部屋を出た。

「しかし、良く出来ているな。本物に見えるぞ」

足の先でつくづくようにしながらウィリアムが言う。

「止めてもらえませんか、術で使い魔を操っているんですから」

「て、ことはこいつの術が解けたらどうなるんだ？」

「さて、ここを出しましょう。間諜の呪もかけておきましたからね」

「おい、さっきの返事がまだだぜ」

重ねて尋ねるウィリアムにダニアンが露骨に嫌そうな顔を見せる。

「言っんですか？　解けてしまったら、まず近場の人間は助からないでしょうね」

「何？　じゃあ、代わりに斬られるなんてことになったら術が解けて大変な事になるんじゃないのか」

「斬られたって解けやしませんし、この使い魔は実体は無いんですから大丈夫ですよ」

「絶対に？」

「この世の中に絶対はありませんがね」

縁起でも無いことをあっさりと言われてウィリアムは鼻白んだが、ここはこの魔道師に任すほかはない。

しかし、事魔術が絡むとこの魔道師はどうしてこんなに性格が悪くなるのか。 普段の彼にはあり得ない事を平然と言ったり、行ったりする。

これが魔道師の胡散臭いところだ。

裏口から出入りの商人の格好に着替えたハーコート連れ出す。

人通りは少ないが顔を見られる危険は侵せない。

商人の格好をさせてもどうにも威厳のある立派な印象は隠せないのだ。

急いで辻馬車に偽装した中にハーコートを案内してアリスローザは御者の男に合図を出す。

「では、出発！」

御者役のウイリアムが調子よく言ってムチを振り上げた。

首都サイトス、王の寝室にクライブは寝かされている。 このところ気分がすぐれず、寝込むことが多い。

気鬱のせいなのか、どうか。

頭が重く、体がだるい。

「陛下、お起きになられたのですか？ 今日の分のお薬ですわ」

この半月ほど前から看病のためにっている女官がすかさず、薬が入っている小さな杯を手渡す。

「サリア、薬は後にしてくれないか。 どうもそれを飲むと吐き気がするんだ」

「だめですわ、ちゃんとお飲みくださらないとわたしが怒られます。どうか、少しづつでもお飲みくださいませ」

心配そうに気遣いながらも女官は杯を飲むようにしつこくすすめる。

「わかった」

クライブはこれも彼女の仕事なのだと仕方なく杯を傾ける。

そして口に広がる耐え難い味に吐き気をやっと堪えた。

「陛下、大丈夫ですか？」

サリアがクライブの口元を綿布で拭いながら背中をさする。その手のあまりの心地よさにクライブは痺れ始めた体をゆっくり倒した。

何も考えたくない。この気持ち良さの海の中にずっと漂っていたい。

目を閉じるのを確認してサリアは薬の入っていた杯を手にはち上げると寝室を出て行く。

「陛下は薬湯をお飲みになられたか」

廊下に出たところでサリアは男に声をかけられた。

「マルト様、お飲みになりましたがあれでよろしいのですか。酷くご様子が変わりましたわ」

「あれでいいのだ。おまえは黙って言う事を聞いていればいい」

冷たく言われて女官は肩を震わせて男に空の杯を渡すと下がっていった。それを見送ると男は王の執務室に入る。

「コーラル様、今日もクライブ様はお飲みになりましたよ」

「あんなに口に苦い物を欠かさずに飲むとは生真面目なものだな。自分の体調がどんどん悪くなっているのに疑いもせずに。素直なのも度が過ぎるところつけいなほどだ」

辛辣なことを言つてこの国の宰相コーラルは笑う。

主のいない執務室を我が物顔で使っている彼は空の杯を受け取つてにこやかに手前の官服姿の男を見る。

「明日からはもう少し量を増やそうか、マルト」

「ここが本当の意味で自分の物になる日も近い。」

17・素性

州境近くの森林地帯。麓の町でステファンと落ち合う事になっていた。

晴れていたと思っていたのにアリスローザが空を見上げると灰色の重たい雲がわずかな光をも隠そうとしていた。

「遠雷が聞こえるわ」

「んあ？ ああ、雷か。早くぼうず、来ないかなあ」

ウイリアムが同じように空を見上げる。

雷より一足早く降り出した雨が馬車の屋根を激しく叩く。その矢のような雨の中、マントをすっぽりと被った男の姿が見えた。

「遅れてすまない」

言いながら男は馬車の御者台に上がる。

「中に入らないのか」

「もう、濡れてるし。ここでいいさ」

何かを決意したような横顔を見せて黙り込むステファンに、ふーんと言いながらウイリアムは馬車を出す。

馬車はどんどんと山奥へと入っていく。その馬車の前にあがる轟音とすさまじい光。

馬が怯えて立ち止まる。大きく地面がゆらぐほどの轟音。

「どうした？」

「雷が目の中の樹に落ちただけです」

心配気に窓から顔を出す、ハーコートにマントを深く被った御者台に座った男が返す。

「雨に濡れます。窓を閉めて下さい」

そう言ったところでおこる二度目の落雷に馬が驚いて大きく前足を上げて後ろ立ちになって暴れ出した。

ウイリアムは大声を出して馬をなだめていたが雨の音にかき消される。

「危険だな、馬を放そう」

「ああ」

横のステファンがうなづいて立ち上がった途端、馬車が大きく傾いでステファンは地面に投げ出された。

「おい、大丈夫か」

そこへ流れる声。

「縛せよ！」

印を組んだ魔道師が馬車から降りて、馬に呪を飛ばす。

血走った目を見せながらも馬は地面に縫いとめられたように動かなくなった。

「ステファン、おい、目を開ける」

「馬車に運んで、ウイリアム」

アリスローザの言葉によし、と細いといえど気を失った大の男を軽々と担いでウイリアムが馬車の中へ倒れた男を運び入れた。

「ハーコート公様、申し訳ありません」

「いや、そんなことよりマントを脱がそう」

びしょびしょに濡れたマントをアリスローザとハーコートが苦勞して脱がせる。

「こ、この者は」

マントを脱いで顔があらわになったステファンを見たハーコートがその言葉の後に絶句した。

「わたしの仲間のステファンですが。何かありましたか」

「い、いやそうか。あまりに似ているから驚いて」

「誰にです？」

アリスローザにはつとする顔を見せてハーコートは小さく応えた。
「わたしの弟たち……にだよ」

弟？ 前国王と宰相コーラルということ。

「クライブ国王陛下もクロード様も、マーガレット様にしても。どのお方も父親には少しも似ていなかったというのに。この者の素性はどついうものなのか」

うつん、という声をあげて気がついた様子の男が目を開ける。

「ここは？」

男は、そう言ったあとに自分を見下ろすように見ている壮年の男に気が付いてびっくりと眉を上げて顔を逸らす。

「おまえ、コーラル前国王に縁のある者なのか」

他人の空似だと否定しないということは、そうであるのか。

「おまえ、何とか言えよ。おい、ステファン」

ウイリアムの強い声に顔を逸らしたまま、ステファンはため息をつく。

「ぼくはコーラル前国王に縁はありますが、彼の子どもとかじゃありませんよ」

そこにいる皆のじゃあ何だ？ という顔を見ながらステファンは苦笑いを浮かべる。

「どつちかというとぼくは今の宰相の方、コーラルに縁があるんですよ」

「何？」

生まれてからすぐに魔道師に引き渡された双子の半身に関わりのある者とは一体どういうことなのか。

「コーラルは王が即位するまでモンド州のゴートの廟にいたのではなかったか」

「いいえ」

ハーコートに即座に返される否定の言葉。

「彼が二十四歳の頃、隣の州の州宰について政務を習っていたことがありました」

「そういえば」

ハーコートが記憶を辿るように視線を遠くに移す。

そう言えば、自分が直轄地になっていた、モンド州を所領地として住まいを移してしばらくしてゴートの廟長ルークが挨拶に来たのだった。

それは彼が三十歳を少し過ぎた頃の初春。

執務室に突然開いた竜門。

魔道師庁のあるサイトの王城にいたハーコートにしても、竜門が開くを見ることはこれが初めてだった。

それは、魔道師が使う竜道というものの妖しさを魔道師長のガリオールが充分承知しているためだ。

時間と距離に縛られず、どこにも行ける道など魔道師以外には気持ちが悪いだだけだ。しかも、魔道師と王以外は通れないのだからサイトの王城内では、竜門は魔道師庁内でしか開かない旨の戒律がある。

その竜門が、なぜここに？

「バルザクト様、ああ、失礼しました。いつまでもサイトにいらした頃のようにお名前でお呼びしてはいけませんね。ハーコート公爵様、突然に申し訳ありません。少しお邪魔しても？」

「ああ、ルーク殿が。何だ」

姿を見せた者は、自分がまだ首都サイトにいた頃から何度となく顔を見ている魔道師。途端に緊張が緩み、ハーコートは安心して笑顔を向ける。

「あと数年でラジム陛下がご逝去なさいます。今、陛下に側についておりますクロードはお隣のボルチモア州の州宰に付く事になっております。で、引継ぎのために今はボルチモアに来ております」

「それで？」

「王のお側に付く為の心構えとか政務の勉強のためにうちで預かっております、雛をしばらくボルチモアに預けようと思っております」
ルークは指を折りながら柔らかに笑った。

「半身としては彼が一番歳が近いですし、話が合つかない。わたしも若いつもりですが実際はちよつと歳上ですからね。緊張させてばかりじゃあ、可哀想だし」

そうは言つて言葉や態度に緊張感はなく無い。この男はいつもそうだが。

「雛？」

「あ、これは失礼しました。王の御名を頂くまでクロードは二人おりますので、養育中のクロードの方は廟では雛と言っているんですよ。可愛いでしょう？」

ハーコートは四百歳を越えている男の軽口に眩暈を覚えた。

「それではわたしの弟が来ているのか？」

「はい、近くまで来たのでご挨拶にと。雛ちゃん、兄君にご挨拶を」
ルークの後ろにいた、フードを深く被っていた魔道師がフードを後ろにはねのけてこちらに顔を上げた。

「ハーコート公様、お初にお目にかかります」

たったそれだけ言つと頭を軽く下げて硬く口を閉じた魔道師の顔はこの数年前にサイトスで別れた自分の弟と瓜二つだった。

違ふのはかもし出す雰囲気か。

「バルザクト兄様、お別れとは辛いです。すぐに会いに来てください」

もう、二十歳になるというのにひどくしょんぼりしながら手を差し伸べる弟。

ここ、モンド州に来る前に言葉を交わした弟、コーラルの事を思い出し、知らずにハーコートに浮かぶ暖かな笑み。

穏やかな、少し怖がりで大人しい七つ下の弟をハーコートはとても愛していた。

こんなに優しい気性で王の重責が務まるのだろうか。体を壊してしまうのではないか。

心配で心配で。

このまま、サイトスに留まって弟を守って暮らしていくのも悪くないと思っていたのだが。

この国の王になるのは、生まれた順番でも、正統性でも無い。王の血を受け継いでいるなら庶子だろうが関係ない。

しかし、必ず王になる者は印があるのだ。

それは 双子である、ということ。一方が王になり、片方が魔道師になる。

それも竜印という刻印を体に刻み付けられて永遠に近い不老の者となる。

ハーコートが王になる確率は生まれた時にすでに無かったと言える。しかし、ハーコートはそれを既に受け入れていた。

自分が弟の臣下になること。支えていく、そう思っていた。その愛する弟にそっくりなのだが。

同じような赤っぽい茶色の髪に明るい青の瞳。 何から何まで良く似ているというのに。

あまりにもクロードが放つ、冷たく拒絶する気配に親愛の情も湧かない。

「こら、雛ちゃん。何ですか、あっさりしすぎですよ、まったく困ったものだ」

灰色の瞳を困ったなあというように細めて廟長のルークはやんわり咎める。

「では、場も暗くなったことですし、我々はさっさとおいとましますね」

ルークは、レイモンドル国の魔道師の中でも上位三人の中に入るほどの魔道師、であるはずの男だが見た目は二十代そこそこ。

そして口調もはるかに軽く、とても重鎮とは思えない。

しかし、彼を含めてこの国の上位の魔道師は何百年も生きている人外の者だ。

見た目に騙されてはいけない。 その仲間に自分の弟も数年の内になる、というのか。

暗澹たる気持ちのハーコート目の前で開いた時と同じように竜門は消えた。

そんなことがあった。

それから一年ほどコーラルはボルチモア州にいたのではないか。

「その時の……？」

「魔道師の戒律をあいっは破ったというわけ。竜印が完成する前に」
魔道師は女犯するのを最大の禁忌としている。

そして、主、魔道師イーヴアルアイの僕たる証、竜印を刻印される上位の魔道師は竜印が完成すれば繁殖能力は失われる。

「そんなことが」

側にいたアリスローザも一言言って黙り込んだ。

「僕はいつも魔道師たちに追われていたんだ。僕は生きてちゃんない者だからな」

ステファンは自嘲気味に笑った。

「俺と兄貴はそれこそ、溝ねずみのように逃げ隠れしながら生きていたんだ」

「お腹に僕が宿ったことを知った、僕の母親は誰にも告げずにボルチモア州城から逃げたために、無事に城からは出ることができたんだが」

ステファンの平坦な調子の声がつづく。

19・ 州姫リディア

ボルチモア州、州姫リディアは疲れ果てて樹の影に座り込んだ。
こんな所で休むなんて危険だと思ったが、もうどうにも足は一歩も動いてはくれなかった。

余興の旅役者や、吟遊詩人。 正妃の催した宴に呼ばれた者たちに紛れて城を抜け出したのだ。

案外、入るのには厳しいが出て行く者に緩いのはどこでも同じか。外門の門番など庶子であるリディアの顔など知ってはいない。
まあ、下官の立場では州侯の顔だつて知らないだろうが。

自分の足でこんなに歩いた事さえ今までに無かったのだ。 しか
も今は妊娠初期で毎日吐き気と戦っていたのだ。

食事もまともにしていなかった体は悲鳴を上げている。

「ごめんね、赤ちゃん。少し、少し休んだらまた、動けるから。ちよつと休ませて」

まだ、目立たないお腹をさすりながらリディアは目を閉じた。
それからどれほど経ったのか。

「お姉ちゃん、ねえ、」

体を揺すられてやつと薄く開けた目に映るのは心配そうに見つめる小さな男の子の顔。

「え？」

「こんなところで寝ちゃったらだめだよ、風邪ひいちゃうよ」

こんなところ？ そこでやつとはつきりと起きたリディアは
体を起こすと周りを慌てて見渡す。

大きな街道を一本外れた脇道の脇に植えられた樹。 それにもたれるように腰を降ろしていたのだ。

なんて、無防備な事をしていたのかと今更ながらどきりとする。
その起き上がった彼女を軽く見下ろすくらいの年頃の少年が気遣うように手を差し伸べた。

「ねえ、立てないの？ 寝たいんだったらおいらの家においでよ。すぐだから」

「触らないで。いいから放っておいて」

リディアに手を振り払われて困惑したような顔の少年。

そこで鳴るお腹の音。

「お姉ちゃん、お腹すいているの？ だから怒ってるの？」

「うるさいわね、向こうへ行きなさい。放っておいてと言っているでしょう。あなたばかなの？」

声をかけた相手のあまりな言い草に少年は口を真一文字に結ぶとくるりとリディアに背を向けて走り去って行った。

少年の去って行く背中を見ながら、誰も信用できないとリディアは苦く思った。

一番信用出来ないのは、見返りを期待しないで親切をするように見せてくる人間だ。

ここへ来るまでの数日、リディアは散々な目に会っていたのだ。まずは、優しい中年の夫婦者に荷馬車にのせてもらったこと。

そう、一見優しい親切で働き者の夫婦。

「何か、大変そうだね。疲れた顔をして。いいよ、ここで会ったのも何かの縁だ。乗っておいきよ」

そう、言ってくれた。

が、半刻後には二人は追いはぎに変身していた。逃げるときに着替えなかった自分がばかなのは今では分かっているが。

豪華なドレスも付けていた装身具もまるごと奪われて物のように道に投げられた。

「下着じゃ、可愛そうだね。これをやるよ」

女は自分の着ていた継ぎのあたった服を投げてよこすとリディアのドレスを着こんで笑った。

「あら、あたしのほうが似合うじゃないか」

あまりの屈辱に言葉も無かったが下着でいるわけもいかず、起き

上がってそのぼろぼろの服を着たりディアはふらふらと歩き出した。後から考えると物を取られたくらいですんで本当に良かったのだが。

その時は裸足に当たる小石に顔をしかめながら歩く彼女にそんな余裕は無かった。

「お腹すいてないかい？」

そう、聞いてきた十四、五の少年に貰った腐りかけた乾し肉のために下着の下に用心のために持っていたお金を持っていかれた。

そうしないと少年の仲間たちに棒切れで叩き殺されそうになったのだ。

のこのこついていく自分がばかだった。自分以外、気をゆるしてはいけない。

わたしは死ぬわけにはいかないのに。この子を守らないといけないのに。

リディアの決意は固い思いとなって殻のように纏っていく。そしてただ、一つの教訓が身に染みていくのを感じていた。

親切を押し売りにするような者はろくな者ではないと。

「お姉ちゃん、はい」

その声に驚いて顔を上げるとさっきの少年が息をきらせながら手を差し出していた。

手にのっているのは黒ずんだ丸いパン。

「おなかすいてるんだよね。だから怒りなくなっちゃうんだ。父さんが人は腹へつてるとろくな事、考えないって言ってたよ」

そう言って笑顔を向ける少年になんてしつこいのかとリディアはため息をつく。そしてまわりを注意深く見回した。

少年の連れがいないかどうか。

誰もいないことを確認した後、素早く少年の手からパンを奪い取った。

これくらい小さい子なら振り切って逃げるのがわたしにも

できるだろうと。

20・選ぶ自由

一方その頃、ボルチモア州、州城州宰の執務室。

「こ、これはガリオール様、ルーク様」

州宰のダークスが青い顔をして竜門から出てきた魔道師二人連れを迎える。

「何の用で来たのか、分かっているんだろう？　ダークス」

「さ、さて……」

「あれ、さては呆けたのかい？　まだ、おまえは二百年ほどしか生きてないはずなんだけど」

ルークが笑いながら言うが、その灰色の目は少しも笑ってはいない。

「うちの雛ちゃんの事だよ。ちゃんと見てって言ってたよね、ダークス？」

「クロード様の事……ですか」

ダークスは呆けてみせるが二人には通用するはずも無く。

「女犯するべからず　これを忘れていたのか、ダークス」

ガリオールの冷たい声に呆けていたダークスもがっくりとうな垂れた。まさか、預かっていた竜印の完成前の半身が女性と関係を持つなどとは。

竜印が完成すれば主以外に魅かれることなどめつたに無い。いつも主、イーヴァルアイ様と自分たち僕は繋がっているのだ。

そのため、うかつにも彼が女性にうつつを抜かすことなど考えていなかった。

あと、自分は数年で魔道師庁の高官の座が約束されていたというのに。

「クロードはすぐにゴートに戻す。で、その相手はどうした？」

厳しいガリオールの問いを受けて彼の目の前に投げ出されるようにひれ伏す男。

「申しわけありません、取り逃がしましたが直ぐに、直ぐに捕らえます。なにとぞご容赦を」

「えーっ、逃がしちゃったの？　ねえ、うちの雛ちゃんの面倒も見れない奴に州宰は無理なんじゃあない？　ガリオール」

「そうだな」

ルークの言葉に相づちを打って、ガリオールの手が印を結ぶ。

『エワズ、ラグズ、ハガラズ、ケン』

呪文の後にためらうことなく目の前の魔道師の胸元に突き入れられる右手。

その手は立体化した竜印を掴み取ると床に投げ捨てる。

『滅せよ』

その呪文に跡形も無く竜印は消えた。

「ガリオール……さ……」

竜印を取られたダークスは目の前で砂のように崩れていく。

術が解けて本来の姿に戻ったのだ。　人は本来、二百年も生きられない。

ルークは砂の山にわずかな憐憫の表情を見せるが、それもすぐいつもの飄々とした顔の下にしまいこまれる。

「どうする？　ガリオール」

「そうだな、そこのおまえ。名前は何というのだ？」

魔道師長のガリオールに指を指され、出て行く間合いを失って部屋の隅に突っ立っていた、まだ頬の赤い魔道師がおずおずと答える。

「あ、あたしでございますか？　あたしはダークス様の雑用をさせていたでた者で、ダニアンと申しますです」

「申しますです、だって。この子面白いねえ、ガリオール」

ガリオールがルークに厳しい目を向ける。

「面白がつてる場合じゃないだろう、ルーク。ダニアン、おまえを州宰代理に任命するからすぐに仕事にかかれ」

「あ、あたしですか？　あたしはダークス様の……」

ただの雑用係だと言う言葉は最後まで言えない。

「ダークスはいないんだし、すぐにゴートから上位の魔道師を送るよ。それまでの辛抱だよ」

「これは決定だ。拒否などできない」

やんわり言うルークの言葉に被せられるようにかかるガリオールのきつい言葉にまだ若い中級魔道師の男はただ、うなづくしかかった。

「では、ダニアン。ドミニク候を呼んできなさい。彼の息女のおこした事だからな。彼にはきっちり始末をつけてもらわなくては」

「しょ、承知しました」

どもりながらダニアンが退室した後。

「めんどくさいよね、きみがあんな戒律作っちゃうから。もう、削除しちゃったら？」

「政治の中枢に関わる人が多い魔道師がそこら中で子どもをつくらうという事になるかわかっているのか。秩序も乱れ、監理も煩雑になる。妻帯など考えられない」

ルークの投げやりな言い方にガリオールは憮然として諭すように言う。

「ふうん、そうか。じゃあさ、男犯はいいわけ？」

「ルーク！」

真面目に応えるのに返された、ルークのいい加減な返事にガリオールの顔の眉間の皺が深くなる。

「冗談だよ、ここんところの君の皺、ゴートにあるハンゲル山より険しいんじゃない？」

自分の眉間を指差して向ける笑顔。

「誰のせいだ、誰の。だいたい半身の監督責任の長はおまえだろう、ルーク」

「あららそうきたか。まあ、半身は生まれた時から逃れられない運命を背負っているわけだから屈折度も高いものさ。わたしたちみたいに選べるわけじゃないからね」

「選んだわけじゃない」

ルークに素早く返される言葉。

私は親に口減らしのために廟に連れていかれたのだ。道端に捨てられるのと同じだ。

違うのは連れていく親の良心が痛まないことくらいだ。

思ってもいなかった、自分でも忘れていたはずの小さなとげに触れてガリオールは黙りこむ。

「だけど、竜印をもらう前なら還俗する手もあるし。普通の生活に戻って貧乏でも人並みに死んでいく生活を送ることを選ぶことができたよ。半身じゃないわたしたちには」

「ルーク？」

おのれの生き方を疑問に思うことなど無かった。自分と共に四百年以上を生きてきた魔道師から漏れた言葉にガリオールは心底驚いて相手を見つめる。

「それは……後悔しているということか？」

「いや、わたしは主を敬愛しているよ。でも、別の人生もあったと、そう思ったただけ。普通に生きる道。結婚して子どもを育てて死んでいく道がさ」

「ルーク」

「何て顔をしているんだよ、ガリオール。わたしは君と違って信念とかないままに生きてきたからな。迷いも多い。だが何もかも、もう遅いよ。人としての寿命の年齢をとくに超えて、もはやわたしたちにはこの道しか残されていないからな」

「私は後悔なんてしていない。おまえもそうだと思っていたが」

なぜか、傷ついたような顔を見せてガリオールが呟くように言う。

「ねえ、自分の親の事思い出さないかい？」

いきなり自分のとげに触れるようなルークの言葉に即座に返される応え。

「私を捨てた親の事なんか、思い出す訳が無い」

「わたしは 思い出すよ、時々」

対してルークは、遙か昔を懐かしむように目を細める。

「廟に連れて行かれる前日の晩。母さんがこっそり家の裏に呼んでくれてさ。二人で食べようってふかした芋を二つに割って。びっくりしたよ。ばちが当たるんじゃないかってびくびくしながら食べたな。その味が今でも忘れられないんだ」

「で、美味しかったのか」

「ん　すごい不味かった」

「はあ？」

「ほとんど黴てたんだよね。どっかから拾ってきたんじゃないかなあ、母さん」

ガリオールはルークの話にどう言ったらいいかと複雑な顔をする。その顔を見たルークはぷつと吹き出す。

「だからさ、人はそれぞれだって。魔道一筋のガリオールは好きだよ、男犯したくなるくらいに」

「ルーク！」

「あはははは……あんまり戒律作りすぎんってことさ」

してやつたりと笑う同期の魔道師にガリオールは苦い顔をした。

21・鍛冶屋の親子

ボルチモア州、州都近隣の町。

奪い取るように少年の手からパンを掴むとリディアは食べるように口に入れる。何日ぶりの食事。

のどが詰まったのはパンのせいでは無い。

何て自分は落ちぶれてしまったのか。お腹が落ち着くとや
つと他の事を考えることが出来た。これは 目の前の少年の言
葉だったか。

「ねえ、もし良かったらまだ、パンがあるから持って来るよ。どう
する？ お姉ちゃん、おいらの家来るの嫌なんでしょ？」

「そうね、じゃあ持ってきて来てよ」

尊大に応えるリディアに、それでもにっこりと笑顔を向けて少年
は家のある方へ向かって一目散に走っていく。

「ばかねえ」

ここで待つつもりなどリディアには無かった。あの少年は今頃、
リディアがえさに食いついたのを確認してほくそえんでいるのかも
しれない。

今度は父親か、母親。あるいは仲間を連れてやって来る気に違
いない。急いで逃げなくては。

もう、渡す物なんて無い。この身を売られるくらいだろう。

そんな事は絶対にだめだ。

わたしにはこの子がいるんだから。リディアは立ち上がって歩
きだそうとしたが、そのまま倒れこむと気を失った。

体はとつくに限界を超えていたのだ。

ぱりぱりとした麻の布の感覚に驚いて目を覚ました彼女は自分が

狭い部屋の寝台に寝かされているのに気付く。

「お姉ちゃん、気が付いた？」

目の前に鶯色の目を細めて満面の笑みを浮かべる少年。

「父さん、父さん、お姉ちゃんが起きたよ」

その声におう、と応える低い声がして。

姿を見せたのは深い栗色の短髪。笑い皺が目立つ垂れ目がちな鶯色の瞳。少年とそっくりな三十歳くらいの男。

身なりはまあ、こちら辺で見かけた者たちと似たような物。

綿の洗いざらしのシャツに袖なしの上着に膝下までのズボン。

牛皮のブーツ。腰にはナイフやら工具やらをぶら下げた太いベルトを締めていた。

「おれは、ラッシュだ。あんた、もう少し寝ていたほうがいいぞ。顔色が真っ青だからな」

「いえ、もう大丈夫よ。さようなら」

起き上がって行くこうとする彼女は男の腕に捕まる。

「な、何するのよ！」

「おい、人の親切にはお礼をするもんだろ？ 母親に習わなかったか？」

男の言葉にリディアはまたかと張り詰めた顔を向けた。

「何をしろと言うの？」

挑戦的に言うリディアに男はそうだなと首を傾げる。

「寝ていたくないんならまず、その汚い体を洗え。お礼も何もおまえ、相当臭いぜ」

やはり、この男はわたしの体が目当てなのか。倒れてしまった自分を恨むがどうしようもない。

「奥の部屋にお湯と着替えが置いてあるからそれを使え。手を抜くなよ」

男の言葉に寒気を感じながら仕方なくリディアは奥の部屋に向かう。

何日かぶりにお湯を使って汚れを落とすと蜂蜜色の髪も体もすっ

きりして気分が良くなっただ、この後の事を考えるとその気分もまたたく間に落ち込む。

置いてある着替えは綺麗に洗ってあるが何回も着たように少しよれていた。

何人の女がこの服に手を通したのか。

重い気持ちで着替えるとそれを見通したように叩かれる戸。

「ねえ、着替えたらこっちに帰ってきてね、お姉ちゃん」

邪気の無い声にあの男がこれからやろうとする事を少年は知っているのかと疑問になる。

しかし、自分が初めてじゃないのならあの純朴そうに装っている少年も全てを知っているのだろう。

できるだけのろのろと戸を開けると、待ちきれなかったのか少年が、リディアの手を握って引つ張るように歩き出した。

目の前の食卓に置かれた物にリディアは啞然と言葉も無く視線をこの主に合わせる。

湯気を立てた、具はじゃがいもらしいスープ。

前に口にしたと同じ丸いパンが皿に盛っており、別の皿にはベーコンの固まりがのっていた。

「ヘンリーがさ。あ、こいつはヘンリーっていうんだよ。おまえが腹へってるからイライラしてるってさ。まあ、なんだ。人っていうのは腹へってるとろくな事を考えないからな。だから飯食えよ」

「お礼って……？」

まあ、座れと手を引かれて椅子に座らされたリディアはぽかんとする。

「ああ、そうそう、お礼、お礼。この子に言っただけでくれ」「言う？」

「そうだ、ありがとって言ってやってくれ」

笑いながら言う男の顔をリディアは訳がわからず見返す。

「お世話になったらお礼をするもんだろ？ こいつみたいながきに

するのは抵抗があるかもしれんな」

父親の言葉ににこにこ笑顔を向けて、リディアの言葉を期待している少年。

「あ、ありがとう」

小さく言っリディアに、どういたしましてと大人みたいに神妙に言っと、ヘンリーという名の少年は彼女の前に水を入れた茶器を置いた。

「お姉ちゃん、その服良く似合ってるよ。それ、死んだ母さんのな。母さんもきれいだったけどお姉ちゃんは、二番目にきれいだな」

「そう?」

「うん」

はにかむ少年の様子に揺らぐ自分の硬い心。

「じゃあ、食べようぜ。いただきまーす」

大声で言っと最初に食べ物に口をつけたのはこの主人だった。

「父さん、お客さんより早く食べるなんて行儀が悪いぞ」

ヘンリーの指摘に悪いな、と目が無くなるほど細めてラッシュは笑いながらパンを掴むとリディアに差し出す。

「ほれ、食えよ」

渡されたパンを口に運びながらそれでもリディアは、いつ逃げ出そうかと考えていた。

22・ ささやかな幸せ

「ねえ、母さん。薪はこれくらいでいい？」

「そうね、ありがとうヘンリー。仕事場からお父さんをお呼びできてお茶にしましょう」

「わかった！」

元気のいい返事を返して十四、五歳くらいの少年が飛び出していく。

傍らにいた七歳くらいの男の子が赤っぱい茶色の頭を上げて母親を見た。

「ねえ、ぼくが作ったお菓子、父さん美味しいって言ってくれるかな？」

体も大きく、活発で人懐っこい兄とは真逆の弟。 細い体に神経

質そうな顔。

「お茶の用意手伝ってね、ステファン」

「うん」

母親について卓上に茶器を出す少年を見ながら彼女はため息をついた。

あまりに似ているのだ。 せめて自分に似てくれたのなら。勉強が嫌いな兄に比べて弟のステファンは、早々に自分が納めた語学も何も吸い取り紙のように吸収してしまった。

最近では、なけなしのお金で買った古本で、もはやリディアにも分からないほどの数式を独学で学んでいる。

本人は近くにある廟で魔道師に勉強を習いたいと訴えていたが、いつもは優しい母親がその事に対しては頑なに禁止していた。

田舎では都会にあるような学校の代わりを廟が担っているのだ。しかし、ステファンは体が弱いという理由で家に閉じこもって暮らしてきた。

ぼくはこんなに丈夫なのに。

ステファンはだんだん、この窮屈な暮らしに我慢ができなくなっていた。ぼくも兄ちゃんのように父さんについて仕事を覚えたい。何でいけないのか。

「疲れたな、おいステファン。いい子にしてたか？」

そこへ、大きな音をさせて戸が開く。汗の匂いをさせて父親が入って来るとステファンをひよいと抱き上げる。

首にしがみついてステファンは大好きな父親の匂いを嗅いだ。

刀鍛冶の仕事をしている父親はいつも汗びっしょりで帰ってくるが、それはちつとも嫌な匂いではなかった。

暖かい泣きたくなくなるような安心感をもたらしてくれる匂い。

「ねえ、今日お菓子をぼくが一人で焼いたんだよ」

そう言いながら手に持っていた焼き菓子を父親の口にあーん、と言って入れる。

「うーん、上手い。おまえは何をやらしても上手だな。母さんと一緒だ」

「えー？」

その言葉にヘンリーが笑いながら抗議する。

「母さんなんか初めなんて何も出来なかったじゃないか。おいら、教えるの、結構苦労したんだぜ」

「今じゃ、母さんが一番だけだな」

ステファンを抱いた反対の手でリディアを引き寄せてラッシュはチュツと妻に口付ける。

「もう、子どもの前でいちやつくのもいい加減にしるよな」

そう、言いながらもヘンリーは嬉しそうに焼き菓子に手を伸ばす。

「うん、上手い。おまえ天才」

和やかな笑い声が部屋に満ちる。

七年前、人を信じられず、どん底だった自分がこんなに幸せになれるなんて。このままひっそりと生きていけたならいいのに。

仲良くステファンの話を聞く三人の姿を見ながらリディアはこっそりとため息をつく。

次の日、父親とヘンリーは仕事場に行つて、母親も買物に出かけて家にはステファンしかいなかった。

いつものように食卓の上に広げた本を一心に読んでいたが。

「どうして、ここがこうなるのか全然わかんない。ここだけ、聞くだけだからいいよね。すぐ帰ってくるし」

ストンと椅子から降りるとステファンは本を抱えて家を出て行った。

「あの、すみません。教えてもらいたいことがあるんですが」

そうつと廟の門扉を開けながら声をかけてきた少年に初老の魔道師が気がついて近寄つて来た。

「何ですか？ わたしに分かることなら何でもいいですよ。さあ入きなさい」

「ありがとうございます」

あつさりと廟に入れたステファンは、初めて母親に反発を覚えた。ぜんぜん怖くないし、ぼくはちつともしんどくない。母さんはおおげさすぎるんだ。

廟の中で散々質問をする少年に應對した魔道師は驚いていた。何て聡い子どもだろう。

しかし、そんなに裕福そうでもないのにここに勉強しに来ている子どもの中にはいないはずだ。

豪商や、金持ちの子どもなら家庭教師を雇っている。廟では無料です午前中だけ文字の読み書き、簡単な計算のやり方などを教えている。

その中で目に付いた頭の良い子どもを魔道師にするように親に勧めたりもしていた。

これだけ頭のいい子を見逃しているはずはないかと魔道師は頭を捻る。隣町の廟にでも通っていたのかもしれない。

「きみの名前は何ていうのかな？」

「あ、ぼくステファンといいます。町外れの鍛冶屋の息子です」

「そうか、ステファン。きみは頭がいいねえ。いつでも聞きたいことがあるならうちにおいで。きみが良ければ魔術の本だって見せてあげるよ」

秘密を共有するように小さく言った魔道師の言葉にステファンの顔がぱつと輝く。

「本当に？　だったら明日も来ていいですか。魔道師様」

「ああ、おいで。ステファン」

スキップをしながら帰る少年を見ながら魔道師は書棚から分厚い書きつけを取り出す。

町外れの　　というラッシュの所か。でも、あそこの妻はだいぶ前に病で死んだはずだが。　　いつの間に結婚していたのだろうか？　人別帳を開いた先にある名前にはラッシュの名前と死んだ妻の名前。

そこには死亡の理由と日付が記してある。　その下にある子どもの名前、ヘンリー。

この子は覚えがある。　大層元気の良いこどもだったが勉強は今一つだった。　頭が悪いのではないが体を動かすほうが楽しいようだったな。

はて、あれからラッシュは新しく所帯を持ったのか。

そのときは魔道師は深く追求もせずになすませたのだが。

次の日から毎日ステファンは廟にやってきて驚くほどの早さで廟にある書物を読破していく。

ある日、廟にやって来たステファンは小さい杯に緑色の瓶から琥珀色の液体をそろそろと注いで口には運ぶ魔道師を見つけて声をかけた。

23・ 悲劇の予感

「魔道師様、お薬を飲んでるの？」

「おや、と慌てて瓶を後ろに隠した魔道師は相手がステファンと分かり、ほっと瓶を机に戻した。」

「ああ、ステファンか。いやいやこれはお酒だよ。戒律で飲酒自体を禁止されているわけでは無いがまあ、人に見られたくない姿だから。この事は黙っておくれよ」

魔道師にうん、とうなづくステファンは面白そうに見上げる。

「大人にはいろいろ秘密があるもんね」

「おや、良く知っているんだね」

まあね、と胸を張る少年。 それを楽しそうに見ながら魔道師はなんの気なしに聞く。

それは本当に思いつきで。

話のとうっかりを見つけるような気持ちで。

「ステファン、きみが知っている大人の秘密って何かな？」

うーんと少し考えていた少年は、にこりと笑う。

「魔道師様、これはとっておきの秘密ですよ。 ぼくの母さんの事です」

「そうかね、父さんに黙って新しい服を作る布でもこっそり買ったのかな。 それとも鍋をこがしてしまった？」

「違いますよ」

不服そうに少年は答える。

「そんな普通の事じゃないです。 ぼくの母さんの名前の事です」
「名前？」

「はい、ぼくの母さんはエリナっていうんだけど、別の名前があるんです。 秘密の名前。 リディア・ミゼルっていうんですよ。 素敵な名前でしょ」

本を広げて頭を上げずに言った名前に、魔道師の持ったペンの動

きが止まる。

「今、リディア・ミゼルと言ったのかい？ ステファン」

その緊迫した調子の声に大きな椅子に埋もれるように座っていた少年が顔を上げる。

「はい、それが何か」

「きみはいくつになるのかな」

内心の動揺を抑えて聞く魔道師の心中など知らないステファンはにこりと笑ってあっさりと答える。

「七歳です。ぼくは父さんの本当の子じゃないんですって。でもぼくは父さんのことが大好きなんです」

「そうか、良いお父さんで良かったね。ステファン、今日は悪いが用を思い出してね。明日またおいで」

「あ、はい魔道師様」

大人しく帰る少年の後姿を見送って魔道師はしばらく考え込んでいたが、思いきったように机から羊皮紙を取り出して印を組んだ。姿を鳩に変えた羊皮紙がボルチモア州城に向けて飛び立って行った。

その一刻ほど後。

州宰補佐の魔道師が詰めている部屋の窓を叩く鳩のくちばしの音に、一人の魔道師が書類に向かっていた面を上げた。

窓を開けると鳩は、その手にふわりとのつて一枚の紙に戻る。

「これは……」

読んだ魔道師は明らかに狼狽してきよろきよろと左右を見るとため息をついた。

「何であたしの所に知らせを持ってくるんだ。州宰のラジム様にでも知らせればいいのに」

ダニアンは不平を言いながらこれをどうするかと思案にくれる。州宰補佐としては、ラジムに渡すのが筋なのだが。 廟から来た

手紙には穩便に済ませられないかとしたためられていた。

「仕方がない。ご本人に決めていただく」

廟内の金庫に保管されている竜印のペンダントを取り出してダニアンは印を組んだ。

『アルベルト！ ルーフアス！ サイロス！ 解せ、サイトスに通せ』

ぽっかりと開いた竜門に滑り込むようにダニアンは消えた。

「おまえは？」

急に現れた魔道師に首を傾げながらガリオールは問い直す。 問
い正してから覚えがあると頬の赤かった魔道師を思い出した。

「ボルチモアの州宰代理だったな」

妙におどおどしている割には手腕は確かな男だった気がするが。

「はい、ダニアンと申します。先ほど田舎の廟からリディア様の消息について連絡がありました」

「何？」

立ち上がったガリオールが直ちに人払いをする。

「詳しく話せ、ダニアン」

「クロード様にお会いしとうございますが」

ダニアンの言葉にガリオールの片眉がぴくりと上がる。

「クロード様は王の影になったばかりでサイトスの事情にも慣れておられない。こんなことで煩わすこともあるまい。話す必要は無い」

「しかし、ご自分のお子の事です」

「子ども？」

ガリオールは思わず大声で聞き返してから、ゆっくりと椅子に座り直す。

「魔道師は妻帯しないし、女犯もしないというのに子どもなど出来ようはずも無いではないか。ダニアン、ここでわたしに報告して全て忘れなさい」

きつぱりと言われてダニアンのささやかな抵抗も終わる。

「わかりました。場所ですが……」

ガリオールと会ってがつくりと肩を落としながら竜門をくぐったダニアンは竜道の途中で思いがけず声をかけられた。

「ねえ、ますです君。今日は何の用だったの？」

一緒にくぐったわけでも無いのに人の竜道の中に入ってくる魔道師がいるとは思っていなかったダニアンは腰を抜かしそうになる。

竜道は使う魔道師一人一人の結界で分かれている。同じ場所に竜門を開いても前を歩いている魔道師に会うことは無い。

人の竜道に勝手に入ることが出来るほどの魔道師などほんの一握り、だ。

24・ 上位の魔道師

次の日、いつものように廟に出かけたステファンは初老の魔道師の横に、初めて見る魔道師がいるのに気付いて立ち止まった。

「魔道師様、そちらはどなた様？」

「ああ、ステファン。このお方は……」

初老の魔道師の言葉をあつさり無視して若く、背の高い魔道師がステファンの腕を取って引き寄せる。

「おまえ、ここからすぐに逃げなさい。家に帰ってはだめだよ。殺される」

驚くステファンにその魔道師は金の入っている袋を渡す。

「おまえはこのレイモンドール国の王の半身。魔道師の子どもなんだ。知られれば殺される。魔道師を避けて逃げろ。おまえは父親、今はクロードと名乗っているがいずれは、コーラルの名を持つ魔道師に瓜二つなんだからね。母親はこのボルチモア州の州姫だ。いいかい？ もう、家族の誰も生きてはいない。おまえ一人で行け」

魔道師の言葉にステファンは驚いて立ちすくむ。

小さいこどもに手短に話すには本当のことを言うしかない。真綿でくるんだように言うことなど理解できないのだから。

灰色の目をひそめてルークは手に持ったままの巾着を子どもの懷にねじ込む。

「さあ、早く行け」

その声に弾かれたようにステファンは走り出す。

こどもが居なくなつて、やっと時が戻つたように初老の魔道師はルークを見た。

「ルーク様、何という事を！ こ、これはサイトスにご報告せねば」「え？ 何の話かな。おまえがこの廟でクロードの子どもを匿つて

いた、という事だっけ？」

「そ、そんな」

ルークの言葉に初老の魔道師がわなわなと震え、膝に力が入らないのかその場にしゃがみ込む。

「今日、ステファンはここへ来なかった。で、いいじゃない？ そうだろう？ 良い廟だねえ、ここ。小さいけど居心地が良い。おまえも一緒に焼けちゃうのは嫌だろう。わたしが本気だと思わなかったらいけないから、おまえの腕を一本もらっていく」

腕に現れたレーン文字の後に恐ろしいほどの痛み。

痛みの淵から戻った魔道師の左手は、肩口から無くなっていた。初めから無かったように。

笑いながら次々と物騒な事を言う上位の魔道師に、痛みの余韻に震えながら初老の魔道師は首を縦にふることしかできない。

「わたしが来たことをバラしたら殺しちゃうからね。ではさよなら」
竜門が開いて不吉な姿は闇に消える。

しかし、いつまでもしゃがみ込む魔道師の体の震えは収まらない。

こんなに上位の魔道師と言う者は恐ろしいのか。人外の者、という言葉がその魔道師の頭に浮かんだ。

ステファンは混乱する頭を抱えながら町を出ようと走り続ける。

ぼくは殺されるの？ 何か悪いことをしてしまったの？ 母さんの言いつけを破ってしまったから？ ぼくが母さんの秘密をやべったから？

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

泣きながらいつしか歩いていた彼は自分を呼ぶ声にぎくりと立ち止まる。

「どうした？ ステファン」

涙の向こう側にいたのは自分の兄。

「お兄ちゃん、生きていたの？ 母さんは？ 父さんは？」

泣き顔を途端にほころばせて抱きついてきた弟に兄のヘンリーは驚く。

「一体何を言ってるんだ？ おいらは父さんのお使いで隣町のトーナさん家に修理の出来た鋤を渡しに行つて来たんだけど。父さんと母さんに何かあったのか」

兄の言葉を聞いてステファンの顔は見る間に曇る。

「ごめん、兄ちゃん。ぼくのせいだ」

普段あまり泣き顔など見せない落ち着いた弟の取り乱す様子に、ヘンリーは悪い予感を感じた。

25・ 残された二人

「どういうことかもう一回言ってみろ、ステファン」

泣きじゃくる弟をあやしなから聞く話にヘンリーは信じられないと、二度言ったが。

本当は自分のほうが泣きたかった。だが、目の前の弟は自分を頼っている。

そう思うと涙が目の奥から前には出ていかなかった。

「なあ、お金を貰ったって言ったよな。兄ちゃんに見せてみな」

しゃくりあげながらステファンは、懷から魔道師に貰った巾着袋を取り出して兄に見せた。

「こ、これは。これは大金だぞ」

中をのぞいたヘンリーが呻くように言う。

金貨が五枚に銀貨が十枚、銅貨が三十枚ほど。

魔道師は当座に使うなら銅貨や銀貨のほうがいいだろうと気をまわして入れてくれたらしい。

年端もいかない子どもが金貨を持っているぐらい、不信なことはないのだから。金貨についてはゆっくりどう使うか、決めなくてはならない。

「今日は、近くの森で野宿だ。いいか、兄ちゃんがこっそり家の様子を見てくるから待ってるんだぞ」

「兄ちゃん、行かないで」

さすがの弟を押し留めてヘンリーは立ち上がる。まだ、本当に全面的に信じたわけじゃなかった。自分の目で確かめたい。

まさか、そんな事があるなんて心の端でヘンリーが頭を抱えてうずくまっている。

弟の前では決して見せられない、本当の自分。

それを振り切るようにただ、走る。走っていれば最悪のことから逃れることができるというかのよう。

息が切れて心臓が左右に引き裂かれるような無茶な走り方でヘンリーは走っていたがその足が急に緩やかになる。

見知った風景に　怖くなったのだ。

本当のことだったら、どうしたらいい？

走るのを止めた途端に周りの状況がいつもと違うのに気づく。

大きくもない道いっぱい何人も人が右往左往している。

ヘンリーは自分の家のある通りの少し手前で走っている男たちの一人を捕まえた。

「何を急いでるんだ、おじさん」

「ああ？　この先の鍛冶屋が火事を出したらしい。気付いた時にはもう、誰も入れなくらいに燃えちまったそうだ。類焼を防ぐ為に皆大騒ぎだ」

喚くように話す男は一息にしゃべるとそのまま走って行った。

大勢が走る中にぽつんと立つ少年。

「みな燃えてしまった？　嘘だ、父さんが火を自分で出すわけが無い」

くるりと来た道を引き返すヘンリーは何度も大声で叫んでいた。とても現場を見れなかった。

それに　火をつけた奴がまだ残っているかもしれないのだ。

「父さんはそんな事をしない！」

「父さんは絶対しない！」

「いいか、俺たちは火を日常に使っているが、気を抜いたらだめだぞ。もらい火で火事になることがあっても、うちからは絶対火事を出さないんだぞ」

父さんはいつもそう言っていた。　火の始末もくどいくらいしていたんだ。

「父さん、母さん……」

家の方角から離れて行くほど、流れていく涙。　そして　思い出す。

「……ステファン」

そうだ、ステファン。あいつは大丈夫だろうか。

一人残してきた弟の事を思い出して、ヘンリーの涙が止まる。
あいつを守らなくては。

魔道師たちが狙っているのはステファンだ。

息もつかず、走りに走って別れた場所を目指す。

「兄ちゃん」

森の大木の陰から飛び出す弟を抱きしめてヘンリーは心に誓う。

こいつだけは失わない、と。

それから何年も一箇所に留まらない生活を送りながら、二人の兄弟は成長する。

いつの間にか十年近くの月日が流れたある日。

「兄貴、ぼくやりたい事が出来たんだ」

そう切り出されたヘンリーは思いもなかった言葉を弟から聞く。
「魔道師から権力を取り返す、レジスタンス活動にぼくは加わる事にした」

「ぼくが兄貴の活動に引つ張られたんじゃない。兄貴がぼくに力を貸してくれたんだ」

ステファンは、振り払うように目を一度硬く閉じてから、話を終えた。

「それでおまえ、コーラルを倒すことが出来るのか。自分の親だろ困ったように問う、ウイリアムの言葉に浮かぶステファンの皮肉っぽい笑み。

「コーラルはたぶん、自分に子どもがいるなんて知っちゃあいないさ。ボルチモアでの出来事は若気のいたりでつい、やってしまった事。今では消してしまいたい過去だろうさ。勿論、ぼくだって奴と再会して語り合おうなんて思ってたやしない」

「ステファン」

「あいつのせいでお袋も親父も、もつと言えば兄貴もぼくも酷い目にあっただからな。ぼくの父は死んだ鍛冶屋のラッシュだ。悪いがぼくの行動の八割は私怨だ」

アリスローザの気遣うような呼びかけをすっぱりと切って、ステファンは苦々しく言う。とハーコートを見る。

「だから、あなたもぼくを甥っ子のように見るなんて止めてくださいね」

「それをおまえが望むのなら」

ハーコートが言いながら起き上がるステファンに手を貸す。

「では、出発だな」

御者台に戻ったウィリアムがムチを振り上げた。

森林地帯のボルチモア州とモンド州の州境近くに向かって馬車は向かう。

しばらく響くのは馬車の車輪が地面の朽木を轢きしだく音だけ。

「なあ、コーラルがボルチモアにいた頃おまえは何していたんだ？」

ステファンの代わりに御者台に上がった中年の魔道師にウィリアムが話しかけた。

「そりゃあ、ボルチモアにおりましたよ」

「じゃあ、さっきの話も知っていたのか」

ウィリアムの問いに顔を向ける事もなく魔道師はそっけなく答える。

「あたしはその頃まだ二十代でしたよ」

「ってことは？」

「そんな大事な事を魔道師だからという理由で誰もが知っている訳はないと言っているんです」

ダニアンの回りくどい言い方に眉をひそめたウィリアムが目の端で見る隣の魔道師。

「そうだな、おまえにも若いときがあつたんだよな」

ウィリアムの言葉にダニアンは大いに憤慨していたが、自分がステファンが生まれた頃からボルチモア州の州宰補佐をしていた事など話すつもりは無かった。

「あなたこそ、ボルチモアの州軍を統括しているトレンス將軍の弟という立場でレジスタンス活動なんてどういうわけです？」

「おれ？」

「そうですよ、あなたのことも謎ですよ」

「おれは不良息子だからなあ」

「そんな事が見れば分かりますよ。トレンス將軍はとても正義感の強いりっぱな方です」

ダニアンの見事な言い切りっぷりにウィリアムはそうだよなあと思つた。

それが問題なんだよな。

26・ 出会い

小さい頃から立派な兄と引き比べられていたウィリアムは自分でも安直だとは思いつながら親に反発した生き方しかできなかった。

何もかも腹立たしく厭わしい。

親に無理やり入れられた仕官学校もさぼりがちで、今日もお偉い方のご訪問があるとかではたついている学校の建物を抜け出して敷地内の庭をぶらついていた。

「君、士官候補生は講堂に集まっているはずだけど」

声をかけてきた方へ目を向けると目の前にはまだ十代前半くらいに見える、貴族らしい身なりの良い少年が立っていた。

明るい金髪が朝の光を受けて金粉をあたりに振りまいているかに見える。

澄んだ青の目がウィリアムを真っ直ぐに見て、ウィリアムはばつが悪くなって目を逸らす。

「せっかくわたしが前の日にがんばって書いた原稿を読むのだから君にも聞いてもらいたいな」

そして、さあと言って差し出される手。

「あんたは？」

「わたしは、トラシュ・ゴイル・ヴァン・ドミニク。ボルチモア州の候子だよ」

言葉を失ったただ見返すウィリアムの手を掴むとトラシュはすたすたと講堂へ向かう。

「あの、おれ、いや、わたしはウィリアム・リード・ヴァン・トレンスです」

「ウィリアムか、良い名前だ。じゃあ、挨拶もすんだことだし少し急ぐ」

二人の少年は手を繋いだまま、大急ぎで走り出す。

講堂に近づくと、一人で抜け出した候子に学校中が大騒ぎになっていた。

「トラシユ様！ 大丈夫でございますか」

青い顔の従者と学校関係者が取り囲む中、一緒にいたウイリアムにも追求が始まる。

「おまえがトラシユ様を連れまわしていたのじゃないだろうな」

「ゾーイ校長、違いますよ。わたしが彼を連れまわしていたんです」
大人に囲まれて少しも臆すことなく、トラシユはにこやかに言う
てウイリアムの手を取る。

「ウイリアム、悪かったね。つき合わせてしまつて。また、学校を
案内してくれ。今日は楽しかった」

「い、いや、その」

しどろもどろで返事も出来ないウイリアムは無事無罪放免となり、
大人たちはトラシユを囲みながら講堂へ向かつていく。

それが、おれとトラシユの初めての出会いだった。

しつかりして

礼儀正しくて

性格が良くて

そんな奴、いるのか？

「ははあ、そんな奴いるものか」

安酒の瓶を口から離してトラシユは斜面になっている芝生に寝っ
ころがって顔だけウイリアムに向ける。

「おい、おまえ十二歳じゃなかったっけ？ っていうか、酒飲みす
ぎ」

無理やりまた、口をつけている横の少年から酒瓶を奪ってウイリ
アムは自分が呷る。

「まずい、こんなの飲むなよ。体壊すぞ」

ウイリアムの苦言に少年は大笑いする。

「何だよ、君が説教するなんて世も末だな。酒だと思うから不味いんだ。ぶっ飛べる薬だと思えば悪くない」

「おまえ、裏表ありすぎだよ。ついていけねえ」

自分より五、六歳は下のはずの少年はくくつと笑うと爽やかに見える笑顔を見せる。この笑顔に大人はころつと騙されるんだよねあとウイリアムは呟く。

「だいたい、今日はどんな作り話をでっちあげてここに来てるんだか。ため息まじりにもう一口酒を飲む。」

「やっぱり、不味い。」

「ねえ、うちにまた、弟が出来たんだよ。良くやるよなあ、父上も」

「え？ 何人目だっけ」

「確か十八人目かな、いや十九人目かも。誰が誰だかもう分かんなくなってるけど」

「あつさりと言うわりにはトラシュの眉は大きく顰められていた。」

「やっぱり、嫌なもんかな。親父がいろんな女の人と子どもを作るのって」

「父上も嫌だけど、たいしたことじゃないとか言いながら、影で妾姫を虐めてる母上のほうが嫌だな。女なんて大嫌いだ」

「ふうん」

品行方正な候子の仮面の下にある本当の感情を見せるトラシュに何も言わず、ウイリアムは酒瓶を渡す。

「まあ、飲め。一緒にぶっ飛ぼうぜ」

27・道を説く者

そのまま自分は軍人になるのかとウィリアムは思っていた。別に他にやりたいことがある訳でもない。

ところがこのボルチモア州の候子とひよんな事で知り合ってから何かが変わってきていた。

士官学校を出た途端にトラシュ付きの従者の一人としてボルチモア州城に詰めることになる。

これには、今まで不詳の息子だと嘆いていた父親も母親も涙を流さんばかりに喜んだ。

彼としても窮屈な家から出られるのは大歓迎なのだが。

そんな生活が何年か過ぎて。彼がトラシュの従者の中でも筆頭役になるうかという頃。

「今日はウィリアムだけ連れて行く」

トラシュは、周囲の反対を撥ね退けるとにつこりと笑った。

しかし、ウィリアムを連れて外出する時は、トラシュの行き先はとんでも無いところばかりなのはいつもの事。

「今日はどこへ行くんだ？」

他の従者も無く、二人きりのときのぞんざいな口でトラシュに聞く。

「今日か？ 今日城下の外れ、バインツ地区に行こうと思ってる」

「バインツ？」

何でまた、と驚いた顔のウィリアムに彼の主はきれいな笑顔を向ける。

「貧民窟がどういうものか、知っておくのもこの州を治める者として必要だろ？」

「そうかな？」

「そうさ。じゃ、これに着替えよう」

楽しそうに笑うとトラシュは着替えの服を指差した。

「何だこれ？」

「ばかだな、そんな上質の服なんか着て行ったら襲ってくださいと言ってるようなもんだぞ」

なんで候子がそんな事を知ってるんだ、というウイリアムの疑惑の眼差しをけろりと受け流してトラシュはさっさと着替え始めた。継ぎの当たった服を着て顔を汚した二人は、バインツ地区の近くで馬を降りると付いて来た馬丁の男をそこに置いたまま歩き出す。

「ここに何があるんだ、トラシュ」

「ここには、ある人がいる」

「ある人？」

「会えば君も心酔すると思うよ、ウィル」

彼しか呼ばない愛称で呼ばれてくすぐったい思いがいつもするのはなぜだろうか。

汚水が雨の後のように所々溜まっているような所をすいすいとトラシュは歩いて行く。

明らかに何度もここへ来ているのだ。

口止めされていたのだろうが、他の従者から報告が上がってない事にウイリアムは警護のあり方に危惧を抱く。

こんなところで襲われでもしたら自分はトラシュを守れるのか。ウイリアムといえば、あまりの臭氣に気を取られてどこで曲がったのかも分からなくなっていたというのに。

打ち捨てられたような崩れかかった廟の中にトラシュは楽々と入って行くのをウイリアムは見失わないようにぴったりと付いて行く。通路の奥、おおげさな音を立てて開く扉の向こうに見える人影。

「今日は、導師様」

「おや、トラシュか。よく来たな」

闇の暗さにやっと目が慣れてきたウイリアムの目に映る年寄りの男。

彼がいままで見た中で一番歳を取っているのではないかとも思える姿。

顔の中にはそれこそ隙間を作ってはいけなにかのようにある皺。弛んだ瞼に隠れるようにわずかに見えるやぶ睨みの目元。

白くて長い髪は蜘蛛の巣のように絡みつつ背中を覆い、顎から伸ばされた髭は地面に届くかと思うほど。

「魔道師？」

彼のまといっている服はこの国の魔道師が着ている物と同じ様式。違うのは色なのだが。

青灰色のローブでは無い、黒っぽい緑色のローブ。

「おや、初顔じゃな。わしは魔道師では無い。導師じゃ。道を説く者だよ、君」

しわがれた声で楽しそうに話す老人が二人に座れと椅子を指差す。

「導師様　ですか？」

「さよう、君の名前は何というのじゃ」

「ウィリアム・リード・ヴァン・トレンスと言います」

「トレンス、ほう、州軍にその名の将校がいたな」

俗世に疎いような成りをしていながら、この老人はかなり詳しくこの州の内情を知っているようだった。それはトラシュからの情報だろうか。

「ウィリアム、君はこの国の有り様をどう思っている？」

老人の問いかけにウィリアムは絶句する。

この国の有り様？　何がおかしいのか、どう思うとは何を指しているのか。

「意味がわかりません。この国はおかしいのですか？」

「ふむ、分かんのも無理はないわな。この国は他の地域とは隔絶されているのだから」

老人は顎鬚をさすりながら仙人のごとく笑う。

「では、質問を変えよう。この国を動かしているのは誰かな」

「それなら分かります。レイモンドル国王、コーラル陛下です」
胸を張って答えたウィリアムに隣にいたトラシュのばかにした声が被さる。

「国王だつてえ、おい、ウィル。おまえ、物を知らないにも程があるよ」

「何がおかしいって言うんだ？」

わずかに見上げているトラシユの方がよほど年上のような、自分がまだ十やそこらのがきみたいだと感じられてウィリアムは慌てて尋ねる。

「このボルチモア州の州府を動かしているのは州宰のラジムさ。ラジムが指示を仰ぐのは父上では無く、サイトスの魔道師庁長官ガリオールだ」

吐き捨てるように語気荒く言うトラシユは挑むようにウィリアムを見上げた。

「そして、それはうちに限ったことじゃない。この国に真の自治を成し遂げている州などありはしない。この国は魔道師に操られている」

「だが、魔道師の発言力が強くても理に適うことならいいのでは？ 要はこの国が発展し、国民が潤えば誰が支配してるのなんて関係ない」

きつぱりと言うウィリアムに導師が笑い含みでうなずく。

「その通りじゃ、誰がやっていようとな。だが、そうでなかったなら？ おまえはどうする？」

誰が支配しても、のくだりでトラシユは気分を害したように眉根を寄せている。彼にとつては誰でもいいなどとは思えないらしい。

まあ、この州の候子では仕方ないか。

「違うと言つのですか、導師様」

「違うな」

あつさりと返事を返すと導師は大げさに腕を組んで話し出す。

「この国を動かしている魔道師が目指しているのは、魔道教による永年に渡る支配と魔道師庁の繁栄。ベオーク自治国の影響を受けない、レイモンドール国独自の魔道教を守る事、これに尽きる」

「ベオーク自治国って？」

聞いた事の無い国の名前をウィリアムが鸚鵡返しに聞く。

「ベオーク自治国か。ふむ、そこから説明が要るとはの。まあ、いい」

導師はまた、ゆっくりと顎鬚をさする。

28・小さなしり

大陸の西にある大国、ハオタイ。ここの高地にある小さな市くらいの自治国。ここがベオーク自治国だ。

その国には何の産業も無く、農業が栄えているわけでも無い。

といってここが、貧しい国かというとそれは裏切られるほど潤沢な資産を持っているのだ。

それはなぜか。

その国は魔道師たちだけの国だ。そこにいる使用人以外は魔道師。その国はレイモンドール以外の国にいる全ての魔道師を影響下に置いている。

魔道師たちを各国に送り、助言をし、允許を与え寄進などを受ける。

各国の王はベオーク自治国の教皇の神託なしでは正等と見なされないほど頼っている。

「そのベオーク自治国の影響を受けず、独自の魔道教支配をしている国。それがレイモンドール国なんじゃ」

「なんでそんな事が……」

「出来るのか？ というのか」

ふむふむと出来の良い生徒に笑顔を見せて老人は続ける。

「この国に張っている結界じゃよ。恐ろしく強くて禍々しいがな」

この結界？

生まれた時からいつもある結界などウィリアムにとっては日常だ。海の方こうは見えないのが普通。それが普通ではないと。

「いくら、魔道師がいようと他の国は国主が決定権を握っている。それがどうじゃ、

この国は体裁は王国だが実質は魔道教国。本当の王は魔道師の祖、イーヴァルアイ」

「イーヴァルアイ？」

「そう、齢五百年以上生きている人外の者よ」

五百年以上と聞いてウィリアムは目の前の老人を啞然と見つめた。そんな事があるはずが無いなどとは思わないが。

レイモンドールに住む者なら、上位の魔道師が人の寿命を越えて生きることくらい知っているからだ。

しかし、今までその上位の魔道師など自分の州の州宰、ラジムしか見たことが無かった。

そのラジムでさえ、先王の半身だったため確か、七十台に入るかどうかくらいだ。

人としての寿命を遥かに越えているわけではない。しかも見た目は三十代初めほど。彼はその歳から何年経っても外見は変わらないのだ。

そのイーヴアルアイなる老魔道師にしても見た目は若いのだろうか、とそっちの方へ思いが行っていたウィリアムを隣のトラシュがつつく。

「おい、ウィル。何、呆けっとしてる？」

「あ？ え？ すみません、導師様」

「イーヴアルアイに興味があるのかね、ウィリアム」

老人は目を細めてニヤリと笑った。その笑い方があまりにこれまでの老人の所作に似合わなかった為に、ウィリアムの背中がぞわりとそそけ立つ。

口の端を片方だけ上げて笑う老人は本当に達観した者なんだろうか。しかし、その笑いも時の間に仕舞いこまれて、ウィリアムの心の隅に小さなしこりを残すだけになる。

だが、もっと気をつけていたなら　　トラシュの運命は変わっていたのかもしれない。

その後、何年かの月日が流れる間に、ますますトラシュは導師の教えに傾倒していく。

それをわずかに恐れながらウィリアムはどうする事も出来なかつ

た。何がいけないのか。

何が心配なのかが言葉に出来ない。しかし、火事を知らせるような鐘の音は、あの日からずっと鳴り響いている。

あの、導師の笑い顔を見た時から。

ある日の午後意図していたわけでもないのに、自分の父親ボルチモア州候、

ドミニクに呼び出されたトラシュは興奮を抑えきれない様子で部屋に帰ってくる。

「なあ、ウィル！ 父上の事をわたしは見誤っていたようだよ」

大声でそれだけ言うウィリアムに抱きつく。

抱きつかれたウィリアムがトラシュを引き剥がして椅子に座らせる。

「どういう事が言わないとおれにはさっぱりだ」

「ああ、そうそう。そうだよな」

言った途端にまた立ち上がるとトラシュが抱きついてきた。

呆れながらもウィリアムは今度は大人しくしがみ付かれたままの姿勢でトラシュの話を待つ。

「父上は、この国の有様を憂いておられて、わたしに魔道師をまつりごとから排す手伝いをして欲しいと仰ったんだ」

「ドミニク様が？」

あの方がそんな事を言うのだろうか。ご正道うんぬんより、自州の州庫がどれだけ潤うかの方が大事……と思っていた。

それが州候として悪いわけでもない。単に私服を肥やしているわけでもない。次々と新しい施策を打ち出して、

あつという間にこの北部の何の特徴もない州を 豊かで住み易い州にしているのだから。

自分の益になる事に貪欲なお方なのだ。自分を犠牲にしてこの国を作り変えるなどと思うとは天地がひっくり返っても無いと。

ウィリアムが思うようにはトラシュは思わなかったらしいが。

ひねくれているように見えてトラシュはとても素直で理想にもえ

ている。父親の言葉に嬉しくて心が通じたと喜んでいる。

それに水を差したくない。

顔を輝かせてトラシュがウィリアムを見る。

「ウィル、わたしはおまえがレジスタンス活動を指揮する中心人物になって欲しい。そう考えているんだ。やってくれるだろう?」

何でその時、おれは断らなかつたんだろう。

本当におまえの父親に裏は無いのか?

何でそう、言ってやらなかつたんだろう?

何でおまえの側を離れたくない。嫌な予感がするんだと言わなかつたんだろう?

だけど　その時のトラシュはとても。

とても幸せそうだった。

「それでトラシュ様は今はどうしているかご存知ですか？　あの混乱の時から忽然と姿をお見かけしませんか」

魔道師の問いかけに深刻な沈黙でウイリアムが応える。

「ウイリアム？」

「州城の裏手にあいつと仲間のひとり、トーマスの変わり果てた姿が見つかったらしい。腐敗が進んでいて、だいぶ前に殺されたんだろ。おれたちがトラシュだと思っていた者は誰かが化けていたよ
うだ」

ウイリアムの固く握り締めた拳から血が流れる。それは彼の涙なのか。それともトラシュの物か　トラシュ、おまえは最後に一体誰の顔を見たんだ。おまえを無残に殺した奴は一体誰なんだ？　心あたりなら　ある。

「そいつはきつとイーヴァルアイだ」

口の中の呟きは隣の魔道師には聞こえなかった。

そう、思ったのは。

四年ほど前のモンド州、州公の長男ダリウスの成人のお祝いに州候代理として忙しい父に代わりトラシュが赴む。その時自分も一緒に行ったのだ。従者として行動するのはそれが最後だった。

その城内でトラシュは会ってしまったのだ。

悪魔と。

その悪魔は隣の公子の弟に成りすましていた。

おれは不覚にもその時、美しいと、まるで氷で出来た花のよう
うだと思っ たんだ。

「ウイル、わたしは理想の人に会ったのかもしれないよ」

トラシュの言葉にうなずきそうになってウイリアムは、はっと我に返る。

「おい、あいつはモンド州の公子だぞ。男なんだぞ」

「ウィル、わたしが女性が嫌いな事くらい知っているだろう？」

笑いながら何を言ってるんだと言う自分の主に、困った顔を作って見せるが。

「話をしてくる、おまえも心配ならついておいで」

「おい、待てよ」

ウィリアムは、ため息をつきながらトラシユの後を追う。

自分の兄の横で愛想笑いをしているのは、亜麻色の髪を黒いリボンで結んで片側に垂らしている折れそうな細い若者。リボンと同じ黒い服。地味につくっているのにそれが返って彼の美貌を際立たせているのだが。

「ダリウス殿、そちらの方は弟君とお見受けしますが紹介していただけますか」

「ああ、すまない。これはすぐ下の弟でユリウスという」

「ユリウス、こちらは隣のボルチモア州の候子でこの度、州候代理でお祝いに来ていただいたトラシユ殿下だ」

「はじめまして、ユリウス殿。わたしはトラシユ・ゴイル・ヴァン・ドミニクです。よろしく」

ユリウスが、ちらりと自分の兄に目をやると、ダリウスがさあ、と背中を押す。その様子にわずかに嫉妬してトラシユは伸ばされかけた手を掴んで引き寄せる。

「わたしはユリウス・ヴァン・ハーコートで あっ」

挨拶の言葉はユリウスがトラシユに強引に手を引かれてその腕の中にすっぽり入ってしまったことで途切れてしまう。

「どうした？ ユリウス」

心配そうに手を出そうとするダリウスに、ユリウスがさっとトラシユの手を振り払って体を戻す。

「いえ、失礼しました。躓いて倒れそうになったのでトラシユ様が助けてくれたんですよ」

「そんなふうには見えなかったが」

無然とするダリウスの様子に、後ろに控えていたウイリアムは彼が自分の主と同じ気持ちを弟に抱いているのかと気付く。

そして……見てしまったのだ。その時。

あの笑いを。

にらみ合うダリウスとトラシュを見ながら浮かべていたユリウスの表情を。

あれは、同じだった。

口の端を片側だけ上げてにやりとした、笑い。

導師と名乗った老人と同じだったのだ。

これはいけないと注意しなかった。だが、なんと言えはいいのか。そして　あの悪魔は……ユリウスと名乗っていた魔道師が、きつとトラシュを殺したのに決まっている。

おれの主を。おれの大事な親友を。

「おれは魔道師に支配された国なんか許せない、イーヴァルアイもその僕であるコーラルも許せない、絶対」

ウイリアムの低い呟きに魔道師はわずかに目を動かしたただけで何も反応はしなかった。

イーヴァルアイにそっくりな兄がいたことなど誰も知らない。

それは、ユリウスではなく、バサラだと知っている人物は二人とも今は異国の地にいる。

30・ 温い思い出

馬車はモンド州とボルチモア州の州境沿いの深い渓谷に入る。

モンド州ゴート山脈に隣接する州境側はわずかな足場を残して絶壁に近い、刀で削いだような巨岩が深い谷へとそのまま落ち込んでいる。その為、この辺は関所も何も置かれてはいない。下に目を向けると深い谷底から濃い霧が湧き上がってきて命の危険を侵して下を覗こうとしても見えはしないのだが。

そこへ馬車は止まった。

御者台から降りた魔道師が手に持った小刀で複雑な魔方陣を岩の上に描いていく。

その小刀には呪がかけられているのだろう。魔道師が軽く当てるだけで岩の上に線が引かれていく。

する事も無く他の者はその様子をながめていた。

「はい、出来ましたよ。こちらへ来てください」

その声にステファンが馬車から馬を放して自由にし、ウィリアムがアリスローザとハーコートと共に馬車を崖から落とす。

反響するおおきな物音も飲み込んでしまう深い深い谷。

魔方陣の中に入って目を閉じた途端に始まる呪文。恐ろしい力を外に引つ張られそうになりながら耐える時間。長いようで終わってみるといくらか経ってはいない。

目を開けた目前に広がる風景はさつきと少しも変わってないかのようだ。しかし、さつきとは逆に深い谷があることに気付いて、アリスローザはほっと胸を撫で下ろした。

「ここで暫く待ちましょう。使い魔を放ちましたからじき、お迎えがまいります」

ダニアンはそう言うのとさつさと平らな岩を見つけて座り込む。

「ハーコート公様、こちらにお座りください」

アリスローザが自分のマントを脱いで岩の上に置こうとするのを

ハーコートが遮って自分のマントを敷いた。

「アリスローザ、座りなさい。わたしは年寄りだがまだまだ男として格好を付けさせて欲しい」

「では、一緒に座りましょう」

軽く背中をつき合わすように座ったためにアリスローザに大きくて暖かい背中 of 感触が伝わる。

ああ、お父様。お父様はこのお方みたいに出来た方じゃ無かったけど。それでもやっぱりアリスローザには大好きな父親だったのだ。

「どうした？」

「少し体を預けてもいいですが、ハーコート公様？」

「構わんが」

ハーコートの了承の返事の後に彼の背中にかかる重み。女の身で疲れているのだと解釈して彼は体をずらして自分の背中が彼女の背中とぴったりと合わさるようにしてやる。

「少し、休みなさい」

自分の末娘の事を思い出して、ハーコートは随分と彼らに会って無いことに気付く。

三年前の出来事から大きく変わっていったものだ。自分もこの国も。

ダリウスの事が無かったら自分はクライブ陛下に最後まで仕えようと思っていたのだ。

自分の弟、前王と同じように優しく素直なクライブが心配で。

今度は、離れまいと。疎まれてもどうなっても自分からはサイトスから出ないと決めていたのに。

魔道師のコーラルに宰相の座を奪われても、それでもいいと思っていたのに。

こんな事になるとは。

彼は、陛下は大丈夫なのだろうか。

今越えたばかりの谷の向こう、サイトスに続く道を。ハーコート

はいつまでも見つめていた。

その半刻ほど後、馬の蹄と馬車の車輪の音が聞こえて。

「父上！ 父上！」

聞き知った息子の声にハーコートは顔を反対側に移す。

その声にぐっすりと寝込んでいたアリスローザが目覚めました。

「あ、ハーコート公様。わたししたら、申し訳ありません」

「いや、こんなおじさんの背中だったらいつでも貸すよ」

振り返ったハーコートが手を貸してアリスローザを立ち上げさせる。

「父上、ご無事で良かった」

「ダリウス、おまえが迎えにくるとは。まったく自分の立場をまったく理解しておらんようだな」

小言を言いながらも顔に浮かぶのは満面の笑み。

対するダリウスもこどものように父親に抱きつく。

「わたしは心配で、心配で。本当に良かった」

自分よりわずかに高い息子の頭をよしよしと撫でてその後。

「挨拶は後だ。ここを早く出発しよう」

ハーコートの声を合図に馬車はゴート山脈に入って行く。

モンド州ゴート山脈は三年前までこの国の魔道教の総本山だった。広大な山脈のあちらこちらに残るうち捨てられた廟。

この最奥にあるレイモンドール国一、険しく高い標高を持つハンゲル山に母廟がある。長大な巨岩を彫りぬいた天に届くかと思われるほど大きな廟。

五百年以上前、そこでレイモンドール国の創成の王、ヴァイロンが一人の魔道師と契約をした。

そこから始まった魔道で守られた国の歴史も今は昔。

鬱蒼と茂る緑の中を走る馬車から外を眺めてアリスローザは昔を懐かしむ温い思い出の中につかの間浸っていた。

31・最後の仕上げ

「クライブ陛下、ご乱心」

「まさか」

「夜な夜な大声で怒鳴りながら城中を歩き回っているらしい」

「毎日、気に入らない従者や女官の首を刎ねているらしい」

「ご公務は宰相のコーラル様に任せきりだそうだ」

「やっぱりまだ子どもだったからな。飽きてしまわれたのではないか」

「こうなったら王位の移譲も考えなくては」

このところ、繰り返される噂。

暫く前から朝議にも公の会議にもまったく顔をださなくなっている王への勝手な憶測がまことしやかに流れていた。

王は病で危篤状態である。あるいは王である事に飽きて離宮に移って遊びほうけている。

または、王の重責に耐えられず、精神を病んでしまった等等。

いずれにしても宰相のコーラルは否定しているが。

「クライブ陛下はまだお若いのだ。長い目で見てもらわなくては。そのためわたしがいるのだ。わたしはクライブ陛下の血に繋がる者として誠心誠意お勤めする所存ですから」

コーラルの言葉に周りの高級官吏や大臣も口をつぐむ。

そして皆の頭に刷り込まれる事実。

そうだ、宰相コーラルは王たる資格を持っているのだ　　ということ。

少しづつ、そう少しづつだ。　　ようやく自分にも運が向いて来たとコーラルは胸の内であらう。　　今までわたしは我慢しどうしだったのだから。

ゆっくり、焦らずゆっくりでいい。　　誰も邪魔をする者などない。

さきほど、待ち焦がれていた報告が届いたのだ。　ボルチモア州内で元宰相の我が兄、ハーコート公爵が闇討ちにあったと。

その場所にマルトしかいなかったら、腹を抱えて大笑いをしていただろう。　今まで何かと反論し、意見して譲らなかった兄。

自分と血が繋がっているなどと思つた事など無かつた。　彼にとつて血の繋がりなど何の価値も無い。

王になる為にいるのは前王の血、その子どものクライブとの繋がりでだけだ。

それも王になるためだけに必要なだけ……の。

「それは真の知らせなのか。なんということだ。この事はしばらく口外してはならん。急ぎ、モンド州だけに連絡を取りなさい。兄上が……お亡くなりになるなどと」

がつくりと崩れ落ちるコーラルをまわりの官吏が慌てて支える。

「コーラル様、しつかりなさってください」

「早くコーラル様を寢室へお連れして」

宰相付きの執政官が大声で命を下す。　その騒ぎはいくらの日にちも経たない間にサイトス中に広まる。　人の口に戸は立てられない。

コーラルは自分の演技がサイトスの王城に起こした波紋の広がりに満足していた。

さて、そろそろ最後の仕上げに取り掛からねば。

ここは、どこだつたろうか。

そして自分は何だつたろうか。

寢台に横になったまま、境界のあいまいなはっきりしない世界で、ただ一人の住人である少年は自問する。

まだ幼い、というには大人だが、成人というにはまだ数年待たなくてはならない。

そんな外見の少年の目は開いていた。　が、しかしその目はぼんやりと天井に向いてはいたがそこを見ているわけでは無かつた。

現実の世界から逃げて、逃げて、逃げて。

その終着点がこの何ともはつきりしない空間。 何があるわけでも無いが、心を乱される何かも、無い。

だから。 ずっとここにいたい。 そうだ、ここがわたしの居場所なのだ。

部屋に満ちる香の匂い。 壁には隙間がないほどの呪符が貼られている。

真ん中に置かれている寝台の下には大きな魔方陣が描かれていた。その部屋の外で先ほどから行ったり来たりしている、密かな足音。充分躊躇ったのちに手が伸ばされる、扉の取っ手。

「陛下、あの、お食事を」

いくら食欲が無いと聞いていても、国王陛下が食事を取らなくなってもう四日になる。 誰とも会いたくないと仰っているとはいえ、放っておいていいのか。

女官のサリアは気になってここへ来てこの数日、扉の前でうろつろとしていたのだ。だが、もう限界だ。一目、陛下のご様子を見るだけだ。見つかつて怒られてしまうのは覚悟の上と思い切って扉を開けた。

「こ、これは？」

内部の様子に慌てて扉を閉めると逃げるようにサリアは走り出す。誰かに、伝えなくては。陛下が大変な事に。

誰に言えば良いのか？ マルト様？

「いえ、それはダメだわ」

マルト様はこの事を知っているのだ。 いや、彼こそが国王陛下にあんな恐ろしい事をしている首謀者の一人かもしれないのだからどうしたらいいの？

サリアは震える体でただ、遠くへ行くことしか考えられなかった。「どうした？」

ただならぬ女官の様子に気づいた男が女官の腕を掴んだ。

「お、お助けください。わたしは何も見えておりません」

「何？ おまえ何を見たのだ？」

うかつに口に出した自分自身に驚いてその女官は硬直して腕を掴む男を見上げた。

国軍、左軍將軍レミントン。 彼は宰相であるコーラルとそりが合わず、何ヶ月も南であつた騒乱を収めるためにサイトを留守にしていた。

「陛下のご様子が」

「何？ 陛下がどうされたのだ」

レミントンはすっかり怯えきつた女官を宥めすかしながら自分の居室に迎え入れると根気良く話を聞きだした。

「やはり、あの魔道師は良からぬ事を企んでいたのだな。サリア、わたしを陛下が軟禁されている部屋に案内しなさい。ガイダス、おまえは何人か兵を密かに配して速やかに陛下の御身をサイトをからお連れするのだ」

きびきびと命を出しながらレミントンは歩き出す。 それにしても従者として付いていたはずの自分の息子らは何をしていたのだ？ 彼の息子をはじめ、新しく三年前に従者となつた若者の誰一人として生きていない事をこの後彼は知ることになる。

32・ 奪還失敗

「陛下、何でこんなことに……」

絶句しながらも部屋に入ったレミントン配下のガイドスら数人の兵士にぐつたりとして反応の無い少年を抱き渡す。

その彼らの後ろで聞こえる扉の閉まる音。

ぎくりと振り返った彼の前にいるのはマルトという官服の男。

「見られましたか、將軍」

「おまえ確か還俗した魔道師だったな。コーラルの手の者か」

腰から抜いた剣を構える男にマルトは驚く素振りも無い。

「知っていらつしやるんなら、話が早いですね。そうですね、わたしは今でも魔道師なんですよ、將軍」

官服の男は印を組む。

『縛せよ』

レミントン將軍はそのまま髪の毛の一本も動かさない。じわりと浮かぶ額の汗。

もう少し手勢を残しておくべきだったのか。いや、それより陛下をここから出さねば。

陛下が無事、ここから出られるなら自分は喜んでこの身を差し出す。

そんなレミントンの気持ち逆天でする目の前の男。

「良いことを教えて差し上げましょう。あなたの息子も他の従者も皆、あの世です。ああ、でも大丈夫。あなたもすぐ追いつきますよ。何を気になさっておられるんです？　そうか、陛下を連れた部下の事です。それならその寝台の脇に倒れていますよ」

大きく見開かれる目。開かない口から漏れる嗚咽。

「まあ、陛下を拉致して何をしようと企んでいたのか。聞いたとしても答えないでしょうねえ。わたしが体を自由に出来る呪文を会得

していたら良かったんでしようが。今更ですかね。仕方ありません」
とうとうとマルトが唱える呪文が終わる。と同時にレミントンの心臓が悲鳴をあげて彼は開かない口から泡を吹いて白目を向く。

そして 訪れる静寂。

『解』

印を切って、どさりと倒れる音を気にする事も無く。 男は部屋を出て廊下を見回す。

誰もいないようだ。 そう、確信してにまりと笑う。

「コーラル様にすぐご報告せねば」

そして、ここの死体も誰にも見つからないように処理しなくては。

「何？ クライブ様が連れ去られようとした？ レミントンがか」

マルトの言葉に苦虫を噛んだような顔を見せる魔道師。 もう、

自分の邪魔をする者などいないと思っていたが。

「それで殺してしまったのか」

「はい、申し訳ありません。口を割らせる術などわたしは使えませんでした」

マルトが言うその言葉に、卑屈なものを感じてコーラルは片眉を上げた。

この者を使っているのは、この男の言うとおり、術の巧みさゆえではない。

このマルトという男は魔道師庁長官であつた、ガリオールの側つきだったからだ。 コーラルはガリオールに心頭していた。

いつも冷静で何事もきちんとして粛々と物事を進めていくその姿に憧れをいだいて。

彼に認められたいと願い、自分の半身が亡くなって正式に魔道師庁に下るのを楽しみにしていたのに。

だが、彼はもういない。

一方、マルトの方もコーラルに仕えているのはガリオール恋しさ

だった。

十年というもの、誠心誠意仕えていつかガリオールによって竜印を刻印されるのを心待ちにしていたのだ。
もっと早く竜印を頂きたかったのに。

そう、思った途端思い出す、嫌な記憶。

33・刻印

それはマルトがガリオールに仕えて九年経った頃。

ガリオールの執務室にふらっと現れたのは、ガリオールと同期の魔道師。

魔道教の本山であるモンド州、ゴート山脈に散らばる廟を統べる廟長ルーク。

ガリオールとほぼ同じ時期に魔道師になって、同じ時期に主に竜印を頂いた者。そして齢四百年以上を生きているレイモンドール最古参の魔道師の一人。

「ガリオール、お久しぶり。ちょっと遊びに来たよ」

ルークほどの高位の魔道師が何で用も無いのにこう、度々一人きりで遊びに来たなどとサイトスの王城にやってくるのか。

控えているマルトはやれやれと自分の額に手をやるガリオールをちらりと見る。ガリオール様もやっぱりそう、お考えなのだ。

そう、思ってた彼を見ると。

「ルーク、久しぶりなんかじゃないだろう？ ゴートの廟に主がおられないからといって君が遊んでいる暇は無いはずだが」

小言を言っているが、今まで渋面を崩さず仕事をしていた彼の顔に浮かんでいるのは軽やかな笑顔。

「ふふん、丁度、わたしに会いたい頃だろうかあとと思ってね。お茶にしたら？ ガリオール？」

ガリオールが手に持っていた書類を取り上げて無造作に机に放るとルークは勝手にガリオールの正面に椅子を引きずって座る。

「ねえ、君。お茶二つお願いね」

ルークはそう言うのと両肘を机についてその上に顎をのせてガリオールに向く。

「で、何かあるんだろう？ 早く言え。灰色頭、わたしは忙しいんだからな」

ガリオールが彼にしか使わない親しげでやや乱暴な言葉を使う。

「灰色頭って……そのまんまじゃないか。もつとすてきな愛称をつけて欲しいなあ。例えば可愛いルーカスちゃん、とかさ」

「なんで、おまえの事を可愛いなんて言わなきゃならないんだ。思ってもいない事を言う義理は無いだろう。ばかルーカス」

「酷いな。それ言われるくらいならルークのままでいいかも。それよりさあ、来年の竜印を授ける魔道師の中にあの子がいたからさ」

「あの子？」

お茶を入れようとしたマルトの手が止まる。自分が来年こそはその中に入っているのだろうか。ときどきと胸を高鳴らせながら用意を続ける。

「あの、ボルチモアの（ますですの子）だよ。確かダニアン」

「ああ、わたしの一存で入れた。あれの術は半身出身の魔道師より頭一つ抜きん出ているからな」

ガリオールの言葉に慌てて取り落としそうになった茶器を盆の上に戻す。来年は確か、五人ほどこしか竜印を受ける者はいないはずだ。

そのうち、四人ほどは名前の知れた術士でほぼ確実に魔道師庁内で噂されていた者たちだった。

あとの一人、それが自分ではないかと今の今まで思っていたのに、
ダニアン？ そんな名前聞いた事がない。しかもルークが
名指しで確認しにくるとは。

「どうだろうかとさつきボルチモアに行ってきたんだけどさ。あの子ったらそんな滅相も無いって泣きそうだったよ。竜印なんて要らないって感じだったけど。外してやったら？」

「本人の意見など関係無い。実力のある者にそれ相等の仕事を与える。そのための竜印なのだからな。あいつはこの先、使える魔道師になる」

ガリオールはため息をついて目の前の魔道師の腕を払う。

「ルーク、その子どもっばい仕草をやめろ。おまえはまた、前の話

を蒸し返すのか」

「その通り、嫌だというのに竜印を刻印するなんてわたしは反対だよ。あの子は人として死んでいく方を選んだ。で、いいじゃない、ガリオール」

「じゃあ、わたしに。このわたしに竜印を下さいませ。ガリオール様」

思わず声高に二人の会話に割り込んでマルトは期待の籠った目でガリオールを見た。

その声に二人は驚いて目を合わす。

「この子誰？」

「マルトだ。雑用を任せている」

ルークに簡単に返した後に続くのは厳しい叱責。

「私達の話に聞き耳を立てるとはこういう事か。竜印刻印の大事におまえが口出しする事は許されない」

「あ、えつと誰だっけ、君、お茶早くしてね」

いつも側に居るために気安くし過ぎた事とガリオールの自分に対する評価の低さにマルトは茫然自失に陥る。

そして、あの子と呼ばれる魔道師の存在。魔道師の頂点にいる二人に認められているくせに竜印を拒むなんて。

どんな子ども……若者？ どちらにしても絶対許されるものではない。

マルトは唇を噛んだ。

その魔道師が禿げかかったしよぼくれた中年の魔道師だとわかったのは次の年だった。そして幸か不幸か、彼に竜印は授けられなかった。

34・王位の移譲

それは主が亡くなってこの国の結界が消え、竜印を受けていた魔道師はまだ人としての寿命を残していたコーラル以外は消えてしまったからなのだが。

自分が竜印を授かる事も最早無い。　　気を取り直してマルトは今の主人の言葉に注意を戻す。

「それはそうと陛下の御身を不埒ふちやな輩からお守りしなくてはならない。陛下には王位の移譲の書類にサイン頂き、指輪をお渡し頂いた後、地下宮にお移り頂く」

「地下宮ですか」

そうだ、とうなづいてコーラルは重々しい顔を作ってみせる。

「サイトスで警備が一番厳重な場所だからな。明日、大臣級の貴族立会いの下クライブ陛下の御様子を見てもらう。そして」

そこまで言ってもう我慢が出来なかったのか、コーラルは笑い声で続ける。

「王位をわたしに移譲するための会議を開催する」

その時、上手くやって国務大臣に口火を切らせよう。　正式な戴冠式は後回しだな。

さて、レミントン將軍にはたっぷりと泥を被ってもらう事しよう。

うれしそうなコーラルの顔にマルトはこっさり鼻を鳴らす。　わたしの主人としてはこの男は役不足だが仕方が無い。

この主人には人を惹き付ける魅力に乏しい。それは権力にあまりにも執着している様が浅ましいと感じられるせいかな。

ガリオールやルークなどに感じられた超然とした感じ。それは人としての寿命を越えて生きてきた者にしか無いものなのか。所詮、人は自分の欲望に必死で喰らい付こうとする者なのだ。それは、血の貴さとは関係無い。

しかし、もう失ってしまったものをいつまでも欲しがっていても仕方ない。短い人としての一生を送るしか無くなった今は自分も貪欲に生きていくしかないのだ。

マルトは魔道師の復権など頭から飛んでいるらしい自分の主人を冷めた目で追いながら思った。

「陛下、なんという……お姿に」

国務大臣が呻くように呟く。

にこにこ笑っているこの国の国王は誰の言葉も聞こえてはいない。

「今、ここでサインをなさったとしても、それが陛下のお心だとはわからないのでは？」

財務長官がクライブにペンを持たせようとする国務大臣に向かって疑問を呈す。

「ですが、このままクライブ陛下に王の重責を果たすことが出来ると思いますか。陛下のお血筋で残っているのはコーラル様だけです」

「そう、だった」

部屋にいる者たちは一様に黙り込む。先ほど、元宰相であったハーコート公爵の死が公式に伝えられたばかりだった。

「コーラル様、王への就任お願いいたします。そのためには恐れ多い事ながら還俗してもらわなくてはなりません」

その言葉にマルトははっとコーラルを見やる。それに対して、コーラルは表情を変えずに応える。

「このような事になり、わたしが王位に就くことには異存がないが、わたしが還俗するのは少し待って欲しい」

「それはどういう？」

柔らかな笑顔を向けてコーラルは続ける。

「わたしには血を分けた息子がいる」

一瞬、皆の顔にのぼる疑問。

「その者に後を継がせることにするため、還俗は必要ないと思うが。その所在がわからないのだよ」

「コーラル様、それはどういう事なのか。ご説明を」

思わず、口を出したマルトにきつい視線を送った後、コーラルは書類に手を支えられて自分が何をしているのかも分からぬままサインをしている少年に目を移した。

「わたしは二十四歳の時に一時、魔道師の籍を離れてボルチモア州で普通の生活をしていたことがあるのです」

コーラルはまったく普通にその事を話し出す。

「勿論、これは異例の事です。ご存命だったルーク様が王に仕えるには魔道師以外の生活も知っておくべきだと仰られたのです。そこでその州姫と結ばれました。その時の子どもです。姫は残念な事に亡くなってしまったのですが」

なるほどとうなづく人々。

「それは本当に良かった。では、すぐにお子様の探索にかからねば」「皆が許してくれるならそうしたいが」

「勿論でございます」

昔のボルチモアの一件を知っているものなどここにはいない。

真実に少しづつの嘘。

たいていはこれで皆騙されるのだ。コーラルは口の端をにまりと上げた。

忘れていたわけではないが、自分の息子を本腰で捜さねばならないだろう。いや、もし見つからねば誰か適当に身代わりを立てればよい。

彼にとって、肉親などそのくらいの価値でしかない。初めから彼は何かが足りなかったのだ。

人として大事なもの 他人を認める事。 自分以外の者にも生きたる価値はあるのだということ。

35・ ときりとする胸

モンド州州都エリアル、その州城の広大な敷地の一角にある小宮。灰色の武骨な外観を見せる小さな城。打ち捨てられていたその城は今は綺麗に掃除され、修理され、すべての部屋が使えるように整えられていた。

大きな玄関のホールを抜けるとすぐに見えている広い部屋。

そこにハーコートは落ち着いていた。目の前の長椅子には黒髪の優雅な婦人がゆったりと向かい合うように座っている。

そこへ、やって来たのはダリウスだった。

「父上、母上大変でございます。国王陛下が権を移譲されることに」
「な、何？」

「新王、コーラルの即位式の知らせが正式にサイトスからまいりました」

伝えるダリウスもハーコートもしばらく何も言えない。

「あなた、二階にいる彼らにも伝えたほうがよろしいのでは？」

妻の言葉に気を取り直したハーコートはダリウスにうなずく。

「わたしが行ってまいります」

従者を連れず、ダリウスはそのまま二階へ上がって行く。手前の戸に拳を当てると中から大柄な男が顔を出した。

「あ、ダリウス様。何です？ あなたがご自分でいらっしゃるなんて」

「悪いが皆を集めてくれ、ウィリアム」

思い詰めた様子のダリウスにウィリアムも余計なことは言わず、次々と扉を叩いていく。

ウィリアムの部屋に集まった者を見回してダリウスが首をかしげる。

「ステファンはどうした？」

「あの……」

アリスローザが口に手を当てて困ったように窓の外を向いた。

「どうした？」

「ええ、先ほどハーコート公夫人とエスペラント様がいらしたんですけど。エスペラント様が馬に乗りたいと仰って」

「で？」

「ステファンと一緒に出て行っただんです」

「エスペラントめ」

大きくため息をついてダリウスは額に手をやった。

「ここは、どこだ？ 馬場じゃないけど？」

ステファンは州城の外れのややうらぶれた場所に出て頭をかりかりと掻いた。

「ここでもいいのよ、ステファン。ここなら遠慮無く馬が乗れるわ」

やれやれと辺りを見渡して、ステファンは並足よりわずかに速く馬を走らせる。後ろに座ってぴったり体を寄せているのは十五、六の少女。

彼女には前に初めてモンドの城に来たときに会ったことがある。

ダリウスの妹、確かモンド州州姫エスペラント。自分の夫に会いに来た公爵夫人についてきて、部屋にいたステファンをじろりと見て話しかけてきた。

「あら、あなたアリスローザ様と一緒にいた方ね。どうしたの？」

「どうしたっていうのは、君のお兄様に聞いてくれないか。で、ちよろちよろ動き回るのもやめていただきたい」

ステファンの言葉にエスペラントはややむっとした顔を見せる。

「ここはわたしのお城なのよ。何をしようとわたしの勝手よ。わたしは自分の思うところへどこへでも行くわよ」

「そりゃまあそうだけどさ」

「ふん、分かればいいのよ。じゃあわたしを馬に乗せて」

「え……？」

少女の高飛車な態度に鼻白んで、なんでこんな事になるのか分か

らないまま、ステファンは馬上の自分の背後に少女をのせて州城の敷地の東の外れにいた。

「君さあ、もし、ぼくが悪者だったらどうするの？　よく知らない男と二人きりになるなんて」

こうやってさと、ステファンが後ろに手を回して少女の腕を掴む。それに対して、大声でも上げるのかと思いきや、腕の中の少女は笑いながら自分を捕まえている男を見上げた。

「だってあなたは物騒な輩じゃないでしょう？　そんなに強そうにも見えないし」

「ちえっ、少しは怖がつてよ。まあいいさ」

エスプラントの見せる笑顔にステファンは面白くなさそうに返すと少女の腕を自分の腰に捕まらせてを馬の速度を上げた。

「ねえ、なぜだか……前にこんな事があつた気がするの」

「はあ？」

「いいから、少しだけ。ね？　少しでいいのよ。黙ってて。何か思い出しそうなの。大切な何か」

「わかったよ、少しだけだぞ」

ステファンはため息をついて馬を走らせた。柔らかい彼女のからだが背中に触れて、柄にも無く胸がどきりとした。

36・古びた鏡

ぼくにもこんな感情が残っているのか。復讐じゃない、何かを求めている心。

「何か思い出した？」

自分の動揺を隠そうと慌てて聞く。それに、素直に答える少女。
「わたし 前に兄様とここに何度も来たことが。そうだわ、何で忘れていたの？ わたしの大好きだった兄様」

「ダリウス様のことが？」

後ろを振り返ったエスペラントが頭を振る。

「違うわ。クロード兄様よ」

「クロード？」

その名前にステファンは表情を暗くする。それは国王クライブの双子の弟の名前ではないのか？

変わった名前では無論ないが、この国では今や禁忌とされている名前だ。この国を混乱に貶めた者の名前。

そしてもう一つはステファンにとっての……禁忌の名前。

「ねえ、アリスローザ様のところに連れて行ってくれない？ 彼女と話がしたいの」

エスペラントはアリスローザが何か知っているとこの前、彼女と会ったときの会話を思いだしていた。

「エスペラント！ 自分勝手にこの連中を振り回すのは止めなさい。大事な目的のためにいるんだからね」

妹の顔を見た途端にダリウスの小言が始まる。

「お兄様、クロード兄様はどこなの？」

「クロード 兄様？」

ダリウスは妹からの返事にわけが分からずに後ろにいる自分の両親を振り返る。

「エスペラント様、思い出したの？」

黙るダリウスに代わって喜びの声を上げたのはアリスローザだった。

「何を言っているのか、わたしにはさっぱり」

分からないと言おうとしたダリウスの言葉は母親の声に遮られる。

「ダリウス、あなたにはユリウスと、クロードという弟がいたのよ」

「何を言っているんだ？」

これには後ろで聞いていたハーコートが堪らず口を挟む。

「あなたも、ダリウスも。男って忘れ易いのかしら。三年前まであなたの子どもとして魔道師のイーヴァルアイとクロードがモンド州にいたのよ」

ゆつたりとした物言いでも息子も即座に黙らせて夫人は続ける。
「十年も一緒に暮らしていたんですよ。その間、わたしは城下の町に館を構えてあなた方と離れていました。寂しかったわ。でも、三年前のある日わたしの部屋に竜門が開いて……」

刺繍をしていた彼女の目の前に現れたのはこの国の魔道師の祖、イーヴァルアイとその後ろからのぞくようにこちらを見ている十四五歳の少年。

しかし、彼女は初めて会うわけではなかった。

始まりは十年前。彼がモンド州の州公の息子になるために邪魔だからと一方的に城を出るように言いに来たとき。

「いくら、魔道師庁長官であるあなたの申し入れだからと言ってこんな理不尽なさりようには納得出来かねる」

モンド州州候、バルザクト・ロイス・ヴァン・ハーコート公爵が、この国の魔道師の重鎮ガリオールにきっぱりと断りの言葉を伝える。「あなたの弟の子どもを養育して欲しいというのがそんなに理不尽ですか？ 大事をとって魔道師を一人お付けすると言っているだけですよ、公」

「なんでその魔道師までわたしの子どもになる道理があるのか、お伺いしたい。下の娘はまだ三歳なのだ。母親と引き離すなど論外だと思われませんか」

「まあね。無茶苦茶なのは分かっているけど。でも今の雛ちゃんは自分を魔道師だとは思わずに育って欲しいんですよ。で、兄としてつけることにしたんですけど。お二人とも黒髪ですし……」

横からレイモンドール国の魔道教の本山を統べるルークが口を出す。

「公、悪いがこれは決定事項だ。王陛下の許可も取ってある。了承も何も決まった事にこれ以上何を言われてもこの決定は覆らない」ガリオールは聞く耳を持たないとばかりに言い切って後ろを振り返る。そこにいるのは七歳くらいの亜麻色の髪の少女の容貌を持つ少年。

「話をついたのか。わたしの名は、ユリウスだ。ハーコート公、州城にある離宮のどれかをわたしの住まいに用意しろ」

この場にいる誰よりも偉そうな口を利いた少年は、それからいくらしもない頃、婦人の住む城下の館に長身の従者を一人連れて現れたのだ。

「これは、ユリウス様。どうされたんです？」

夫人は突然現れた二人に驚く様子も無く、自らお茶を入れようと立ち上がる。

「公妃様、お茶ならわたしがご用意いたします」

青年が手を出す。

「あら、いいのよ。ここに来て何でも自分で出来るようになったわ。でないと何もすることも無いし。それにあなた方が来ている事をあ

まり人に知られたくないのではなくて？」

「では、お言葉に甘えさせていただきます」

従者の青年が素直に引き下がる。椅子をすすめたが固辞して椅子にふんぞり返る少年の後ろに立っている。

「今日は、これを持って来てやった」

ユリウスが言つとすかさず、青年が丸い古ぼけた銅鏡を婦人に差し出した。

「これは？」

「ハーコートの奴が親の敵のようにわたしを見るので適わん」

ぶすつと言う少年は説明する気はさらさらないうた。

意味が分からず婦人は困惑する。

それを見てため息をついて青年が口を出す。

「これは自分の見たい者を映します。長い時間は無理ですが。これでご家族の様子をご覧になれますよ。少し、簡単な呪文を覚えていただきますがよろしいですか？」

青年の指導の下、何回か練習して鏡に呪文を唱えてみる。途端

に銅鏡の表面の曇りが取れていき、鈍い鏡面に何かが映る。自分

の顔では無いそれ。

「エスペラント。寝ているのね」

ぶつくりとした顔の少女がすやすやと女官の腕の中で寝息をたてている。

「ありがとうございます。ユリウス様」

顔を上げてにつこりと笑って手を出す婦人に、億劫おっくうそうに手を出す少年。

「おい、何なんだ」

手を引き寄せられて抱きしめられたユリウスが慌てて声を上げる。
「だって、ハーコートの息子ならわたしの息子でしょう？ ユリウス様。抱きしめられないエスペラントの代わりに暫くわたしに付き合ってくださいませ」

「なっ！」

「公妃様、いけません」

若者が氣遣わしそうに近づく。 氣難しい自分の主人は氣安く自分の体に触れられるのが事のほか嫌いなのだ。 自分でも世話を焼く以外に触ることなど適わないというのに。

37・親子ごっこ

ところが。

「ちっ、仕方ないな。時々来てやる。その代わりあんまりべたべたするなよ」

「はい、ありがとうございます。いつもそのお姿でおいでくださいませ。大人の姿に戻ってはだめですよ、ユリウス様。膝に乗せられませんからね」

驚愕の表情を浮かべる従者の前で、大人しく婦人の膝にのせられているユリウスは自分から婦人の首に腕をからめた。

それから度々彼女の所にユリウスは従者と共に現れた。特別何をするわけでも無かったが。一緒に話をして子どもの代わりに抱きしめながら暖炉の前でくつろいで。

とつくに気づいていた。ユリウスが肉親の愛情に飢えていること。自分を通して彼はきつと彼の母親と過ごせなかった時間を取り戻そうとしているのだ。知らない振りをしながら彼女はそんなユリウスが可愛いとさえ思っていた。だから思いつき子ども扱いをしてあげたのだ。実際は自分より年上なんだと知ってはいたが。

そして十年ほど経った頃、彼は一人の少年を連れて館に現れた。

「今日はラドビアスと一緒にじゃないの？ ユリウス」

長い間にすっかり母親口調の公妃がユリウスに問う。

「ああ、ルーズ。今日は弟のクロードを連れて来た。会うのは初めてだったか」

「今日は、おれのせいで城を追い出されているんでしょう？ ごめんなさい」

ユリウスの後ろからひよっこり体を出して素直に謝る少年の手を握って婦人はゆったりと笑う。

「あなたも大変な運命を背負っているんでしょう？ お互い様だわ。」

ねえクロード、ユリウスのお兄さんぶりはどうなの？」

「お、お兄さんぶり？」

隣で睨みをきかすユリウスの横でクロードはユリウスを呼び捨てにする豪胆な女性に圧倒された。

「ルイズ、今日はお別れに来了。おまえはじき州城に帰れる」

ユリウスは小さくそれだけ言って横を向く。

「どういう事です？」

「どういう事？」

クロードと婦人の声が同時に重なる。　が、それにユリウスは答えない。

「何かあるのね、ユリウス。言いたくないのならわたしは聞かないわ。もう、会えないのかしら。寂しくなるわ」

手を伸ばしてユリウスの体に腕を回すと彼の腕も自分に回わる。

抱きしめられておでこに口付けられた。

「もう、親子ごっこは終わりだ。本物のところに帰れ、ルイズ」

「ごっこでもあなたはわたしの可愛い息子だったわよ、ユリウス」

「……うん」

目を丸くしているクロードを引きつれユリウスは帰って行った。

その後いくらかもせずに自分は州城に帰ったのだ。　が、術をかけられたのか、誰もユリウスもクロードの事も覚えている者は城内にはいなかった。　自分は病氣療養のために他州に行っていた事になっていた。

彼女の話に納得してないような顔のハーコートとダリウスの横でアリスローザはなんだかほっとしている。　クロードのことを知っている人がいたのだ。　そして記憶を取り戻した者も。　クロード、あなたを待っているのはわたしだけじゃないと声を大きくして教えない。　忘却術はユリウスことイーヴァルアイが死んで効果が薄れているのかもしれない。

「クライブ陛下がコーラルに王位の移譲をなされるといいう知らせが

サイトスからまいった。クライブ様の御身が心配だ」

ハーコート言葉に皆の顔色が変わる。

「でも、ぼくたちのやる事は変わらない、だろ？　ダリウス様の州候就任の挨拶がコーラルの即位式に変わったただけだ」

ステファンが勢い込んで皆の顔を見渡す。　そうだろう？　と確認するかのよう。

「だが、驚くほどの人数がサイトスに集まる。警備の兵だって自分の主人を守るために州軍の半分は連れていくのではないか。やりにくいのは本当だ」

ウィリアムが天井を仰ぐ。

「奇襲しかありませんね。州候が新王にお祝いを述べる、その時しか機会はありません」

物騒な発言の主は他ならぬ魔道師の男。

「そうだな、それしか機会は無いだろ？　玉座に進む時に武器は持つ事を許されていない。それをどうするか、それが問題だ」

三年前の事を思い出してハーコートはため息をついた。

「それにクライブ様もお助けしなくては」

アリスローザは心配げに呟く。　自分がひっぱたくまで元気にしていてくれなくては。

「ひっぱたく？」

ダニアンの問いに、いつの間にか口に出していたのかと何でもないと薄ら笑いでごまかしてみる。

「ねえ、ステファン主城に送って行って」

一同の緊張感をはらむ空気の一瞬の隙について繰り出されたエスペラントのおねだりにダリウスが困ったように父親を見た。

「エスペラント、今日はだめだ。大事な話がある」

短く言つと、さすがのエスペラントも父親には逆らえないのか大人しくうなづく。

「わたしたちは主城に帰りますわ」

夫人がエスペラントを伴って席を立つ。それを見送るように目を上げたステファンはエスペラントと目が合って慌てて逸らせた。それに気づいてエスペラントは口をとがらして見せた。

38・魔道師の案

「あたしに案がありますが」

魔道師がのっそりと話し出す。

「あたしたちは謁見えっけんの間の近くで待機します。あらかじめ、羊皮紙に空間移動の魔方陣を描いておきます。ダリウス様はコーラル様の前でその羊皮紙を開き、術の封印を解いてください。待っているこちらにも同じ魔方陣を描いて、中に待機してダリウス様が封印を解いた瞬間にその場に行く。というのでいかがです？」

「ちよつと待て。今の話では、わたしが魔道師のように術をかけるとか言つてなかったか」

はい、その通りですと魔道師はあっさりと笑う。

「ルーン文字は左回りに読みますが、ふりがなを打っておきますし、今から印の組み方もお教えいたします」

「まさか、わたしがそんな事を」

「他に何かありますか？　ダリウス様。要は練習だけです。この術だけの呪文と印だけですから大丈夫でしょう」

「そんな簡単に言うな」

ダリウスが立ち上がるのをハーコートが押さえる。

「わたしもそれがいいと思う。がんばりなさい、ダリウス」

ダリウスを見守る誰もが首をたてに振っているのにダリウスは氣付いて、苦笑いしながら仕方無く座った。

「分かった、やってみよう」

「場所の移動だけならこちら側だけの魔方陣でいいでしょうが、時間を合わせるならダリウス様からの術が要りますからね。さて、範字一つ一つには対応する印がございます。今晚からはじめましょうか、ダリウス様」

「そう、だな。しかし、魔道師でもないわたしに術の封印を解くなんて出来るものなのか」

「そうじゃないんですよ、ダリウス様」

「何が違う？」

それはですね、とウィリアムがコホンと咳払いする。

「魔道師は血統でなるもんじゃ無く、他の学問みたいに修練を重ねて得とくしていくってさ。なあ、ウィリアム？」

自分の言わんとしていた事を横からステファンに、かつ攫さらわれてウィリアムはああと口をひん曲げてみせた。

「サイトスへはわたしも同行させてくれないか」

「ハーコート公様」

「父上」

その場にいた、彼以外の人間がいつせいに反対の声を上げる。

「いけません、父上。わたしにもしもの事があつたらこのモンド州はどうなるんです？ 父上はここで私達を待っていただなくては」

ダリウスの言葉にうなづくアリスローザたちをハーコートは軽く見渡して笑う。

「コーラルに捕らえられているクライブ様をお助けしなくては。第一、おまえ達が失敗したならすでに死んだことになっているわたしなど、このモンド州で何が出来るというのだ。それに足手まといにはならぬよ。剣の腕はダリウスより上だ」

「父上」

ダリウスの抗議など聞く耳もたぬとハーコートは魔道師に向く。

「表からはダリウス。裏からは魔道師とわたしだ。二手に分かれよう」

「仕方ありませんね。では、ハーコート様とアリスローザ様とあたしがクライブ様の救出。あとの方たちにコーラル様の方をお願いしますか」

ダニアンの提案に皆がうなづく。

一旦、ダリウスは主城に帰る。州府の事もおざなりには出来ない。それに近々サイトスに行くならその間の事も考えていなくてはならない。

アリスローザたちも二階に上がっていく。

「何でわたしがあなたとクライブ様のところへ行くの？」

前に行く魔道師はたっぷり時間を取ってから振り向く。

「そりゃあ、アリスローザ様、クライブ様をひっぱたきたいんですよ？　そう仰ってたじゃないですか」

「それは言っただけど、それだけ？」

「それだけじゃだめですか」

面倒臭そうに魔道師は体を戻す。

「たぶん、クライブ様は地下宮に幽閉されておりましょう。だったら、あそこから出る道を知っているものに来てもらわないと」

「でも、わたしそんなの覚えてないわ。扉のからくりだってラドビアスがどうやったのかわんて知らないし」

はあと大きくため息をついて魔道師は階段を上がる。

「覚えてないと思っただけで人は結構頭の中に見た物を保管しています。あたしが術で記憶を探ります。ウイリアムはだめですよ彼は」

先回りして言うダニアンに、それでもなぜとアリスローザは食い下がる。

「ウイリアムはクロード様が術で入り口から堂々と出しつちやたんですよ。どんな術だったんだか。後でラドビアス様がその辺の後始末はなさったでしょうが。手本にはなりやしません」

言うだけ言っただけアリスローザの返事なんて待つことも無くダニアンは自分の部屋にばかりと入っていった。

それにしてもダニアンという魔道師。　これほど能力のある魔道師だったとはアリスローザは思っていなかった。　それはあの情けない外見のせい、と言っただけは本人に悪いかな。

「あたしは魔道師なんですからね。コーラル様と剣を交えるなんて冗談じゃない。ついでに失敗したら、その足であたしは逃げさせていただきます」

はつきりとそう断言する魔道師にアリスローザは呆れてしまった

が。

39・口付け

突貫工事で生活できるようにしたせいか、下の豪華な部屋にくらべて二階のアリスローザたちの部屋は間に合わせの家具が置かれて簡素な造りだった。そんな事を思っているのは、生まれた時から贅沢ぜいたくな生活をしてきた自分くらいだろうか。寄木で作られた書机の前でアリスローザはふと考える。

クライブ様を助けて自分はどうするのだろうか。何をしたいのか。良い国にする。言うのは簡単だが実際、どうすればいいのかなんて自分には分からない。市井の人々にとって国の統治者などはつきり言ってしまうえば誰でもいいのだ。今の生活を良くしてくれるなら、魔道師だろうが何だろうが関係ない。上の者の権力争いなど自分たちの生活に関係ないなら興味も持たないだろう。

税金を安くする。

福祉を充実する。

兵役の年数を少なくする等々、考えていた事はどれも口当りはいいが。

その原資はどうするのか。

避けられない戦争が起これば、兵士の補充はどうするのか。

今までの魔道師庁は私服を肥やしていたのでは無かった。この国で生きてる者に対しては良い統治者だった。結界により守られていたこの国に大量の兵は必要無く、国土はこの五百年戦火にまみれる事は皆無。安定した長期的な政策によって大きな事業は途絶える事無く遂行すいこうされていた。

私達はそれに比べてこの国の住民に何をしてあげられるというのか。

してあげる、と思うことすら不遜ふそんなことか。

魔道師から権を奪い返す、これは一体誰のためだったのだろう。上に立つものの驕りおごり、高ぶり。国の中がバラバラになった今、

わたし達がやらなくてはならないことは一体何なのか　国民の益を守り、国を守る。

コーラルにそれが出来るのか。　コーラルから王位を奪い、クライプ様に渡す。　そしてその後は……。

「わたし達は間違つてない、わよね」

「そうだな」

一人事を言つたつもりなのに思いもかけず、返事が返ってきてびっくりと戸の方へ顔をむける。　そこには大柄な優しい笑顔を向ける男。

「ウィリアム、やめてよ。驚くじゃない」

「入るぜーって言つたけど。何を今から心配してんだか」

「まだ、早い？」

「そうだな、そんな事はコーラルの首を取つた後に考えるんだな。

第一、コーラルの野郎は謀略で王位を奪つたに違いないんだからな。そんな奴に忠誠なんて誓えるかよ」

この人は兵士だったんだとアリスローザは思い出す。　ステファンならどう言うのか。

忠誠なんて糞喰らえとでも言うかもしれない。

コーラルを倒す目的は同じでもその理由が各自違ふのだから。

「なあ、そんな顔すんな」

気がつくとも目の前にはウィリアムがいた。　彼の手がアリスローザの頬に触れる。

「おまえが悲しい顔を見ると心が痛む。おまえの目はトラシュにとっても似ている」

「兄……様？　あなたトラシュ兄様を良く知っているの？」

アリスローザはウィリアムがトレンス將軍の弟だとしか知らない。知っているのはレジスタンス活動のリーダーとしての彼だけだ。

あの活動以前はトラシュとそんなに親しいわけでも無かった。

何しろアリスローザには異母兄弟が山ほどいる。　ウィリアムとトラシュとの因縁は馬車の荷台で彼が魔道師に語っただけだ。

「たぶん、あんたより素のトラシュを知ってる」

取り澄ました、州候の跡取りじゃない彼を。酒飲んで管巻いて愚痴をこぼして熱く青臭い事を本気で語っていた。

そんなトラシュを おれは知ってる。

「ウィリアム？」

黙りこむウィリアムに問いかけるように名前を呼ぶ。兄様の素ってどういう事なんだろう。いつも優しくて冷静な兄の事しか自分には知らない。そのほかに何かあるのか。

それをレジスタンスのリーダーだった彼が知っているというのか。
「ウィリアム、答えてよ」

アリスローザの問いにウィリアムは彼女を抱きしめて口付けることで誤魔化す。誰にも言いたくない。ただ、それだけ。

それだけの……はず。

いきなりの口付けにアリスローザは咄嗟はじかに何も反応できない。

「ど、どういう事？」

やっと離れた唇の余韻に思わぬほど動揺している。

「どういう事って……おれは前から言ってるじゃないか。頂きたいってさ」

その声があまりにいつものウィリアムと違ってにいるのに本人は気づいていない。

わずかに震えて。

その緊張を打ち破る戸を叩く音。

「おい、飯だぜお二人さん」

「わかった。おい、なぜ二人だと分かったんだ？」

戸を開けたウィリアムがステファンに聞く。

「先にウィリアムの部屋に行つて、あんたがいないことを知った。あとは」

「あとは？」

「ここで戸に耳を付けて聴いてた」

あっさり不正行為を告白したステファンは片目をつぶってみせる。

「続きはどうする？」

「続きなんてないわよ、今度そんな事したら殴るわよ」

アリスローザの剣幕にステファンは降参と手を上げる。

「ところで今の台詞はぼくに言ったの？ それともウィリアム？」

「うるさい！」

怒鳴るアリスローザに笑いながらステファンは階下に降りて行く。
その途中でウィリアムとすれ違う。

「なあ、邪魔だった？ それとも助かった？ どっち？」

「助かった」

ウィリアムの言葉にステファンがにやりと笑う。

「だと思った」

ステファンの後ろ姿をながめながらウィリアムは苦くつぶやく。

「まったく。はどめが効かなくなるところだった。おれもまだまだ

青春野郎なんだな」

40・魔道師の格

その少し前、中年の魔道師が書机に就いていた。懐から出した、二枚の羊皮紙。それに細心の注意を払いつつ魔方陣を描いていく。空間移転の複雑な模様。

それに範字を入れ、レーン文字を書く。

一旦それを仕舞い、もうひとつの羊皮紙を広げる。

『アンズス、アンスル、オス』

印を組んでレーン文字を唱えるとそれは大型の猛禽類の姿に変わる。

竜道が使えなくなったこの国では近距離なら羊皮紙に用件をかいて鳥に姿を変えて飛ばす方法がある。が、州を越えて目的地までとべる鳥を作ることができる魔道師など数えるほどだろう。しかも彼の使う鳥は書を運ぶ以外に擬態して主の言葉を伝え、行動する。次位の魔道師でこんな高度な術を使いこなすのはダニアンだけだろう。竜印を受けていた高位の魔道師、コーラル以上かもしれないかった。

まあ、竜印を受けた魔道師といえど、二種類ある。王の半身は無条件に竜印を受ける事ができる。しかし、半身以外の道は厳しい。地方の廟から廟主の推薦を受け、上位の魔道師の厳しい試験に合格して。最後にはゴートの廟主ルークのめがねに適った者だけが魔道師長ガリオールの竜印を受けることが出来るのだ。

同じくらいの歳ならその腕は比べるべくもない。王の半身が力を持っているのはその後の長い年月によって会得していくからだ。

しかし、たくさんの魔道師の中から選抜された魔道師が生まれながらに竜印を刻印される運命の魔道師と同等なのか。

国を動かしていた二人が二人とも王の半身では無かった。事がすべてを物語っている。

小作農の子どもだったガリオール。

日雇いで日々をしのいでいた親の元にいたルーク。
才能は誰にでも等しく与えられているものでは残念ながら無い。

「こうなったら最後の手段」

猛禽類に書き連ねた書簡を持たせて長い呪文を唱える。

「無事に届けばいいが。もし、他人に渡ることになったら自ら消滅せよ」

こくりと首を下げたあと、その大型の鳥は大きく羽ばたいて開け放った窓から飛び立って行った。

「おい、飯だ魔道師」

外から若い男の声。

「はいはい、今行きます」

ダニアンはゆっくりと立ち上がって部屋を出た。

主城に戻ったダリウスは、いきなり大きな声に出迎えられて眉をひそめた。

「あなた、サイトスへわたくしを同行しないと伺いましたが。どういうことなのか、教えてくださいますでしょうか？」

腰を手に当てて階段の上から見下ろす妻、マーガレットに大きくため息をつく。

そのまま自分の居室に戻ろうとする夫を追ってマーガレットがダリウスの腕を掴んだ。

「皆の前で無様なまねをするのをやめなさい。話があるなら部屋で聞こう」

いつものように淡々と言われてマーガレットは唇を噛む。

いつもこの人はそうだ。 わたくし一人が騒ぎ立てているのにいつも冷静に交わそうとするのだ。 眉をひそめて。

部屋に入ると堪らず、大声を上げてしまう。

「わたくしはあなたの何なの？ ダリウス。 何かの原因で王座をコラルに渡すのはわたくしの弟なのよ。 どうしてサイトに連れて行かないなどと言うの？」

「悪いが君にはここにいてもらわないと困る。 この混乱が収まったらサイトスへ行く事に別にわたしは反対しない」

ダリウスは話を切り上げようと早口でそれを言つと扉に向かう。

ところがその背中に思いも寄らず抱きついてきた妃に心底驚いたダリウスが首を捻つて後ろを向く。

「ダリウス、あなた、危険な事をなさりにサイトスに行くのですよね？ わたくしに何も言わないけど、それくらい分かるわ。 心配してるのが分からないの？」

「心配？ 君がわたしを」

「わ、わたくしがあなたを心配するのがそんなに変ですか。 わたくしはあなたの妃です」

ダリウスが体を返して自分の妃と向かい合う。

41・ 決別

そんなことが？ 何かほかの理由があるのか。

「わたしにもし、万が一の事があつたとしても君は心配しなくてもいい。君の身分は保証されるし、そう望むならサイトスに帰っても……」

「違うわ、違うの」

ダリウスの言葉は強いマーガレットの声に遮られる。

くやしそうに両手の拳を握り締めて彼女はダリウスを見上げ。

「わたくしはあなたの身を案じているのよ、ダリウス。わたくしを見て。あなたはいつもわたくしなんか見てもくれない。でもわたくしはあなたしか見てないのよ」

そうだ。 婚礼の日から一度だつてわたくしの事なんかレイモンドール国の姫としか見てくれなかった。 愛の無い政略結婚だから？ だけど……わたくしは真摯に政に取り組むあなたが。 いや、そう じゃない、もっとそんな理性的なことじゃなく。

わたくしはあなたが好きなのだ。

結婚の話ならそれこそ星の数ほどあつたのだ。 宮廷に顔を出す貴族の男なんて自分が声をかけるだけで顔を赤くして賛辞の言葉を返す。 それが当然。 自分に夢中になっている誰かと仕方無く結婚してやると思っていたのに。

それなのにダリウスはわたくしを見る事も無かった。 くやしくてくやしくてどんどん我侭だと思いながらも皆を引っ掻き回していた。 止めてくれるかと。

理由を聞いてくれるかと思っていたのに。

「わたくしはあなたを愛しているのよ」

マーガレットの叫ぶような告白にダリウスは初めて彼女を見た、気がした。

「ダリウス、わたくしと一緒に連れて行って」

思わず、彼女を抱きかかえたダリウスはがくりと自分が膝をついてしまうのではないかと思った。

それは、彼女の重さでは無く。矜持の高い妃にここまで言わせてしまった自分のふがいなさに。

抱きしめた彼女は驚くほど細くて折れそうだった。そうだ、なぜ自分は彼女を見ていなかったのか。仕方ないと。決められた事だからと。

こう、なってしまったのは彼女の責任では無い。

「済まなかった、マーガレット」

彼女の思いに答えられるかどうか。それは今はわからない。

しかし、自分は彼女を、故郷を離れ一人異郷の地に来てくれた彼女をしっかりと見なくてはならない。

すべてはそれから。

ダリウスは、マーガレットの気が落ち着くまでその場に留まっていたが。

「少し、忘れないうちにやっておくことがある」

彼女に言い残すとダリウスは部屋を出た。

「二階東の端の部屋の絵を外しておいてくれ」

従者にかける言葉。

「はい、それでよろしいのですか。気に入っておられた絵ですよ。どちらかに掛け替えられますか」

「いや、倉庫にでも仕舞ってください」

「それでよろしいのですか」

「ああ」

ダリウスは東のほうへ、自分の心の弱さと思いに決別の視線を向けた。

慌ただしくサイトスに向かう準備が始まる。夏至の時を過ぎて

今は氣候が過ごし易いが州候を集めて即位、戴冠式を行うにはそれ相当の準備期間が要る。

州候も一番遠いダートベージ州からサイトスへ向かうには一ヶ月ほどかかる。州候が自分の州を留守にするのだから、おいそれと出ては行かない。普通なら厳しい冬を越えた後春の月に設定されようという大事な行事。

だが、今回は直ちにサイトスへの登城を記されていた。冬が来る前に即位戴冠式を行う事に決まったのだ。

ダリウスは夫妻でサイトスに赴く事になっている。その妻役はアリスローザなのだが。

付いて行く侍従長にハーコート。

他、追従する者に紛れていく。

サイトスに入った後、二手に分かれることになる。

「しかし、いきなりサイトスに入ってから公妃がいなくなつては不信を招くのではないか？ わたしの妃はレイモンドールの皇女なんだぞ」

ダリウスの問いにウィリアムは魔道師を見る。

「おい、出番だ」

「何ですか、あなたがたは。あたしは何でも屋じゃありませんよ」

「しかし、わたしの時のように身代わりを出してくれるのだろうか？」

「……ハーコート様」

ハーコートに言われてしまえば反論できようはずもない。

「わかつております。はい、やらせていただきます」

心底嫌そうに魔道師は大げさに礼を取った。

42・止まらぬ想い

州城の蔵書室で本を開いていたステファンは、目を通して紙面に影が落ちたのを見て顔を上げる。

その目に映るのは華やかな衣装。 綺麗に結い上げた髪。

そして寂しそうな顔 の少女。

「エスぺラント様。 何ですか？ そこに立たれると影になって読みにくいんですけど」

「だって」

ステファンの問いに答えにもならない返事を返す少女に仕方なく本を閉じる。

「だって……何？ ぼくで答えられることなら教えるけど」

「だって、もう行ってしまっんでしょう？ わたし、また馬に乗りたかったのに」

ふっとステファンは笑う。

「そういう事か。 いいよ。 今から乗りに行く？」

「それはそうなんだけど、そういう事じゃなくて」

「じゃあ、何？」

エスぺラントが何を言いたいかを計りかねてステファンは少女の顔を見上げた。 その泣きそうな目を見て胸の奥がどきりと動く。

何を考えているんだ。 ここにいる少女は州公の娘だ。 そんな男女の気持ちを持つ対象になるわけがない。 しかもぼくはそんな気持ちになっただけじゃない。

ぼくは、生まれてきただけで周りを不幸にしてきた禁忌の者。

大事な人をこれ以上作る事も失うのも嫌だ。

「わたし、今まで結婚なんてどうでも良かったのに。 相手なんて全然気にならなかったのに。 今はお嫁に行くのがどうしても嫌だわ」

「結婚……するのか」

結婚という言葉と目の前のエスぺラントがしっくりと頭に入らな

い。でも貴族とはそういう物なのだろう。

自分が知っている結婚とは暖かくて親密で　頭に浮かぶのは、抱き合って笑っていた両親の姿。それを見ている兄貴とぼく。そつだ、ぼくはやる事があるのだ。

自分がここにいる理由。

ぼくは、復讐者だった。母や、父。そして兄の無念を晴らすためにここまで来たのだ。あいつを、コーラルを殺すために。ぼくは一体何をやっているのか。

「それは　お幸せに、エスペラント様」

「ばかつ、大嫌いっ」

慇懃な態度に戻ったステファンの口調に、エスペラントは大声を出すと蔵書室を飛び出して行った。

「追いかけていいのか？　色男」

その声の主が大腿で近づいて来る。

「どこから見えた？」

「わりと最初から。で、どうするの？」

「どうもしない。ぼくはあんたと違うよ、ウィリアム」

「あーそつ。がきつてことか」

ウィリアムに一睨みを返すが、それが効いているとはとても思えなかった。

「あんたはアリスローザをどうにかしようと思ってるのか、大人の男としてさ」

皮肉交じりのステファンの視線を余裕で交わしてウィリアムが笑う。

「ははは、妬くなよ。おれは良い男だからな。黙ってても女が放つてくれないさ」

「黙ってなかったし、放つて無いじゃないか。このうそつきのおつさん」

勢いよく立ち上がりながらステファンは冷たく言う。蔵書室を出て行こうと歩く。

「いいのか？ もう」

「何だよ、どういつもこいつも。人の調べ物を邪魔しといて。いいよ、もう。どうせ趣味に走ってたし」

「趣味？」

「外国の政庁の仕組みを調べていたんだ。諸外国の良い所はこれから取り入れる検討があつてしかるべきだろ。今までと同じじゃうまくいかない。魔道教が支配していた時代と同じ形態では綻びが出来て当然だ。州公の蔵書に目を通すなんてめったに出来ないからな。ついでに古文書を調べたかつたんだが。古代レーン文字はなかなかやっかいなんだ。あの禿げ魔道師なら読めるんだろうが協力なんてしてくれそうにない」

ステファンの後姿を見ながらウィリアムは人は血なんて関係ないと思つていたが、自分の考えに疑問を感じる。

ステファンの考え、行動は上に立つものの物だ。ただの復讐で政庁の仕組みなど知る必要など無い。この策謀が成功した後の事を彼は考えているのか。

あいつには、レイモンドール国主の血が流れている。

おれはどうなんだ？ アリスローザへの思いに囚われているおれは。今はそんな事を考えている場合ではないというのに。だけど、この思いを彼女に伝えたいと。ただひたすらそう思っているばかなおれが、心に住んでいるのを隠しておくのはもう無理だ。

おれのほうがよっぽど子どもだった。

「ダリウス、絶対帰つて来てね」

「分かった」

簡単な挨拶を返す二人。しかし今までと歴然とした違い。二人を包む空気の温度の違いにその場に居た者すべてが気付く。そしてそこに現れたアリスローザの姿に騒然となる。

濃い群青のドレス。薄い青のレースが胸元と袖にたつぷりについて。髪も纏め^{まと}上げられて真珠の髪がざりで留められている。薄っすら化粧している彼女の姿。

「へえ、きみは女だったんだ。やっぱり」

ステファンが感嘆の声を上げるのに隣の魔道師がこっそりと同意のうなずきを見せた。

「何？ ウイリアム、わたしに何か言いたいのじゃない？」

「いや、つまり」

いつもの余裕を無くしてウイリアムが言いよどむ。

「あんまりアリスローザ様が綺麗なのでびっくりなさったのね。本当にお綺麗だわ、男の格好の時も凛々しくて好きだけど」

横からエスプラントが口を出す。

「嫌ねえ、そんな事ウイリアムが思っているわけじゃないじゃないですか、エスプラント様。また、何か難癖つけようと搜しているんですよ？」

苦笑いしながら言うアリスローザの前をウイリアムは無言で横切つて行く。

「何？ どうしたの」

「何も、どうしたのも、本人に聞いてきたら。アリスローザ」
ステファンが片目を瞑ってみせる。

部屋を出ると長い廊下の先にウイリアムは立っている。二人の間を強い風が吹き抜けていく。そこは外に続く渡り廊下になっていた。

「ウイリアム、何？ 急に出て行くなんて」

「何で追いかけてきたりする」

「え？」

返される硬い言葉に、肩に手を触れようとしたアリスローザの手が行き場を失って下に落ちる。

「おれにそんな姿は目に毒なんだよ」

「ウイリア……」

「ああ、もう」

ウィリアムが舌打ちしてこちらに向かって来る。落とした手を反対に強くひかれてアリスローザの体は彼の腕の中に納まる。

あまりの事にアリスローザは何も出来ない。

「くそつ、黙ってようと思ってたのに。おれは、おまえの事が愛しいと三年前から思っていた」

強く抱きしめられて耳元で囁くように言われた言葉。

「わ、わたしは」

「言わなくていい。おまえはクロード様の事を忘れていない。それは分かっている。今のはおれの身勝手な気持ちだ。本当は言うつもりもなかった。でも、おれは自分に嘘をつきたくない。おまえが好きだ。ずっと、この三年間おまえの事しか見てなかった。守っていたのは言われたからだけじゃない」

身じろぎさえ出来ないほどの抱擁にアリスローザは困惑だけでない感情もあるのを自覚していた。

クロード、今すぐ会いに来て。 でないとわたし。 私は…

…。

顎に手がかかり、ウィリアムの顔が近づいてきて。

「だめ、わたしまだ……」

「今はこれで終わりにするから。今はおれに」

強引に上を向かされてウィリアムのやや厚めの唇がアリスローザの唇に被さる。

43・生きるあて

そのあまりの甘さにアリスローザは抗^{あらが}うことも出来ない。

やっと離れたウイリアムは悪かったと言って、手の中からアリスローザを開放した。

「おれの思いは伝えたが、おれの事を思いやってどうこうとか考えるなよ。おまえはおまえの気持ちに正直になっしてくれればいい」

「わたしは」

自分はクロードを好きなのだ。いや、そうだと今まで何の疑問も持たなかった。でも、本当にそうなのか。本当に嫌ならさっきの口付けがあんなに甘かったのはなぜなのか。

「ごめんなさい。分からないわ」

「すぐに返事はいらぬ。あつさり振られるのも悲しいからな。事が収まるまで返事は要らないから」

いつもの笑顔になってじゃあなと踵^{かかと}を返す男の後姿に何も言えない自分。

今すぐクロードに会いたい。会って確かめたかった。

自分の気持ちを。

「どう思う？」

「どうって、あたしに男女の機微を分かっていうほうが無理でしょう？」

「まあ、そうか。しかしあんなところでいちゃつかなくてもいいよなあ」

「それは、部屋から出て見ているあたし達の言うことじゃないですね」

ステファンとダニアンはお互いに顔を見合わせて笑った。

大型の豪華な馬車列が州城の敷地を出ていく。

それはこの国を正しい道へ導くものか。

それとも新たな混乱をひきおこすものか。

「真に民のための国の礎となる戦いだと信じるわ」

ダリウスの横に座るアリスローザの呟きに車内の誰もがうなずく。そうでなければ、やる意味が無い。

大勢の従者や支度をして出かけるという事は、手間もかかる上に一行が一日に進む距離も少人数で行くより倍近くかかってしまう。

逸る気持ちに反比例して正規の州公の馬車列は思いのほか、その道程をゆつくりとサイトスへ向かっていた。

馬車の中の話はいつしか政治の話になっている。税金の話。主要道路の整備について。正しい外交のあり方とは。

ダリウスと対等に渡り合うのはステファン。それを食い入るように見ながら質問をする、アリスローザ。それに答えるハーコート。

さながらそこは擬似政庁のようで。

御者を追い出して御者台に上がっているのは、中年の魔道師と大柄な男。

「おい、いつまであいつらはあんな腹の足しにもならん事を続けるつもりだ？」

「そんな事、あたしが知ってるわけじゃないですよ。政治なんてあたしは関わりあうのは、もうまっぴらですから」

そうか、とウィリアムは隣の魔道師を見る。この毒にもならないような容姿の男は昔、ボルチモア州で州政の一旦になっていたのだ。そこで自分を省みる。

おれは果たしてこの騒ぎが収まった後、何をしたらいいのだ

ろう。おれに何ができるのか。今まで魔道師を倒すことが目標だった。それ以外に生きる目標が無い、その事に最近気付かされて少しづつ、ウィリアムは焦りを感じるようになってきていた。

おれの存在価値。生きるあて。

「そんな事、生きてりゃあ見つかりますよ。今から心配したって仕方ありません」

「おい、何でおれの考えていた事がわかったんだ？」

気味悪そうに言う男に魔道師は素っ気無く言う。

「自分の胸に秘めていたいんなら口に出さなきゃいいんですよ」

何だ……口に出していたのか。

長いため息をつくウィリアムに魔道師は前を向いたまま低くつぶやく。

「ステファンが裏切ったらどうします？」

「裏切る？」

ばかなと魔道師を見ると彼もこちらを見ている。そこにはふざけた様子は微塵みじんも無い。

「王には後継者が必要です。彼がもし、自分に子どもがいると知っていたなら」

魔道師は乾いたくちびるを舐めて再び口を開く。

「探すでしょうね。そして、案外自分の近くにいと知って」

「ステファンは家族を殺された。自分は復讐すると言っているんだ。そんなばかな」

「頭で思っているのと、実際に話すのとは違いますよ。人の情なんて」

魔道師の言葉にうつと詰まってウィリアムは何も言えない。

そうだろうか。もし、コーラルが、許してくれと一緒に来てくれとステファンに言ったら。どうなる？

「親に会いたいとかおまえは思った事あるか」

ウィリアムは確認するように聞く。

「あたしだって人ですよ。親と別れたのは五歳の時ですが。あたし

が廟に行く前に服を買ったために貰った支度金を使い込まれちゃったんですよ、父親に」

はあと言ったため息。

「おかげで廟に行く時あたしは寒い中上着の一つも着て無かったんですよ。これまでの利子を含めて請求したいもんです」

「ええ？」

真面目に聞いていた自分がばからしくなるダニアの親に会いたい理由。 本当の事なのか、違うのか。

「会いたい理由なんか人それぞれでしょう。それでも会って相手の情を見せられたらどうなるか、分からないと言っているんです。今まで孤独だ、何だと言っている者のほうが案外弱いもの、ですよ」
「そうかな」

大抵そうです、とぼっさり切られてウィリアムは面白くなさそうに横を向いた。

44・魔道師の言葉

予定の宿場について宿に入る。

ステファンと同室にしたのは、さっきのダニアンとの話のせいかな。一緒にいたところでどうするわけにもいかない。

ただ、心配なだけだ。

だが、本人が親を想う気持ちに誰が異を唱えることができるだろう。

「何見てんだよ、気味が悪いぞ」

「いや、ごめん」

「ごめん？ 何を企んでんだ、おっさん。あんたが謝るなんて世界の終わりか、天変地異の前触れだぜ」

眉をひそめて寝台に寝転がるステファン。

「おまえ、親父さんの事どう思ってる？」

返事の代わりにいきなり投げつけられるブーツをウィリアムは慌てて避ける。

「おい、危ないじゃないか」

「うるさい！ ぼくの父親はもうこの世にいないんだ。どう、思ってるも何もぼくは親父を愛していたさ。死んじやったけどな」

ぼくのせいで。 ひっそりと続けてうつむく。

あんなに良い人だったのに。 ぼくと母さんがいなければ死ぬ事は無かったのだ。 普通に日々の暮らしを送りながら……生きていたのだ。

ぼくを宿したから 母さんは死んだのだ。

ぼくが誘ったから兄さんは 死んだ。

「コーラルはぼくが殺す。その対象でしかない。あんたが何心配してんのか知らないが。むしろ心配なのはあんたのほうじゃないのか」「何でだ」

ウィリアムが強く聞くのにステファンは鼻を鳴らす。

「ふん、こういう時に女相手に好きだ、嫌いだとがんばってるからだよ。おっさん」

「うるさい、がき」

「がきで良かったよ。あんたも女の事ばかりに夢中になるなよ。迷惑だ」

ウィリアムの足元にあるブーツを拾って履くと、ステファンは部屋を大きな音を立てて出ていった。

あんな事を言うつもりは無かったのに。

自己嫌悪で落ち着かない気持ちを抱いて廊下にいたステファンは、外から入って来た魔道師と鉢合わせになる。思わず出る、やつあたりな言葉。

「どこ行つてたんだ、はげ」

いきなりの雑言に、魔道師は憮然として無視を決め込んで通りすぎようとするが。

「何してたんだよ。あんたは」

重ねて聞かれて嫌そうに立ち止まった。

「すみませんが、何にお腹立ちか知りませんが。あたしにあたるのは筋違いという物です。風にあたってきただけです。何をめてたんです？ ウィリアムとですか」

「え？」

いきなり当てられてステファンは素直にうなずいてしまう。

「そんなことだと思いましたよ」

魔道師に浮かぶ心配げな表情。

「彼はあなたが裏切るかもしれないと思っているんですよ。あたしにしたら彼のほうがよっぽど危ないと思いますが」

密やかに言う魔道師の言葉にステファンは眉を上げる。

「どういうことだよ」

「さあ、言葉の通りですが。ただこれは、廊下で話すことではありません。聞きたいのならあたしの部屋に来てください」

後ろを振り向かず歩き出す魔道師の後をステファンはただ追い

ていくしかない。その先を聞かなくては。

一体何をこの魔道師は言うつもりなんだ。

ぱたりと閉められた戸に鍵をかけるとダニアンは椅子に腰掛けてステファンに対して置かれている椅子を手で示す。

「さっきの話だけど」

座ると同時に飛び出す声に魔道師はわかっていて、というように手を少し上げる。

「ウイリアムがこの策謀に関わっている理由は何だと思えますか」

「三年前の義憤。それ以外に何がある？」

「いいえ、その通りですよ。それが問題です」

相手の思い通りの答えに魔道師の口元がにまりと上がる。

「コーラル様が王になった事で昔のご自分のやった事はなんだったんだろう。無駄だったのかと思ってるわけですよ。それは、アリスローザ様も一緒ですが」

分かりきっている事をとうとうと喋る魔道師を、初めて見るようにステファンが眺める。

「だから、それがどうしたと……」

「コーラル様が還俗なさったらどうなんです。魔道師でなくなったら」

「魔道師でなくなったら……？」

「そうです。例えばクライブ様が本当に王の務めを果たせないお体だった場合はどうです」

畳み掛けるように言われる事に体の自由を奪われてステファンは身じろぎ一つできない。

そうだった場合、コーラルが王になることに何の支障も無い。

魔道師が王でない時にウイリアムやアリスローザ、ハーコート公、ダリウスらの反旗は降るされるのだろうか。

正等な血ゆえに。

「ぼくは……違う。コーラルに遺恨があるのだから」

「だからですよ。サイトスへ行かれた時に良くご自分で確かめられ

る事が肝要だと思えますよ」

ダニアンは言いながら立ち上がり、戸を開けた。

「さあ、出てってください。あたしは一人になりたいんです」
肩を落として出て行くステファンの後ろ姿を見送って。

「さて、次は」

呟く魔道師の面は凍った湖のような冷たさ。

誰が言っただろうか。

魔道師は外見と内面が上位になるほど違う場合が多い
と
言
わ
れ
て
い
る。
と
言
わ

45・ 企み

ダリウスは長い時間馬車に揺られて疲れたのか、うたた寝をしている父親にそつと上着をかけると起こさないように部屋を出た。

廊下を歩いていると自分が入ろうとしていた部屋から誰か出て来る。見るとステファンだった。声をかけようとしたが、彼があまりに深刻な表情をその顔に浮かべていたため、そのまますれ違ったのだが。彼はそれさえ、気づかなかつたらしい。

「ダニアン、入っていいか」

応えの代わりに戸が開いて中から中年の魔道師が顔を出した。気の抜けるような笑顔にダリウスはさっきのステファンの事を聞きそびれてしまう。

「呪文の練習をと思ったんだが」

「ええ、よろしいですよ。まったく術を行うのがダリウス様でようございました。ウィリアムなんかじゃとても出来そうにありませんからね」

「そんな事もないだろう」

「あの方は真面目にやろうとは思いませんよ。呪文は適当なんて通用しません。一言一句間違えてはならないんですからね」

魔道師の言葉にダリウスも身が引き締まる。

その様子に魔道師は笑って椅子を勧めた。

「そんなに緊張なさる必要はありません。この前でほとんど出来ていらしたんですから」

何回かの呪文と印を組む練習のあと。

「じゃあ、失礼する」

立ち上がりかけたダリウスに魔道師は顔の笑みを顔に貼り付けたまま問う。

「ダリウス様は王がコーラル様では本当にだめだと思いませんか」

「ダニアン？ 何を言っている。おまえ達は何のために危険を侵し

てモンド州に来たんだ？ わたしを説得しに来たのでは無かったか」

「アリスローザ様やステファンはそうでしょうが。わたしは、ハーコート様をお助けする事を申し上げに行っただけのつもりです」

いけしゃあしゃあとと言う魔道師にダリウスの顔が曇る。

「あなた様は個人の感情で動く事は出来ないと言いたかっただけです。他の方と立場が違うのは分かっていると思いますが」

「だから？」

「コーラル様はクライブ様に比べて政務に精通していると言っているんですよ。今までの因縁うんぬんはさておき、彼が還俗して王に即位する事がそんなにこの国にとって悪い事が、どうかという事をお考えいただきたいのです」

あまりの正論にダリウスは考え込む。

この国においては王座の略奪など今までであった試しはないが、他の国ではおうおうに起こっている事だ。しかし、それで王が変わってその後、その王が立派に国を導いていく事があるのも事実。どういう理由で王になったかより、その王の施政のあり方のほうが問われるのも事実。

所詮、王の資質とはどう国を動かしていったのかという後々の評価によるものなのだ。

しかし。

「クライブ様が今どういう状態なのかを知る必要がある。いいか、我々は理に適った王を選ぶ責任があるのだ」

ダリウスにまったくですと頷いた魔道師。

「勿論です。だから良く考えてと言っております。サイトスへ向かう中で、即位式に向かう最中で、お考えください。そして、周りに惑わされないご自分のお考えで決断をお願いいたしますよ」

穏やかな顔を見せる魔道師の言葉は顔ほどには甘くなかった。

一行がサイトスへ近づくほど、顔を合わすとぎくしゃくするのはなぜなのだろう。アリスローザは顔を下に向けているステファンとくだらない軽口を言っているものの気持ちがここに無い様子のウィリアムに首を傾げる。

ダリウスにしてもいつしか寡黙になっている。

いつからなのか、それとも初めからこうだったのか。

唯一変わらないのは魔道師の男だけ。

「ダニアン、ちょっと話があるんだけど」

休憩に寄った宿での昼食後、日よけの下、大きく開かれたバルコニーに置いた長椅子に腰掛けている中年の男にアリスローザが話しかける。

「話？　ですか」

どうぞ、と男は長椅子の端へと寄った。

「最近ウィリアムや、ステファン。おまけにダリウス様まで様子が変だわ。何か知っている？」

「さて、あたしにはどこが変わったか分かりませんが」

不思議そうに聞く魔道師にアリスローザは息を吐く。

「他人行儀だし、いつも一歩引いたようにお互いを牽制しているわ」「そう見えるのはあなたが他の方にそうしているからでは？」

「わたしが？」

困ったように聞くアリスローザに魔道師はあっさりと言う。

「彼らがあなたと同じように思っているとは考えておられないでしょう？　分かっておられますよね、アリスローザ様」

それは前から思っていた事だ。

自分と同じような思いで誰もがサイトスへ向かっているなどと。

そんな子どもじみた事を思っていたわけではない。　ないが、モンド州にいるときはもっとお互いがつながっている、そう感じていたのに。

「人はお偉い理想を掲げていたとしても自分の思い込み以上の事から外れることなんて出来はしませんよ。あなたが見てるあたしだっ

て違っているかもしれない。だからと言ってあなたがおかしいのも何でもない。人の内面なんて理解しようとしたってしょうがない。したと思ってもそれは勝手に自分のいいように思いこんでいるだけですよ」

優しそくに話す内容の何と救いの無いことが。この男は、魔道師とはこういうもののなのか。

食い入るように見返すと、魔道師はにやりと口の端を上げた。

そこでアリスローザは確信する。彼らは皆ダニアンの洗礼を受けたのだ。なんて男というものは簡単に洗脳されるのか。

「ダニアン、何を企んでるのか知らないけど。今度そんな事を言ったら酷いわよ」

アリスローザの言葉に一瞬ばかんとした魔道師は今度はくくつと笑う。

「覚えておきましょう。アリスローザ様」

爽やかな風が小さな竜巻を起こしてバルコニーに落ちていた落ち葉を巻き込んで高く飛ばす。

「あたしが言ったことも 後で正しいと分かりますよ」

ひらりと落ちてきた葉を指で掴むとダニアンは粉々に握りつぶした。枯れ葉のようにこなごなに。

口の端に笑みの名残を残したまま、ダニアンは立ち上がって立ち去って行く。アリスローザは取り残されてしばらく椅子に座り込んでいた。

46・抱きしめたい（前書き）

今回は少し、短いです。

46・抱きしめたい

近づいてくる足音に気づいて後ろを振り返った彼女はおつと言う声を聞く。その声の主は彼女の存在に気づくとその足を止める。

「あ、アリスローザ」

「ウイリアム、何、どうしたの？」

いや、とか何とか口の中でもごも言っているウイリアムは居心地悪そうに体を揺らしていた。

「ねえ、ウイリアム。ダニアンが何をあなたに言ったのか分からないけど。惑わされないでよ。コーラルから王の権を取り返す、わたしたちの目的はこれでしょう？」

「おまえ、本当にそう思っているのか？ コーラルが還俗したらどうなんだ？ おまえにとつて問題なのは、魔道師が権力を持つ、それだけだろう。王の血を受け継ぐ継承者としてのコーラルがいたとして。その男に何の遺恨がある？」

「ウイリアム」

そんな事を考えていたのか。コーラルの還俗。そんな事は思っても見なかったが。言われてみれば、コーラルは先王の双子の弟なのだ。今の王だったクライブはまだ、子どもがいない。とするなら継承者としては何の問題はない存在。だが、本当にそれでいいのか。

「誰が統治するとしても良い執政者ならいい。それはそうだけど、わたしたちには違う役割があるわ。その王座が正しい継承で得られたものなのか。それは国民には関係ないことかもしれないけど、わたしたちには多いに関係がある。その真偽を見定める役目を背負っていると思うわ」

「そうかな」

「そうよ、知っている。それだけでわたし達は見逃す道を外れたのよ。その結果、コーラルが王になったのならそれでいい。でも、何

もしないのは反対よ。あなたはどんなの？」

「おれは そんな大義より何より」

ウィリアムの手がゆっくり伸びて座っているアリスローザの顔を触れるように通り過ぎ、髪を一房指に巻きつけるように掴む。

「おれは…… おれはおまえと一緒にいくというならどこにでも行く。主義主張より何より、おまえを守るためにおれはいるのだから」

言ってしまったから、ああ、まただと舌打ちする。

今はだめだと。

この戦いが終わるまでは手を出さないと誓っていたのに。

それでも姿を見ると追ってしまふ。

声を聞くと話しかけてしまふ。

近くにいと 抱きしめたくなる。

おれは悪い術にでもかかってしまったのだるか。一度、見せてしまった心を閉じておくことが出来ない。 無数の小さい穴が開いているかのように。

流れ出てしまふ、おれの思い。

言ってしまう、自分の思い。

「いつでもおれが側にいる。 おれはおまえを裏切ったりしない」

掴まれた髪からウィリアムの感情が流れたようにアリスローザは、そのまま動けない。

いや、そうじゃない。 動きたくない。 これは わたしの意志。

このまま、ウィリアム一人言わせておくのか。 いえ、それはだめだ。

「ウィリアム、わたしあなたが側にいてくれて……うれしいわ」

ためらいがちなアリスローザの言葉に彼の手は、髪から離れて頭に差し入れられる。そして引き寄せる。

はつきりと好きだと言われたわけでもないのに。うれしい、その一言だけでおれはこんなに満たされて、強気に出られる。

彼はアリスローザの意向など関係ないように激しく口付ける。

だが、以前の時とは違っている。なぜなら、ウィリアムの首には細いアリスローザの腕が巻きついていたからだ。

47・ハンゲル山

足を進めるたび、グシグシ音がして水が染み出してくる。歩いていった男は後ろから重い足音を立てて追いてくる、大柄な人影をややうんざりした様子で待つ。

レイモンドール国の北部のモンド州。その州の半分を占める広大な山脈、ゴート山脈。

その最奥。国一番の標高を持つ山、ハンゲル山。三年前まで、ここは首都サイトスと同じくらい、いや、それ以上にこの国にとって重要な場所だった。

レイモンドール国を強力な結界によって封じていた魔道師、イーヴァルアイ。彼によってこの国は五百年もの長きに渡り、他の国とは隔絶されていた。

その本山がここハンゲル山の廟だったわけだが。今は、イーヴァルアイの死後、廃墟になっている。

「ここなの？ 疲れちゃったわよ。汚い所ね」
酷く低くて太い声が女言葉で不平を口にする。

「申し訳ありませんね。少しお待ちください」
全然悪いとは思っていないだろう調子の男は、そう言つと印を組む。

『変化！ 変質！ 変転せよ！ 石岩、遡及し水をたたえよ！』
呪文の後に起こる変化。

床の石板は崩れ、中に落ちていく。大きく開いた穴の中には厚く氷が張っていたが、それも大きな音とともに割れて細かい欠片になる。

男は後ろに立つ人影に振り向かず、心配げに視線を前に向けたままだ。

「お早くお願いします。ハイラ様」

「ふん、偉そうな口を利くんじやないわよ。誰がおまえをくつつけたと思ってるんだい？ おまえは黙って見ておいで。わたしが見つけてやらなきゃあおまえは、あのまま仮死の術で生殺しだったんだからね」

ぴしゃりと男を黙らすと大柄なハイラと呼ばれた者は、穴のまわりに魔方阵を描いて印を組む。

『私の思いし統合の祈願、腐朽の者、復讐の者、不死の者、ここに現し給え』

呪文を言いながら、腕をまくりあげて氷の中に手を差し入れる。

二、三度探すように手を回した後にくいつと何かを掴んで、思い切り氷の欠片を飛び散らせながらその探し物を引き上げる。

「ああ、濡れちゃったわよ」

引き上げた物を近くに降ろすとハイラは、自分のドレスを見て悔しそうに言う。

「こういう西域風の服を着てみたいと思ってたのに。インダラ、新しいのを用意しなさい」

「分かっております。今はそれよりバサラ様のお体の事が心配です」「そうね、体を離さなきゃ」

寝かされた男は意識が無いのか、青い体をびくりとも動かさない。それを見ながらインダラと呼ばれている男は、自分の腰から大振りの剣を引き抜く。

卵形の顔につり上がった一重の黒曜石の瞳。 ややのつぺりとした印象の顔はこころの国の者ではない。 動くたびにゆれているのは黒の絹糸のような頭の頂点近くで結っている長い髪。 口角の下がった口は今は真一文字に引き結ばれている。

インダラが太いバスターソードを振りかぶる。 躊躇ためらいなく振り下ろされた剣は寝かされた男の腹部を真横に切断した。 直後に切り離された下半身の様子が変わる。

斬り離された下半身が砂のように崩れていくのを剣を持った男が

見送って、はあと安堵のため息をつく。

「ハイラ様」

「わかつてるわよ」

ハイラと呼ばれている者がインダラにうるさそうに手を振る。

確かに着ている物は女物だが。普通の男よりも丈はあり、並の男より、厚い筋肉に覆われていそうな体は分厚い。顔つきもごつごつした印象でまるで何かの余興で屈強な兵士が女装しているかのようだ。

だが女、であるらしい。

あらかじめ描いていた魔方陣に、気がついたかのように流れ出した血まみれの上半身だけの男を運んで、女は印を組んで長い呪文を唱える。それは半刻ほども続く。やがて、疲れた、の大声と共に唐突に呪文は止んだ。

「終わりましたか」

「ええ。でもなるべく早く体を準備してひつつけないとね」

ハイラの言った後を引き取るように、寝かされていた男が身じろぐ。

う、ううんと声を出した男にインダラと呼ばれた男が走りよって抱き上げる。

インダラの腕の中で薄目を開けた男はにっこりと笑った。

「久しぶりだな」

笑った男の美しさに側に立つハイラが息を飲む。

亜麻色の流れるような髪が縁取る細面の顔。完璧な曲線を描く

柳眉の下、長い睫毛に隠れたようにある、色素の薄い水色の瞳。

細く通った鼻筋。薄いが滑らかな花のような唇。

どれもが女性を形容するような物なのに彼はしっかりと男の顔をしていた。

自分の主人の顔に寸の間、見惚れていた事にインダラは口元に笑みを浮かべる。

「バサラ様、お気づきになりましたか。お会いするのは、三年ぶ

りですよ。バサラ様に仮死の呪符を付けて頂いていたおかげで、こうしてお会いする事ができました」

「……インダラ？　そうか、頭がひつついたようだな。良かったな」
晴れやかに笑うその顔は、自分の体が半分無い事など気付いていないかのようで。　しかしその笑顔も、インダラに抱かれている自分を見下ろしている女の姿に気づくと、横を向いて小さく毒づく。

「何でハイラが来るんだ？　くそっ」

しかし、仕方ないと引きつった笑みを浮かべて女の方を向く。

「ハイラ姉さま、助けていただいてありがとうございます」

「バサラ、あなたが死ぬのはわたしも嫌なもの。わたしは綺麗な物が大好きなんだから。久しぶりに見たけど、あなたはやっぱり綺麗な男ね。いいわよ、この貸しはあなたの体が元に戻ったら返してもらうから」

唇を舐めながら、ハイラは睨んでいるとしか思えない流し目をバサラに寄こす。

「今度こそ、あなたの寝所に呼びなさいよ、バサラ」

一瞬の沈黙の後、バサラは観念したようにうなづく。

「……わかりました。じゃあさっそく行動をおこしましょう。貴方の僕に乗ってサイトスへ行きましょうか、姉さま」

「あら、このままベオークに帰らないの？」

「ええ、姉さま好みの体を捜しに行きましょう」

バサラの返事に気を良くしてハイラは自分の僕を呼ぶと、体に触れて呪文を唱える。

『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』

僕の体はかさかさと皮膚が捲くれ上がり、それは無数の鱗になる。体は長くなり、それに耐え切れなくなったのか手について膝をつく体勢になった後、伸びていく尻尾。口は大きく裂けて前に長く突き出ていく。　その口には鋭い牙が生えていた。

それにバサラを抱えたインダラとハイラが跨る。

「サイトスへ行け」

最早人では無いおおきな咆哮で、命に応えた一頭の龍。それは、今は廃屋になっていた古い大きな廟の壁を破ると、空に舞い上がってサイトスに向けて飛び去っていく。

三年前、クロードが倒したはずのイーヴァルアイの兄、バサラ。彼はやはり生きていた。

48・地下宮へ

サイトスに着いたダリウスは、父親らと別れて王城に入る。傍らには術によって操られている使い魔が化けているマーガレットを連れて。

本当は、城下の貴族の城にでも居たかったのだが王の係累では仕方ない。普通なら城下に置かれる事こそ、怒ってしかるべきなのだから。

同じ州を統治していると言っても、モンド州は特別なのだ。王の姻戚関係はサイトスの城内にある、小宮が当座の住まいとして用意されていた。

そして、ダリウスにとって今の王コーラルは叔父にあたる。

その上、妻は前国王の姉である。これはどうあっても城下に居を移すなど言えようはずもない。

「父上、それではここでお別れますがくれぐれも自重なさってくださいね」

「そんな事はわかっておる」

ハーコートという言葉になおくれぐれもと重ねてダリウスは父親を見る。思いもよらず、自分の父親が向こう見ずな事を最近知ったダリウスだった。

別に借りて用意させていた商館にアリスローザとハーコート、ダニアンが落ち着いている。

「いつ、クライブ様の所へ行くつもりだ」

「左様ですね。お疲れでないなら今晚にでも」

ダニアンはハーコートに応えながらアリスローザを見る。

「夜でも地下宮からの出口はお分かりになりますか」

「たぶん。そこまでならね。そこからは分からないわよ」

「ええ、充分ですよ。夜が更けないと人目につくといけませんからね。それまで体をお休めください」

結局寝られるはずもなく、部屋をうろうつろとしていたアリスローザは戸を叩く音がまだ数も叩かないうちに戸を開ける。

「ああ、びっくりした。あれから扉に貼りついてたんじゃないでしょうね」

「気が気じゃ無くて貼りついていたのと同じようだったわ。ハーコート様は？」

「下でお待ちです」

アリスローザは男装し、ハーコートも黒っぽい飾りの無い目立たない格好になっている。

「では参りましょうか」

サイトの城壁からわずかに外れた灌木がまばらに生えている雑木林。ばきばきと踏み込むたびに音が鳴り、口から声が漏れそうになる。

傘がかかったようにぼやけて見える月は満月に近い。冷たい色で人間のする事を見ているような夜更け。

「たぶん、ここだわ」

あのときは日中だった。しかもこんなに草木がぼつぼつと生えていなかった。心もとない言い方になる。

「これではないか。金属の板がある」

ハーコートがアリスローザの立っている所から十歩ほど右の場所を指さす。

「ああ、たぶんそうですね。これでしょう」

魔道師はしゃがみこんでそれに触れる。

「アリスローザ様こちらに」

魔道師の側に彼女もしゃがみ込む。レイン文字を唱えながらアリスローザの額に触れると静かに目を閉じる。

それからいくらしもないうちに彼は手を離した。

「分かったの？」

「ええ、たぶん」

印を組ながら魔道師は金属板の模様を動かす。それは最後のパチリとかみ合う音と共にぎしりと動く。

「あたしが先に降りますからついて来てください」

四角い穴を覗くと暗くてまるで井戸の底のよう。先に何の躊躇いもなく降りていく魔道師の後を遅れないように続く。後ろを気にしながらハーコートも穴に降り、小さい足場を気にしつつ進む。ぼんやりとしか見えないのは、暗闇の中で光るのはダニアンの持つ灯りだけだからだ。

前にある灯りだけを頼りに右へ左へと歩くうちにここが主城ならどこにあたるのかも分からなくなっていた。

「たぶん、ここでしょう。新しい足跡がいくつもあります。で、開けますか」

「開けてくれ」

ハーコートの言葉に魔道師は印を組んで鍵に触れる。ばしりという光を伴った音とともに鍵は外れる。それを下に丁寧に置くと牢屋の戸を開けた。

なだれ込むようにわれ先にと入るアリスローザとハーコートの前に一人の青年が寝台の上に寝かされていた。

酷くやつれているその顔は、アリスローザの知っている顔と同じ。しかし、アリスローザの記憶の中の顔とは少しづつ違う。顔の輪郭が、首から肩にかかる線が。記憶よりも太く骨ばっている。

髪は 髪の色は同じ。 外で輝いて冷涼な光を投げかけていたその月に似た髪色。 目は、目はどうなのだろう。 彼の瞳と

同じなのだろうか。 揺り起こしたかった。 駆け寄って、その目が開くのを 見たい。 そんな乱暴な欲求をすんでのところで理性が抑える。

「この香りは……いけませんね。呪香の影響を受けていると思われ

ます」

魔道師が袖で口元を押さえながら後ろに向く。

「早く出ないとあたしたちもやられますよ」

「わたしがお連れしよう」

ハーコートがあっさりと青年を担ぐ。

牢獄の部屋を出るが廊下には誰もいない。これはどういうことか？ 中にいる者が動かないと楽観しているためか。反対側からの襲撃など考えていないという事か。

いずれにしても今はありがたく逃げさせてもらおう。

「さ、早く」

ダニアンが灯りを持って来た道を引き返していくのを二人も追った。梯子のところでハーコートはクライブを背負う。その背中を押さえながらアリスローザも続く。一足先に上に上がったダニアンは自分の真上にかかった大きな影と音に驚いて天を仰ぐ。

「あ、あれは龍？」

ここ、西域では見られないはずの龍という生き物。確かハオタイなど東域に住むという魔獣。めったに姿を現さないはずがどうしてこのレイモンドールにいるのか。

低空で飛行するその魔獣はあっという間に主城の方へと姿を消した。

「どうしたの？」

下からのアリスローザの声で我に返ったダニアンがハーコートに手を貸す。

「急ぎましょう。商家まで魔方阵で飛びます。このまま担いでいて誰かに見られると困りますから」

そう言うつと魔道師は地面に魔方阵を描いていく。このところ、何回も描いたお陰か、すらすらと手は淀みなく動いていく。しかし、あんな複雑な模様を数回描いただけで頭に入っていくこの男は、もしかしたら物凄く厄介な人物なのかもしれない。

アリスローザは黙々と仕事を進める魔道師を値踏みするように眺

めた。しかし、見たところでこの中年の魔道師の考える事などうかがうことなどではしないのだが。

「おいでください。中に入ったら目を閉じて」

全員の目が閉じられたのを確認して魔道師は懷から小さい羊皮紙を取り出す。今自分が出て来た穴へ印を組んで紙を落とす。それは小さい鳴き声を出すと二十日鼠の形を取って走り去った。ダニアンは何も言わず、金属の板を動かして穴を塞ぐと魔方陣に向かう。

彼らの去った後に残った魔方陣。風が消し去るまでに誰かが来る可能性を魔道師は考えていなかったのだろうか。

それとも？

49・ 招かれざる客

ダリウス達がいる小宮の各部屋にある小さなバルコニー。そこに立つウイリアムの頭を占めていたのは、アリスローザの事。

あいつは成功したろうか。 おれと一緒に居てやりたい、そんな事ばかり考えてしまう。

自分の思いを打ち明けて、口付けたあの日。

それに答えてくれただろう、彼女の。 アリスローザの言葉。そして唇の感触。

どんなに、嬉しかったか。

どれほど離したくなかったか。 おれの存在のすべてだと思ったあの日。

これからの二人の事しか、考えられない……今は。

その自分の思いの中に埋没していた、ウイリアムにかけられる声。「やあ、お茶を一杯もらえないかな。 のどが渴いてさあ」

いきなり一人だと思っていた部屋の中からの声。 驚いてウイリアムが振り返る。

そこには、東方の顔を持った男が大事そうに大きな物を抱えて立っていた。

それは、そのままやり過ぎせないほどの違和感を抱かせる物。

男は自分と同じくらいの男を抱いていた、が 彼には、あるはずの物が無い。

体の半分。 腹部から下の部位がまったくないのだ。 剣ですっぱり着ている物ごと斬られたかのように。 しかも、さっきの呑気な声はこの男のもの。

「驚かしましたか、すみませんね。 主人がどうしてもあなたが良いつて言うんでね」

穏やかに言う、男を抱えた者の言葉。　しかし、ウィリアムには意味などさっぱり分らない。　おれが良いって、どういう事だ？

「何だ？　部屋を間違えたのなら……」

「間違えようはずは無いよ、ウィル」

自分の愛称を呼ばれた事にウィリアムの口は開けたままになる。

何でおれをウィルと呼ぶのだ、この男は。

そこで、うつむいていた抱かれている男が顔を上げた。　その顔を見た、ウィリアムは驚愕のために床に座り込む。　その顔は紛れも無いおれの、おれの大事な　。

「……トラシュ」

「そつだよ、会いたかったよウィル。　わたしを助けてくれ」

そんなはずは無い。　だが、この顔は、この声は、ウィルという名前を呼ぶのは、おれのトラシュじゃないのか。

麻痺したように、体に力が入らないウィリアムの目から一筋流れていく涙。

「それは何の涙？　わたしがむざむざ殺されるのを知りもしなかった後悔の涙。　それとも地獄から舞い戻ったのを喜んでくれる涙かな」
トラシュの声で紡がれる言葉の残酷さにウィリアムはうなだれる。　それを楽しそうに見るトラシュは堪えきれずに笑う。

「ああ、だから一度痛い目に会った人間をからかうのは止められないんだ。　どうだ、インダラ、わたしの言った通りだろ」

「本当にあなた様も遊びが過ぎる。ご自分の状況を考えてくださいよ。笑い事じゃないですよ。体が半分無いんですから。お茶なんて飲めるわけが無いでしょ」

小言を言う男はウィリアムのことなど頭から消し去っているように。

「おまえはトラシュじゃない。　一体誰なんだ」

「ふーん、分からない？　なら、これでどうかな」

目の前で男は印を組む。　体の境界がぼやけて滲む。　ようやくはつきりしてきた先に見えたのは　。

顔に隙間が無いくらいにある皺。垂れた瞼の下にあるやぶ睨みの目。長く伸びて絡んだように床に垂れる髭。

「導師……さま」

「そうそう、おまえの飼い主はわたしに良く懐いて可愛かったな。だから最後は体を使わせてもらったよ。ああ、これは言葉のあやだけど。体の見た目と記憶、いただいたのはね」

にやりと笑った顔がまたもや戻って 今度の顔は。

「イーヴァルアイ？」

その名前を聞いてウィリアムを見る目が細くなる。

「はーん、わたしとイーヴァルアイを見間違えた？ イーヴァルアイはわたしの妹だよ」

「妹？ あいつは男だったはずだ」

くくっという笑い声。

「そうだな、あんたの飼い主はイーヴァルアイを男として好きだったんだっけ？ そりゃ悪かったな、勘違いで」

そこまで言っただけ、声を上げてその男は笑った。

「教えてあげるよ。三年前のあの時の事を」

50・最後の教え

父親に招待するようにと命じられていた。その事とは別にトラシユはモンド州公の次男、ユリウスが我がボルチモア州に来るのを楽しみにしていた。あと、少しでもここに来るはずとこの二、三日そわそわと落ち着かなかった。それが、さつき戻って来た間諜に出していた兵の報告の内容に啞然としていた。

トラシユは持っていた安酒の入った杯を取り落とす。音を立てて転がる杯に見向きもしないで従者の胸倉を掴む。

「ユリウスの乗った馬車が襲われたというのは本当なのか」

「は、はい。しかし、ユリウス様もクロード様もご無事だと報告が」
従者がトラシユの剣幕に驚いておろおろと話す。

「たった今、別の者からユリウス様一行が無事にプリムスのサンデイエンスホテルにお着きになったと報告がありました」

は、と安堵の息を吐いてトラシユは従者の服を離す。

「では、明日の朝わたしがお迎えに行く」

「ええ？」

トラシユは急に機嫌を直してテーブルの上の瓶を見やった。昔の悪い癖だ。こんな不味い酒を飲んでしまうのは。

その晩、仕事を終えて自分の居室に帰って来たトラシユはバルコニーに面している掃き出しの窓が開いているのに気づく。使用人が空気を入れ換えた後、閉め忘れたのだろうかと窓辺に行くと。

カーテン越しに人影が見えた。

「曲者か、姿を見せろ」

壁に飾ってある剣を素早く取り上げて構える。そしてじりじりとゆっくり近づいて、カーテンを思いっきり引く。が、そこにいたのは。

「ユリウス？」

そこにいたのは、見間違いなどでは無い。亜麻色の長い髪を結

わずに背中に流して深緑の服を着た……彼。しかし、そんな事が？
止まってしまったトラシュにその人影は近づいて流れるような仕
草で彼の手を取った。

「あなたにお会いしたくてこの夜分、馬を飛ばして参りました。ご
不快ですか」

「不快など思はずがない。が、どうやってここに入り込んだんだ
？ 従者の誰もそんな事は言っていなかった」

おかしいと、こんな事があるはずがないのは知っている。そし
て、ユリウスがこんな態度を取るはずが無い事も、知っているはず。
それなのにここに居るのはやっぱりユリウスとしか思えない。

「トラシュ様、わたしを好ましいとお思っているんでしょう
？」

握った手を離して、上にすべらせるとユリウスはトラシュの両頬
を挟み込むように持ち自分のほうへ引いた。

「ユリウス？」

これは自分が望んでいた事だが。本当にそうなのか。自分の
唇を食っているのは、モンド州公子のユリウスなのか。トラシュ
は、頭の芯が痺れて何も考えられなくなりそうな自分を叱咤して何
とかユリウスの体を離す。

「何のつもりで、こんな事をするんです」

「何の？ あなたが望んでいる事をしてあげたのに。これ以上の事
も望んでいるみたいだけど。それは、無理。だってユリウスはわ
たしの物だからね」

にやりと笑った顔にヒヤリとしてトラシュは、ユリウスを突き飛
ばすと床に投げられていた剣を拾う。

「妖しか。成敗してやる」

「成敗？ あはは面白いなあ。ねえ、トラシュ、あんたはいつ見て
も楽しかったよ。純真で正義感があって」

すでにユリウスの言葉遣いではない。声でもない。印を組む
その男は姿を変える。

年寄りのローブ姿。床に着くほど長い髭。

「導師様？」

驚くトラシユに導師はからからと笑いながら言う。

「これが最後の教えじゃ、トラシユ。これが一番言いたい事だったかもしれぬ。人はどんなに善行を積もうと誰もが幸せになれるわけじゃない。いつ、関わりの無い悪意が襲うか分からん。しかし、それが人の世。つまり」

導師は一飛びでトラシユの真横に並ぶと、首に片手を回して引き寄せる。

「おまえはババを引いたんだよ。楽しかったよ、そしてさようなら」逃げようとする前にトラシユの胸には波打っている長剣が深々と刺さっていた。

剣を引き抜くと、崩れ落ちる男の体を足で避けて老人は反対側の窓辺を見る。

「インダラ、もういいぞ。この男を捨てて来い」

はい、と姿を現した男が軽々と床の死体を担ぐ。

「だけど、口付けるのはやりすぎですよ、バサラ様」

「だって、記憶をいただかなきゃあ。それに死ぬ前くらい何か良い事あってもいいかなあとさ」

はあ、とわざとつくため息。

「正体ばらした時点で良い事じゃ無くなってるじゃないですか。言い訳は止めてください。演出効果を狙ったんですね」

「分かっているなら、聞くなよ。凄い絶望的な顔をしていたよ。信じていた者に裏切られるって悲しいものだよな」

老人は、おおげさに手を広げて見せる。

「あなたにそんな経験がありましたかね？ 逆なら腐るほど見ましたけど」

「インダラ、口が過ぎるよ。だってサンテラなんてわたしを裏切ってカルラに寝返ったじゃないか」

はいはい、と宥めるようにインダラは男の死体を担いで窓辺に行

く。

「確かに。でもサンテラが裏切る事なんかお見通しだったでしょう？ カルラ様に兄上を殺させて教典を盗ませた後、カルラ様ごと回収するおつもりだったくせに。カルラ様に経典の事を教えたのもバサラ様、あなただってことぐらい分かりますよ」

「そうなんだよ」

そうなんだけどねえ、と術を解いて元の姿に戻った男、バサラが不服そうに眉を寄せた。

「こんなに遠くへ行くとはね。ついでに結界まで張っちゃって。兄上殺害の件で強請っていう事かすつもりだったのに。上手くないもんだよ。わたしはついてない」

「本当に貴方様は困った方ですよ。放っておくとどんな非道な事をしでかすか分かったもんじゃありませんから」

「それ、褒めてるの？」

「厭あきてるんです」

バサラの僕はそのまま窓の下に飛び降りて行った。

51・ 夜陰、下弦、闇路

「と、いう事があつたんだよ。ウィル」

バサラは、楽しい昔話を聞かせたかのように笑顔で語り終える。

「黙れ！ ウィルなんて呼ぶな。一体どういつもりで導師に化けたりしたんだっ」

ウィリアムはバスターソードを取り上げると侵入者に向けて構えをとった。

「まあね、ドミニクを扇動してユリウスを捕まえて。あ、話しに出てきたカルラとは、ユリウスの事だよ。あいつはわたしの妹だ。魔導師でベオーク自治国の者。イーヴァルアイとか、ユリウスとか色々偽名を使ってたが。よしんばこの国のレイモンドルの屋台骨を揺るがせたら……なんて思ったんだけどさ。ドミニクもトラシユも、あの親子は本当に夢見がちで騙されやすく最高だったな」

あの導師を見た時に感じた違和感の正体はこれだったのか。絶望的な感情に支配される。そして、ふつふつと湧き上がる怒り。

あー楽しかったと笑う男に向けてウィリアムが剣で斬りかかる。しかし、主人を抱きかかえていた僕がいつの間にか片手に持った剣で弾く。

「もう、挑発しちゃだめじゃないですか。わたしだって、さつき生き返ったばかりで力なんて出せませんよ」

そう言いながら長椅子に主人をそうつと抱き下ろすと剣を二、三度大きく振ってウィリアムを見た。

「じゃ、疲れるんでさっさと済ませますよ。大丈夫、下半身には傷一つつけませんから」

言った時には素早く踏み込まれてウィリアムは顔の手前でやつと剣を合わせた。

思い切り剣ごと撥ね飛ばすと、以外にあっさりと後方へ飛ぶ。

そこへ一気に踏み込んで剣を突く。胸元に刺さったと思ったが、それを予測していたように、ひらりと剣をかわした男は少しその場で小さく飛ぶと勢い良く走って壁を蹴る。そしてその反動でぐるりと大きく宙を舞う。気が付いた時にはウィリアムの真後ろで背中に剣を突きつけていた。

「だから、疲れるのいやなんですつてば」

軽口に似合わず、本当に疲れているのだろう。荒い息をしていた。ウィリアムは勝機を確信して薄笑いを浮かべる男の膝あたりの足を思い切り後ろ蹴りする。うめき声と共にインダラは壁際まで転がって行く。やっと壁際で跳ね返されるように止まり、首を振って上半身を起こす。

そのまま剣を突きこもうか、それとも体制を立て直そうかと考えていたウィリアムを男は見逃さない。

『夜陰、下弦、闇路を通り彼の者の行く手を阻め』

印を組みつつ、呪文を唱える。

「何、休んでるんですか？ この場合、接近戦じゃないとあなたに勝ち目はありませんよ。だってわたしは魔道師なんですからね」

「な、何？」

「何をつて、術ですよ。わたしは主人と違って無駄な事には興味ありませんからね。体を頂きますよ」

黒い糸状の物が体中に絡み付いて、ウィリアムは身動き一つ出来なくなってしまう。

「ハイラ様、おいでください。ここでやってしまいましょう」

男の声に応えるように長椅子に現れる人影。それは大きく、長椅子を一人で占領するほど。

「お気をつけください。バサラ様がいらっしゃるんですから」

インダラがきつい調子で言うのにその人物は笑いながら応える。

「分かっているわよ。わたしだって自分の夫になる人を潰したりしないわ」

言いながら自分の膝にバサラの体をのせる。それに、バサラは

盛大に顔をしかめたがハイラの機嫌には何の影響も無い。

「ここで待つてね。バサラ」

低い音程でそう言うと、ハイラが立ち上がってバサラを椅子に寝かせる。そして床の空いている空間に魔方陣を描いていく。それは、さながら絵画のように複雑で美しい模様だった。

「インドラ、もう少しかかるわ。邪魔が入らないように結界を張りなさい」

「承知しました」

男は扉に呪符を貼る。その上から指で範字を書いていく。それは書いた後から煙を出すと黒く変色して　扉は一枚の壁になった。

「終わりました。男は殺します？　ハイラ様」

「そうね、暴れられても嫌だから。この魔方陣に運んだら殺しなさい。もつたいないけど、上半身も無駄になるわね」

顔だけこちらに向けてハイラはがっかりしたとつぶやく。

「こんなに育ってちゃ、美味しくないもの。食べるんなら子どもじやなくてはね。子どもの泣き声は最高の味つけだわ」

「その意見とあなたの食癖には賛同しかねます。そういえば、昔、わたしもサンテラもあなたの食用になる所だったんですよね」

「そうだったかしら？　そんな昔の事、忘れなさい。もう食べたいなんて言わないわ」

ハイラに肩をすくめてみせて、インドラがウィリアムを抱えて魔方陣の真ん中に置く。

「まだ、殺してはだめだよ、インドラ」

そこへ今まで大人しくしていたバサラが声を上げた。

「また、何か企んでるんですか」

「いや、聞きたい事があつてさ」

52・ 広がる魔法陣

「聞きたい事、ですか？」

そう、とインダラに応える男。

「クロードの行方。今、どこにいるか聞いてよ」

はい、と返事を返してインダラはウイリアムを抱き起こす。それは、大事なものを扱っているかのように優しくかった。

「ウイリアム、声を出してごらんなさい。声帯まで傷ついてないといいんですけど。喉の髪は取ってあげますからね」

首にきつく巻かれた髪をほどくとゲホゲホとせきを繰り返してウイリアムの顔色が戻ってくる。

「何をするつもりか知らないが、おれは何も言わないからな」

横に向いた顔をインダラが顎に手をかけて戻す。

「残念です。じゃあ仕方ないので術でしゃべってもらいますよ」

素早く組まれる印。

『我に寄りて力を貸さんとせよ、捕縛、落手、剥縛、おまえの口蓋の主は私だ』

「クロード様の居場所を知っていますか、ウイリアム？」

穏やかに聞く男にウイリアムは逆らうことが出来ない。勝手に

口が動くのをただ、驚いているだけだ。今まで直に魔道師と戦った事が無い。その事に気付いて愕然とした。

おれは、コーラルを倒そうとしていたはず。なのにこれは。

「クロード様は二年前、国を出られました。行き先などは知りません。国の宝をお持ちになったらしいですが、それが何かは知りません」

歯を食いしばる事も出来ずに口が動くのに涙が滲む。

「らしいですよ、バサラ様」

振り返る男にその主人は楽しそうにうなづく。

「姉さま、ベオークにクロードはもう来ていました？」

バサラの問いにハイラは、いえとだけ返す。彼女にとってクロードなど興味の範囲外らしい。しかし、そうかとおつぶやくバサラはうれしそうに綺麗な笑顔をみせた。

「クロードの事だ。ベオークに来るつもりだろう。二年前か、急がなくてはな。やっぱり早く体を引っ付けてベオークに戻ろう。せつかく来るのにおもてなしをしなくちゃ」

「では、もうよろしいですか」

「ああ」

解、と男は術を解くとウイリアムをそつと寝かせる。この体は主人の体になる、優しく扱う理由はそれだけ。

振り上げた剣は先ほどの大振りな剣ではない。細い繊細な両刃の剣。その切っ先がウイリアムの胸に刺さる寸前、元扉だったところが大きく叩かれる。

「ウイリアム、どうした？ ウイリアム？」

それは、さっきの物音に気づいたダリウスのもの。

「ダリウス様！ 来てはいけません。おれは、一緒には行けなくなりました。彼女に、アリスローザに愛していると……」

ああ、何もかもおれは中途半端で。やはり不出来な奴だったか。愛した人を二人とも守る事が出来なかった。おれは。

途切れた声。ダリウスの手に力が籠る。

「ウイリアム？ どうした？ 返事を、返事をしろ！」

一体どうなっているのか、見当もつかない。

「扉を打ち破れ、早く」

ダリウスの命に従者が何人も体をぶつけるが扉はびくともしない。大きな音はするがガタリとも動かないのだ。まるで分厚い壁に体当たりしているような感触。

「ウイリアム、何があった？」

返される事の無い問い。

流れる時間。

そこへステファンが走ってくる。

「どうしました、ダリウス様？」

「中でウイリアムが危険な目に合っているかもしれない。だが、扉が開かないのだ」

ダリウスの言葉にステファンが階段を目指す。

「どこへ？」

「上の階へ行きます。窓側から下に降りて部屋に入ります」

そうか、とダリウスもステファンの後を追って走り出した。

「ダリウス様、危険です。わたしにもお任せを」

ダリウスは従者の声に応えず、バルコニーに両手でぶら下がる。

足を振り子のように大きく振って弾みをつけた体が手を離れた拍子に下のバルコニーに飛び込む。それを追うようにステファンも続く。

足を軽く捻ってしまつて、小さく声を出してしまつたのを後悔しながら視線を部屋に移したダリウスの目前に広がった光景。

「ウイ……リアム」

そこには、おびただしい血痕。

その血の海の中にある見知った男。

しかし、それにはあるべき物が無い。腹から下の部位が消えていた。

「どうしました？ ダリウス様。中に何が……」

後ろから覗き込んだステファンがぐつと息を飲んだ。

「魔道師が来たんだな。くそっ」

ステファンの声にダリウスは初めて部屋の様子を見る余裕が出来る。そこら中、物が倒されているのはここで戦ったのか。そしてウイリアムの体の下に広がる魔方阵。

「ウイリアム、おまえどうして」

膝をついたステファンが見開いたままのウイリアムの顔を閉じる。胸にある小さい傷は確実に心臓を貫いていた。

「苦しまなかつたらうな、ウイリアム。ぼくが仇を取ってやる。魔道師を、コーラルを許さない」

外からはどうしても開かなかった扉が内側からは嘘のようにあつ
けなく開いた。 ウィリアムの亡骸を清めて別の部屋の寝台に寝か
せる。 このまま置いて置くことなどではしないだろうが。

「アリスローザに伝えなくっちゃな」

ぽつりとステファンが言う。 こんなに簡単に、残酷なやり方で
人を殺してしまう。 魔道師に、その存在に怒りを感じて振るえが
止まらない。

その血を継いでいる自分にも、また。

53・王の気概

無事クライブを救出したアリスローザ達は、ダニアンの術で宿にしている商館に戻る。

今だ彼は意識の無い青い顔をしているが、呪香の影響から抜けたためか微かに血の色が戻ってきている。

「意識が戻ったら、この薬湯を飲ませてください」

ダニアンが黒い液体を杯にたつぷりと入れて部屋に入ってきた。

傍らについていたハーコートとアリスローザがその得体の知れない液体の匂いに眉を顰^{ひそ}める。

「何？ 気味が悪いわ」

「何を言ってるんです。あたしの見たところ、呪香以外に魔薬を飲まされていた兆候があります。その、解毒剤ですよ」

「何が入ってるの？」

アリスローザの問いに魔道師は片眉を上げた。

「世の中、知らないほうがいい物もありますよ。アリスローザ様」

「どういうことだ、ダニアン。クライブ様のお体に障りがあるのかハーコートの言葉に魔道師は仕方無く応える。

「体に悪いかと聞かれれば、あまり良いとは思いませんが。体に魔薬がある方が悪いとあたしは思いますよ。しかし、これの材料については詮索しない方が貴方様のためです。聞いただけで吐きそうになる事請け合いですから」

魔道師はそれだけ言うのと頼みますねと部屋を出て行った。

それから一刻ほど経った頃、クライブの顔が苦痛に歪んで声が上がる。

「嫌だ。クロード、行くな」

その名前にアリスローザは、はっとしてクライブに駆け寄る。

宙に伸ばされる腕。 捜して彷徨うその腕を彼女は思わず握って降ろす。

ほっとした顔になったクライブは、うつすらと目を開ける。

「クロード、帰ってきたのか」

その青い、湖の底のような瞳は　クロードと同じ。

しかし、その瞳の中にあるのは戸惑いと喪失の色。

「クロード……じゃない。誰？」

「クライブ様、わたしは元ボルチモア州の州姫でアリスローザと言います」

「アリス……ローザ？」

反応が薄いクライブに横からハーコートが声をかける。

「クライブ様、お気づきになりましたか」

わずかに顔を横に向けたクライブの顔に笑みが浮かぶ。

「ハーコート公」

「良くご無事で。わたしはもう、二度とお側を離れません。こんな危険な目にも合わせません」

力強く言うハーコートの言葉にクライブは目を閉じる。

「すまない、ハーコート公。わたしは　逃げていた。政務から、そして、あなたからも」

「クライブ様」

うつ伏せになって泣き始めたクライブにハーコートはかける言葉も無く。

こんなにもクライブ様をわたし達は追い込んでしまっていたのか。　こんな若い肩に全てを押し付けていたのだろうか。

黙りこむハーコートを押しのけるように伸ばされる手。

「クライブ様」

呼びかけられて顔を斜めに上げたクライブの頬にアリスローザの平手が飛ぶ。

「な、何をする？」

叩かれた経験が無いクライブは心底驚いて体を起こす。

「あなたがご自分の事ばかり、可哀相だと泣いているからです。本当に可哀相なのはこの国の国民だわ。あなたは国王なのに、考えて

いるのは自分の事ばかりなの？」

「アリスローザ、無礼だぞ」

遠慮の無い彼女にハーコートが厳しくたしなめるが。

「いいえ、クライブ様にはもう少し、王としての気概を持っていたなくては。自分の肩に重い物がのっている？ そんなの当たり前よ、苦しくて、しんどくて当たり前なのよ。あなたは王なんだから、国のために国民のために考えて苦しんで。だから、わたし達は王を尊敬するのよ。王に夢を見るのよ。王のために命を投げ出そうとするのよ」

立ち上がって大声を張り上げるアリスローザをクライブはただ、見ていた。

今までこんなに頭から叱責された事など無かった。初めはその事に驚いていたが、次第に頭がはつきりしてくると男装の女性の言葉が身に染みてくる。

「そうだな、わたしは甘えていたんだ。自分の若さに。経験の無さに。だけど」

ぐらりとする体を慌ててハーコートが支える。

「クライブ様まだお休みください」

「アリスローザ、薬湯をお持ちしなさい」

ハーコートの言葉に言い足りない様子のアリスローザも渋々、薬湯を取ってくると寝台に戻る。

「体に残っている、魔薬を排する解毒剤です」

ハーコートの説明に大人しく杯を持つていき、顔をしかめながらもクライブは飲み干す。

ああ、この人は素直な人なんだ。こんな些細な事からもそんな事が分かる。 あんな酷い色と匂いのする物をあっさりと。

誰かがしっかりとついていなくてはならない、そう思わせるクライブに愛おしさと危うさを感じる。

54・大きな責任

しかし、他の者にはこんな姿を見せてはならない。王は内面の葛藤など臣下に悟られてはならないのだ。毅然として超然。そうでなければ、誰もついていけない。

レイモンドールの王はかつて、神のように人で無いとさえ思われていた。魔道の加護を受けて歳を取らない。魔道師が実権を握っていた。つていようと他の者には揺らぎの無い施政を行う者として君臨出来ていたのだ。

今はそんな後ろ盾も無く、国が混乱している。大変な時に王位を継いだものだが、ここは腹を据えてもらわないといけない。

飲み干した杯をアリスローザに差し出してクライブは、ハーコートにまた寝台に寝かされて目を閉じた。

その眠りは今までの浅い淀んだものでは無く、夢も見ないほどの深い眠り。顔を傾けると椅子に腰掛けてうとうととしている若者の姿が目に入る。黄みの強い豪華な金髪。少し上を向いている鼻。薄い桃色の唇は少し開いて。

そうだ、この若者は女性だった。明るい晴れた空のような瞳の。しかし、口から出てきたのは厳しい言葉だったが。だが、この者の言うことは正しい。わたしは、今まで甘やかされ、自分も甘えていた。王座を望み、王座を継いだ、その瞬間から自分は変わらなくてはならなかったはず。

クロードの事を愛していると同時に憎み、嫉み、全てをクロードのせいにして内側に閉じこもっていた。そのことが、少しはつきりと分かったような気がして。

もう一度、目の前の女性を見つめた。その、視線に気づいたようにアリスローザが目を覚ます。

「あら、目を覚まされていたんですか。申し訳ありません、何か召

し上がりますか？」

「いや、さっきの薬のせいで胃が痛む。何も要らない。それより、さっき、ボルチモアとか言っていたが。あのボルチモアの事か」

クライブの問いに目の前の女性はうなずいて答える。

「ええ、そうです。反逆罪で死刑になったのは、わたしの父です。わたしも捕らえられたのですがクロードに助けられて、スノーフォーク家にお預けの身になってました」

「クロード？」

またもうなずく女性にクライブはただの知り合いではない、と思う。

クロードの名前をいうときの彼女は、本人は意識していないだろうが、浮かべている表情はとても優しい。 またも嫉妬の感情に支配されそうになって、クライブは話を逸らす。

「そうか、君はそれで何で今ここにいるのだ。 どうして女の身でありながら、そのような格好をしている？」

「それは」

そこまで言って、アリスローザはさつと佇まいを直す。

「クライブ様、わたし申し訳ないことをいたしました。 高貴な御身に手をかけるなんて」

「いや、いいのだ。 誰もあんな風にわたしを怒ってくれる者はいなかった。 実はとても嬉しかった。 あの後、何を言うつもりだった？」

にこりと笑うクライブに、アリスローザも苦笑いで応えるしかない。 あんな風に王に手を挙げるものなど、いるわけが無い。

「あのときは、頭に血が上ってしまって……クライブ様の心の内なと考えるしないで、好き勝手な事を言ってしまった。 でも、クライブ様。 言った事は良くお考えになって欲しいのです。 良い暮らしが出来る、人々が畏敬いけいの念で貴方様を見る眼差しには大きな責任が背後にあります。 空威張りでも、何でも王は偉そうにしておられないと国民は不安です。 偉そうに臣下に命を下す。 その内容が国のためなら。 民のためなら。 それに不満を持つものなど取るに足りま

せん」

アリスローザは思わず、クライブの手を握る。

「ハーコート様のお話をお聞きになつてください。厳しい声をお聞きください。甘言を持つて取り入ろうとする者こそ排するべき者です」

「王は誰にも頼れない　と、言う事か」

「クライブ様、厳しい事を言う者こそ、貴方様の事を考えている者です。まずはハーコート公を信頼し、彼の勧める人選にまかせてみてはどうです？」

「そう……だな」

そう、言いながらも自分の手を握っているアリスローザの手からクライブは視線を外すことが出来ない。

君はどうなのか。　どんな理由でここにいいのか。　わたしを支えてはくれないのか。

会ったばかりなのにもう、好意を抱いているクライブだったが。

それは、こんなに気安く他人の女性に触れられた事など無かったからか。

クロードとどんな関係だったのか。

気になる事はなかなか彼の口からは出ていかなかった。

「わたしは、クライブ様に期待しているんです。魔道師から実権を取り戻したレイモンドール国の王としての貴方様に。そのためにわたしたちは、ここに来たのですから」

言えなかった事にあっさりと答えが帰ってきた事にクライブは笑みを浮かべる。　この女性は誰かと似ている　誰か、いやクロードにだ。

自分の気持ちを臆することなく、口にする。　そんな相手に会うのは、本当に久しぶりだったのだ。　自分の懐に何をまとうことなく入って来る言葉。

王になつてから、いや、生まれてからクロードに会うまで無かったこと。　そして、また　。

「アリスローザ、君はわたしを支えてくれるのか」

「クライブ様、勿論……」

やっと口にした言葉に対する、答えは大きく開けられた扉の音に消されて。

「何だ？」

「アリスローザ、ちょっと」

大きく扉を開けた割には、顔を出したハーコートは急に声をひそめて彼女を手招く。

「申し訳ありません、少し失礼します」

立ち上がった彼女を引き留めたい思いについ捕らわれて、クライブは代わりに両手を強く握る。

この気持ちは何だ？ クロードの関係している者だから、こたわっているのか。

あたりまえだが、こちらを見ることも無く閉められた戸をクライブはしばらく所在無く見つめていた。

55・ 最後のお別れ

アリスローザが出ると、廊下にはハーコートが難しい顔で立っていた。その横にいたのは。

「ダニアン？ どうしてここに？」

「ここでは話せない。わたしの部屋に来て欲しい」

硬い表情のハーコートと伏目がちな魔道師を交互に見ながら嫌な予感をアリスローザは感じていた。

「一体、どうしました？」

恐る恐る聞く、アリスローザにハーコートは低く応える。

「ウイリウムが亡くなった」

「誰が……亡くなったと、ウイリウムって聞こえたんですけど」

口に出している声が自分の声だとは思えない。

目の前で痛ましそうな顔をしているのはなぜ？

何で、ダニアンは顔を逸らしているの？

誰が……亡くなったって言った？

恐ろしいほど、自分の心臓の音が大きい。 どうして？ なぜ？

それだけが頭の中をぐるぐると回って。

「アリスローザ様、魔道師の仕業だと思われませんが。我らが部屋に入った時には、ウイリウムは絶命しておりました」

「どうして、その時いなかったのに魔道師の仕業だとわかるのよ」

つい、ダニアンに向かっていらいと声を荒げてしまふ。

「ウイリウムは魔方阵の中に寝かされておりましたので。犯人は外国の、ハオタイの魔道師だと思われます。魔方阵が東方の特徴的な様式でして、しかもレーン文字は使われておりませんから」

ハオタイの魔道師がなぜ、ここにいるの？ そんな事より。

「なぜ、ウイリウムが殺されたの？」

「推測するしかございませんが。体の一部が無くなっておりますので。下半身を奪われた可能性があります」

「ダニアン、お願い。ウィリアムの所に連れて行って」

縋るように手を伸ばしたアリスローザを避けて、魔道師は目を伏せる。

「お止めになった方がよろしいです。ウィリアムは魔術の結界を張った中で茶毘たひにふする所存でございます。彼の体は呪がかけられておりますので、そのまま埋葬は出来ません」

小さいながら、きつぱりとアリスローザの願いを拒否する魔道師。良いから、わたしを連れて行きなさい！　ダニアン、早く」

魔道師の胸倉を掴んでアリスローザが右手を大きく振り上げる。

しかし、その手をハーコートが素早く押さえて止めた。

「魔道師にあたっても仕方ないだろう、アリスローザ。ダニアンは知らせに來ただけだ」

「分かっています！　だけど、会いたいんです。お願いします」

ハーコートは、問うようにダニアンを見る。

「お二人とも、あれをご覧になってないから」

魔道師は息を吐く。

「いいですよ。それなら魔方陣でここから参りましょう。だが、いいですか、彼は。ウィリアムを茶毘にふすることは譲れませんからね」

うなづく二人の目の前に魔方陣を描いていく手際の良さ。この魔道師はその手で残虐に人を殺した事があるのだろうか。今までと違う目線で彼を見ているアリスローザだった。

ひんやりとした、薄暗い廊下の一角に出たアリスローザは確かめるように魔道師を見る。

「ここなの？」

「さようでございます」

躊躇ためらい勝ちに扉を開ける。　最初に見えたのは奥の大きな寝台。

そこに佇む若い男の姿。

「アリスローザ、何でここに」

非難めいた眼差しを受けて、魔道師がぶつくさと言う。

「どうしてもお会いになると仰るのを押さえるなんてあたしには出来ませんよ」

「ステファン、わたし……」

「アリスローザ、君には見せなくなかった」

そう、言いながらもステファンは寝台から外れてアリスローザの手を取った。

「さあ、最後のお別れを」

来ると駄々をこねたのは自分のはずなのに、足がすくんで前に出ない。本当にわたしは、ウィリアムを見たいのか。確認したいのか。何を？ 何を……。

押し出されるようにして寝台の前に立ったアリスローザの目の映ったのは。

血の気が全く無い透き通るようなウィリアムの顔。いつもあんなに血色が良かったのに。

いつも笑ったり、怒ったり、忙しそうに動いていた口元は微かに歪んで。

いつも乱れていた、レンガ色の髪は今は綺麗に梳かしつけられている。

そして、掛け布の上で組まれている長い指。こつこつした武骨な大きな手。

その指がわたしの髪に差し入れられて ああ、少し厚めの唇がわたしに触れて。

今までの事が急に溢れるように思い出されてアリスローザは口を覆う。

わたし、彼を。

その後はもう、言葉にならない。すがり付いて泣き出した彼女

の涙はしばらく止まらなかった。

56・ 目にしみる青空

「悪いがアリスローザ、事はまだ終わっていない。ここで二人きりにしてやりたいがそれも出来ない」

ハーコートが肩に手を置いたのを期にアリスローザは立ち上がる。ここで悲観にくれていても誰も彼女を非難しないだろうが。いや、いるのだ。彼が、ウィリアムが怒るに決まっていた。何をやっているんだと。

何のためにここまで来たのだと。今度は見誤ることなくやりとげようと、言ってくれた彼が……怒るに決まっている。

泣くのは事が成就してからでいい。齒を食いしばってアリスローザは歩き出す。

^{かたわ}傍らのステファンさえ、何も声をかけられなかった。

「ありがとう、ダニアン。帰るわ、クライブ様をお待たせしてるし」
黙って印を組む魔道師の側にハーコートとアリスローザが寄る。
戻って来たアリスローザは、憔悴きつていてクライブは何があったのかと聞きたかった。しかし、それを口にした途端、場の雰囲気が変わるのでは？ という思いから言葉にできない。

「アリスローザ、あの」

やっと声をかける。 どうしましたと寝台に寄って来た彼女の手におずおずと触れる。

「君に何かあったのか？ とても……悲しそうだ」

はっとした顔でアリスローザはクライブを見る。 こうやって、人の顔色を見ながらこの方は今まで生きてきたのだろうか。 この国の王だというのに。誰が一国の王位継承者がこんなに心優しい、まるで子どものような者だと思っているだろうか。

「申し訳ありません。お気遣いはどうか……」

不覚にも流れる涙に彼女自身が驚く。

「ねえ、アリスローザ。君がわたしを支えてくれるというのなら、

わたしも君の力になりたい。わたしなど何の力にもなりはしないだろうが。せめて、もし、悲しいのならばまんしないでくれ。泣いていいから」

子どものように抱き寄せられてアリスローザは、堰を切ったようにクライブの胸に顔をうずめて大声で泣いた。

さつき、あれほど泣いたというのに流れる涙は自分の血のようだった。いっそ、体中の血が流れ出ていけばいいのに。彼女の恋は成就する前にまたも消え去った。

三ザンほど後、感情を全て出して泣いたせいか、ずきずきと頭が痛む。収まった涙と、王に抱きついて自分の行為に後悔しながらアリスローザは顔を上げる。

「クライブ様、わたし……」

言葉は、口を押さえられて続かない。

「申し訳ございません、とか。ご無礼をお許しを、とか。そんな言葉は聞きたくない」

クライブは強く言ってアリスローザを離す。

「そんな事を聞きたいために胸を貸したわけじゃない」

傷ついた顔のクライブにアリスローザは、衣装箱からシャツを取り出す。

「では、着替えていただけます？ 涙でぐしょぐしょですから」

「ああ」

にこりと笑ってクライブはシャツを受け取った。

サイトの王城では、マルトが地下宮の警備長からクライブが居ないとの報告を受けていた。

「まさか、このようなことになるとは。ずっと寝たきりでしたのに。あの場所へは一箇所しか出入り口がないはずですが」

二十四時間隙の無いように、あの場所に行く門を見張らしていたのにと警備長は首を捻る。

「内部の者が関わっているのかも知れんな」

「内部の者、ですか」

たじろいで青黒くなった顔が、今度は白くなっていく警備長を横目で見ながらマルトは淡々と言う。

「鍵は壊されていたのではないのだろう？ 出入り口も嚴重に見張っていた。そんな所から、歩けないクライブ様を連れ出したというならそうとしか考えられない。では、ないか」

「さ、さようで」

「関わっていた者全員、手段を選ばず、話を聞くべきだな」

「手段を……選ばず、ですか」

そう言ったが？ と冷たい目を向けられて、警備長は慌てて礼を取ると部屋を出て行く。それを見送ったマルトは上着のポケットをさぐる。中から小さな鳴き声。

そして、見える白い小さな姿。

「ふん、ダニアンめ。小ざかしい奴。どういっつもりだ」

手の中にねずみを閉じ込めて少し力を入れると、ねずみは小さく声を上げてくたりと大人しくなった。

あいつも、このねずみのようにしてやる。マルトは苦々しく思った。ダニアンが送ったねずみによってクライブの居所はすでにつかんでいたのだ。しかし、マルトの苛立ちは収まらない。自分が超えられない力を持った冴えない魔道師。そのために警備の者たちの拷問を命じたのだ。彼らは、ダニアンの代わりだ。せいぜい苦しむがいい。

そして、ダニアンを知らぬふりをして捕まえて殺してやる。ガリオール様に認められなかったのはあいつのせい、なのだから。

明日、いや、いつそ即位式の前日に捕らえてやろうか。王への反逆を企てたとして、即位式の場合引き出すことにしよう。にんまりと笑いながらマルトはもう一度手の中を見下ろした。

小宮の裏庭で薄い紫の煙が長く尾を引くように昇っていく。魔

道師が敷いた結界の中。

魔方阵の上にある、黒い塊り。それは、ぐずぐずと崩れて小さい塵ちりのようになる。

紫の煙に混じって上っていき 後は何も残らなかった。

「すみましたよ」

魔道師の声に、二人の男が何も無い、魔方阵を見つめ、空を見上げた。

「行ってしまったな」

「ここに、僕のここにあいつは、ウィリアムはいますよ」

胸を押さえるステファンにハーコートもそうだな、と自分の胸を押さえる。

痛いほどの青空。 目にしみるほど だ。

最後まで何人残っていられるのか。 一人を失っただけでこんなにもつらく悲しい。

人の命の儚さ。 失うつらさを改めて思い知る二人だった。

一日経つほどにクライブの体は健康を取り戻していく。何より本来、体が弱いわけでもなかったのだ。薬と呪香の影響から抜ければ、後は滋養のあるもので力をつければいいだけ。この所、寝てばかりいたせいで体が重いと感じたクライブはハーコート相手に剣を打ち合っていたが。

「ハーコート公、あなたは一体いくつなんです？ 息もきらずにさつきから、わたしの方が押されている」

額の汗を拭いながらクライブが不平まじりに言う。

「ははは。それはクライブ様が病み上がりだからですよ。少し、休みましょう」

綿布をアリスローザから渡されて二人が休んでいると、アリスローザがハーコートの置いた剣を握って二、三度剣を試すように振った。

「アリスローザ？」

「クライブ様、一本勝負いたしましょう」

言うが早いか、側に置いていた剣を放つてよこす。慌てて受け取ったクライブだが。

「止めよう、危ないぞ」

そのクライブの声に被さるように振り出された剣の太刀筋の鋭さに、ぎよつとしながら剣を合わせる。

「お気遣い無く。わたし、少しは使えますのよ」

アリスローザは、合わせた剣を力一杯押し込んだ後にぱつと離れて横に走りこんで斜め下から切り上げるように剣を振る。

重い金属のぶつかる音と、それを肩越しに止めるクライブの口から漏れる声。

「くそっ」

先ほどのハーコートのようにずしりと力で押してくる剣では無い。

どこからくるのか。

どう、打ってくるのかが読みにくい。身軽な体を生かしたすばやい攻撃。

そのため、さっきから防戦一方になっている。

「力の無い者でもやり方があります。何にでもやり方は一つではありません」

まっすぐ突いてきた、アリスローザの剣を思いきり上から叩くとあっさりアリスローザは手を離れた。

大きな音と共に落とされる剣。それを拾うと元の場所に戻す。

「そうだな、何にでも……しかし、何でそんなに強いのだ？」

呆れたように言うクライブにアリスローザは笑いながら応える。

「わたしの三年前の罪状はもう、お話したと思いますけど」

そうだった。この者はボルチモアでレジスタンス活動を主導していたのだった。

「その、罪状は忘れたほうがいいのではないかと思っていたけど」

そう言ってアリスローザを見ると、彼女は笑って見返して来る。

しかし、その笑い顔はどことなくこちない。分かっていたが、

クライブは気付かないふりをする。

何があったのかを。勿論、聞きたかったが。

そこへ。

大勢の足音が響いて、玄関の扉が乱暴に開けられた。

「王陛下に弓を向けようとする嫌疑により、おまえ達は拘束される」

「何を無礼な！」

クライブや、ハーコートの顔を知っているような身分の者がいないため、何を言っても通じない。ハーコートがアリスローザの落とした剣を拾って構え、クライブは予備の剣をアリスローザに投げる。

剣を受け取った彼女も走り寄ると、三人は背中合わせに剣を構え

て立つ。

「これで、誰が一番分かるな」

クライブの声を合図に三人は足を踏み出した。

58・人選の誤り

大勢がどつと屋敷になだれ込み、短槍を繰り出してくる。押さえ込んでしまおうと考えているのだろうが、屋外ならともかく室内ではその人数が仇になっている。

待ち構えるように、クライブとハーコート、アリスローザが次々と槍を振りまわすことの出来ない兵士たちに斬りかかって倒していく。次々と倒れる兵士によってなおも捕縛など困難になっている。累々と重なる兵士たちの悲鳴と新たに入って来る者の威嚇の大声。その中で休むことなく敵を切り結んでいく三人。

『縛せよ!』

そこへ平たい声が響き、時が止まったようにそこに居た全員の動きが止まる。

目だけしか動かせない、アリスローザの前に歩いていく一人の男。「よくやった、ダニアン」

玄関からまた一人。

「マルト様」

マルトに浅く礼を取るのは 仲間だと思っていた魔道師。

「おまえ達、早くこの者どもを捕縛しろ」

連れている兵士は中級か、下級の者ばかりでたいしたことでは無いように装っているが、マルトがわざわざ出張っているだけでもこの捕縛がいかに大事かを表していた。

『解!』

印を組んで術を解いた途端に拘束されたアリスローザが噛み付くように叫ぶ。

「ここにいるのは、クライブ様と宰相のハーコート様よ。何を考えているのよ」

「何を言っているのだ、この者は?」

マルトはちらりと冷たい視線を送る。

「クライブ様なら主城で大事に静養されているし、ハーコート様ならボルチモア州で非業の死を遂げられたはずではないか」

マルトの口にする笑みを見て自分たちはこのまま、身分を伏せられて処刑されるとアリスローザは確信した。

後ろ手に縛られた三人は、引きずられるように歩かされる。

まだ、何とか手はあるはず。　ダリウス様にこの事を知らせないと。

そこまで考えてアリスローザは愕然とする。　自分たちの計画の鍵はあの魔道師が握っているのだ。　これで終わりなのか。

締め付けられるような思いで後ろを振り返ると、ダニアンは無表情にこちらを見ていた。

いつから裏切っていたのか。

やはり、魔道師など信用できない　　今更そう分かってても遅い。

「ごめんなさい、ウイリアム」

彼女の頬に流れるのは悔し涙。　人選を誤った自分の不甲斐なさへの涙だった。

「おまえも来るのだ、ダニアン」

マルトの高圧的な言葉に中年の魔道師はゆっくりと首を振る。

「いえ、あたしは小宮に行きます」

「何？」

むっとした顔のマルトに向けてダニアンは澄まして言う。

「あたしがモンド州公になられるダリウス様にお会いしに行かないと、お困りになるのはそちらでしょう？　あたしがお膳立てしたんですから。あたしが行かないとダリウス様は普通に新王へのご挨拶に伺うだけ……ですけど。いいのですか」

すぐにでも反逆罪の罪を被せて捕らえようとしていたマルトも、それを聞いてしまうと手出しできない。

まさか、それも見越していた？

マルトのきつい視線を平然と見返したダニアンは、前に見た時よりしょぼくしてはいなかった。　それは、自分の見方が変わったせ

いかもしれない。

「では、手筈通りをお願いしますよ、ダリウス様」

主城の中、魔道師から羊皮紙の巻物を受け取ったダリウスが慎重にそれを礼装の懷に隠す。彼と別れたダニアンは、ステファンと共に歩き出した。

大勢の貴族が玉座の間に集まっている。左右に分かれて控えている貴族たちの間に敷かれている見事なゴブラン織りの絨毯。長い玉座への絨毯を進んでいくのは、モンド州の新しい州公になったダリウス。新王への挨拶と自分の州公就任の挨拶。

各州を統べる貴族の中でもハーコート家は特別な扱いになる。王の係累として、候爵、では無く公爵という地位的には王家の次の地位になる。

挨拶も臣下の中で一番初めという栄誉を与えられていた。

内心の緊張を顔に出さないように苦労しながらも、ダリウスはやや早足になることを押さえられなかった。

玉座の置かれている壇上は、一番近くに寄ったとしてもかなりの距離があるが。周りには側づいているマルトしかない。王を弑しようとするなら、やはりこの時をおいてはない。

指定された場所にひざまづいてダリウスは口上を述べ始める。

「この度、父の後継となり、モンド州の自治の任を拝命することになりました、ダリウス・ザクト・ヴァン・ハーコートでございます。コーラル国王陛下、ご就任お喜び申し上げます。魔道の光たる陛下の英々たる栄光の時が続きますように。臣下として心よりお仕え申し上げたく存知ます」

ついで、懷から出す、巻物。そこへ、かかる声。

「それは、何かな？ ハーコート公爵」

「こ、これは口上を書いた……」

「そうでは無いでしょう、公。それを見せていただきます」

マルトが楽しそうに壇上から降りて来た。

知られている？

巻物を持ったまま、ダリウスはその場から動けずにいた。その手から巻物を奪って広げるマルトの顔色が変わる。

これは物質移転の魔方陣。だが、自分にも分からないほどの複雑な物。またしても湧き上がる嫉妬の感情。

「これは、ただの書きつけではありませんよね」

振り返ってコーラルに合図すると、コーラルが玉座から立ち上がる。

「何をするつもりなのだ。祝いの品ではあるまい？」

「ハーコート公、あなたを王に対する逆臣の疑いにより拘束させていただきます」

マルトが手を打った途端、なだれ込む兵士たち。明らかに待機

させていたものだろう。

そこへ、縛られたステファンが連れてこられる。

「この者が控えの間に潜んでおりました」

「ステファン、おまえ一人か」

ダリウスの声に男はああ、と応える。

「あいつは……はげは裏切った」

ステファンの言葉にダリウスはがっくりとうな垂れた。　　そういう事か。

59・震える手

「おまえ」

コーラル他、まわりの人間全ての目がステファンに注がれている。瓜二つの顔。まさかという思い。しかしなかなか誰も、その考えを口にできない。

「ここにいる、ステファンは、捜されていた、陛下のお子様です」
その時、開いている扉から入って来た魔道師が淡々と言う。

「母親は、ボルチモア州の姫、リディア・ミゼル・ヴァン・ドミニク様でいらっしゃいます」

「ダニアン、おまえ余計な事を」

殴りかかろうとするステファンは、兵士に押さえ込まれる。そこへしゃがみ込む魔道師。

「いずれはばれますよ。この際、父上と存分にお話をされますように。ステファン様」

睨み付けたステファンの懷に滑り込む短剣。はっと顔を上げると魔道師はすでに背中を向けていた。

「おまえがそうだったのか。捜していたぞ、ステファンというのか」
親しげに呼ぶコーラルにステファンは精一杯の笑顔を向けた。

「ぼくも会いたかったですよ……父上」

「ステファン様、こちらへ」

マルトが慌てて拘束していた、兵士を下がらせてステファンを部屋から連れだす。

「お祝いの口上が終わるまで、こちらに待機していてくださいませ」

ざわついた玉座の間にやっと静けさが戻った頃、何も無かったように貴族の祝いの口上が続けられる。

だが、流石に祝賀の宴は明日に延ばされる事になった。代わりに主城を離れた小宮の前庭に引き出されたのは。

クライブとハーコート。そしてアリスローザとダリウス。モンド州の州兵も武器類を没収されて一箇所に集められている。

そこに現れた、コーラルとマルト。その斜め後ろにいたのは、コーラルにそっくりな彼の後継者。

「おまえたちはここで処刑してやる。余の目前で死ねるのを光栄と思うのだな」

「余？ コーラル、おまえは勘違いしている。クライブ様は良い王になれる。長い目で見て差し上げるべきだ」

「何を言っているのかね、兄上」

コーラルは呆れたようにハーコートを見る。

「余がクライブの成長を待ちきれずに王の座を望んだと？ まったく、甘いな、甘すぎる。だから一介の魔道師なんかに騙されるのだからにだれが王になろうと関係ない。余が引きずり降ろすだけだからな」

嬉々としてしゃべるコーラルの背後から短剣を持ったステファンが飛び込むように駆け寄る。

「コーラル！ おまえ、どこまで腐ってやがる」

「矢を！」

叫ぶマルトに伝えて構えていた兵の一人が矢を放ち、ステファンの横腹に刺さる。がたりと落とした短剣を掴んだマルトが背中から切りつける。

「やめろ、マルト」

コーラルが止めたが、マルトの手は止まらない。何度も赤い鮮血があたりに散る。

「この者はコーラル様を殺そうとしたのですよ」

「ステファンは……余の子どもだぞ、マルト」

「もう、助からないかもしれませんね」

冷たく言うマルトにコーラルは、急いで倒れている息子を手助け起こす。

「誰か、医者だ！ ステファンを運べ」

体から流れているのは、自分の血だろうか。　　どんどん冷えていく体。

誰か、助けてくれ。

何をこんなに慌てているのが、コーラルには自分でも分からなかった。

しかし、分かっているのはステファンをこのまま死なせてはいけない、という事。

利用価値がある、そうだ。　この男には　　。

それだけの事　　のはず。

青い顔で運ばれる自分の息子を見送りながらコーラルは両手の振るえが止まらなかった。

死んでしまったら。　自分の息子が。　そんなばかな。

「ははあ、こうなっちゃいましたか。　思うようにはいかないものですよ」

一部始終を見ていた魔道師が残念そうにつぶやく。

そしてダニアンは頭を上げると、しばらく空を見ていた。

60・見上げた空

「来ていただけたらいいんですがね」

ダニアンが、もう少し待って事態がどう動くかを見極めて立ち去ろうと考えていた丁度その時。

「手が掛かるな、クライブ」

あまりにも懐かしい声にアリスローザは即座に顔を上げる。見上げた空に浮かぶ二つの物体。

一つは、暗赤色の動物。地上にいるものとはまるで大きさが違うが、姿は狼だ。しかし、その狼の背で羽ばたいているのは大きな翼。そして背に跨っているのは少年か、少女か。いずれにしてもまだ、十四、五歳くらいか。茶色の何の変哲も無い上着にぴたりとした乗馬ズボン姿、膝までのブーツを履いている。

「下に降りますか」

そう、言ったのは狼に乗った少年の横にぴたりと付けた様にいる、黒いドラゴンに似た動物に跨またがった青年。黒い丈の長い上着に細めのズボン、少年同様のブーツ姿。

「先におまえだけ行ってくれ。おれはやることもある」

「わかりました」

少年は従者らしい男の返事にうなずくと、空高く狼を向かわせる。手綱を持っているわけでもないのにその狼は彼の意のままに動くようだった。

彼が体をぐつと回した拍子に長い髪が流れるように大きく揺れて広がる。銀色に近い金色の髪が陽の光を受けて銀の粒子をふりまいたように輝く。

主人が離れたのを確認して従者の男は自分が乗っているドラゴン

似の物に命じる。

「サウンティトウダ、降りよ」

サウンティトウダと呼ばれた生き物は無言のまま、静かに地面に降り立つ。

その大きな異形の物に恐れをなして、兵士はわらわらと逃げている。

「クライブ様、お久しぶりでございます」

その異形の物からひらりと降りた男が、兵士に置いていかれたクライブに顔を向けると普通に挨拶をして彼の縄に手をかける。

『解』

その声で縄ははらりとその場に落ちる。あとの者の縄はサウンティトウダが器用に長い口を開けて牙で切っていく。

「ラドビアス、来てくれたのか」

はい、と笑顔を向ける長身痩躯の男はがらりとその表情を変える。反対側に陣取っている魔道師を見る冷めた目。

「これは、どういうことだ？ コーラル。それと 誰だったか。

そう、マルトと言ったか」

「うるさい！ 余はレイモンドールの王となったのだ。国を捨てて、出て行つたくせに今さら何を言ってる」

コーラルの言葉にラドビアスと呼ばれた男は、笑いをかみ殺すように口に手を当ててうつむく。

「何がおかしい。余は正当なレイモンドール王の血筋なのだ。魔道によって安寧を誇っていた頃のように余が導くつもりだ」

「その言い方、全然さまになってないな。おやめなさい、おまえに王は務まらない。自分の身の丈を知る事もできないとは哀れなことだ、コーラル」

「ぶ、無礼者！」

あまりの怒りに口をわなわなと振るわせて印を組もうとしたコーラルに向けてラドビアスが懷から出した短剣を投げる。

「うつつ」

コーラルの右手首に目標を過たず、ざくりと突き刺さる短剣。

「だからお止めなさいと言っているんですよ。おまえが術でわたしに何か出来るなどと思っている事からが間違いなんです。おまえとわたしでは魔道師としての格が違いますから。だから術なんて使う気も起きない」

「コーラル様、大丈夫ですか」

マルトが走りよってコーラルの手首から短剣を慎重に引き抜くと、遠巻きにしている兵に命を出す。

「矢を放て！ 国王陛下に反するものを捕らえて殺すのだ」

その声に弓矢を持った兵が前に出て、ラドビアスと背中合わせに立つクライブに狙いを定める。

放てという声に矢が雨のように彼に降り注ぎ、アリスローザから悲鳴が上がる。

「止めて！」

その声に答えたものか矢は彼らの体の一步手前で止まり、燃え尽きていく。

マルトが引きつった顔でラドビアスを見ると、彼は印を組んでにっこりと笑っていた。

「何度言えはいいんですか。言ってわからない子にはお仕置きですよ」

次の瞬間にはマルトの目の前にラドビアスが飛び込んでいる。

他者の目が追いつくより早く、いつの間にか持っていた短剣で深く真横に切り裂かれる彼の首。

血を噴出して倒れる男を放してラドビアスは瞬きする事も忘れている、コーラルの方へ向く。

「おまえもお仕置が必要かな」

腰くだけになって後ずさるのを上着の裾を踏んで止める。

それに小さくくそっという声。 が、次に出るのは命乞いの言葉。
「お助けください。ラドビアス様、どうかお慈悲を」

そこへ、宙に狼を飛ばしたまま、戻って来た少年が軽業師のごとく目の前に飛び降りると自分の従者に文句を言う。

「何だ、楽しそうだな。おれのいない間に一人で楽しむなんてずいぞ、ラドビアス」

「何を仰います。一人にしたのはクロード様じゃありませんか。いい所は取ってありますから。どうぞ、ご自由になさいませ」
「ふーん」

値踏みするように地面に這いつくばっているコーラルを眺めている少年にアリスローザは寒気を感じた この冷酷な眼つきの少年がああ、クロードだというの？

61・ 別の人間

「ぜんぜん手ごたえなさそうだけど」

軽くため息をつくときーラルの胸倉をつかんで自分に顔を向けさせる少年。　　こーラルは大人しくしていたが、相手がラドビアスでは無くなったことで隙を捜す。　　たかだか二、三年魔術を学んだ者が自分に適うはずは無いのだから。

ラドビアスが目を離したらこの生意気な子どももの心臓を潰してくれる。　　そう、考えている事に気づいていないのかクロードは呑気な声を上げる。

「これからベオーク自治国に行かなきゃならないのにこれじゃあ心配でならないな。だから心配事を三つほど潰させてもらう。まずは一つ」

少年は右手に嵌^はめていた指輪を剣に変える。

「顔を上げる、こーラル」

「なっ」

自分に手をかけている少年の体を振り払おうとするが遥かに体格が違うにも係わらず、びくともしない。　　それならと印を素早く組もうとするがその手元に蹴りが入る。

体二つ分飛ばされたこーラルは手をさすりながら、後ろに下がりつつ印を組んで呪を唱える。

『ティワズ イサ ウルズ』

鋭い氷の長剣が現れてこーラルの手の中に納まる。　　にまりと上がる口元。　　ちらりと目をラドビアスに向けるが動く気配は無い。

あつと言う間の出来事に反応できていないのか。

ならこれでわたしの勝ちだ。

「ばか者。余に偉そうな口を聞いたことをあの世で嘆くがいい」

笑いながら踏み込んで剣を突き込んだ。

「あの世ってどこさ」

ところが氷の剣は高い金属の衝撃音とともに弾かれる。

「そんななまくらな剣で何を斬るつもりなんだ、コーラル？ まあ、すこしは抵抗してくれないと面白くないといえはそうなんだけど」弾いた剣の残像が残るような素早い間合いで反対にコーラルの喉元に突き入れられる長剣。

足を取られるように必死でかわしてコーラルは片手で印を切つて剣を二本にすると、その一本をクロード目掛けて投げつける。鋭い弧を描いて飛ぶ剣をクロードは左手で受け止める。逆にその剣先を地面につけて轢きずるように歩いてコーラルに近づく。

地面に引かれていく一本の線。

わざとなのかその歩みは不自然なほどゆるやかで。

少年の顔に浮かぶのは楽しそうな笑み。 牧草地で犬とでも戯^{たわむ}れているように明るい笑顔。

「逃げてもいいよ、コーラル。十まで数えてあげる。おれが鬼でおまえが逃げる、でいいよ」

コーラルはさっきまでの余裕を無くして慌ててクロードに背中を向けると兵士たちの中へと走りこんで行く。

そうだ、クロードの持っているのは護法神の剣なのだ。 あなどつてはいけない。

「おまえ達、あの罪人を殺せ。矢でも槍でもなんでもいい」
大声で出す命令に兵が槍を構える。

「ハ、九……ねえ、コーラルもう逃げないの？ そんなんじゃおれ、すぐ追いついちゃうよ」

「クロード様」

咎めるようなラドビアスにクロードは片目を瞑^{つむ}つてみせる。

「おれのやりたいようにやらしてくれるんじゃ無かったの、ラドビアス？」

そうでした、とため息交じりに吐き出される言葉。

「さーどこかな？ 今だいぶ待ってたけど。あれっ逃げてないじゃん、残念」

左手に持った剣を地面につけたままコーラルに向けて走り出すロードに向けて何十本もの槍が突き出される。

ほっとして顔を上げるコーラルの目の前にいるのは。

「ひょっとして死んだと思った？」

「ク、クロード？」

少年の背後に倒れているのは槍を手にした兵士たち。一様に腹がぎっくりと切り裂かれて内臓をはみ出させて倒れている。

「今度は何をする？ 追いかけてこまかくれんぼもおまえが中途半端だから面白くないんだけど。他に何がしたい？」

息一つ乱していない少年の爽やかな笑顔を慄然と見るコーラル。

二年前に顔を会わしていたクロードはどこへ行ったのか。ここにいるのはまったく別の人間としか思えなかった。いや、人間ではない。人を一瞬に切り裂いて、楽しそうに血の一滴も浴びずに笑うなど。

人間であるはずが無い。

「お、お助けを。あなたの忠実なる僕になります。お助けください。今や、泣きながら声を上げる男にクロードの笑顔が曇る。

「え？ 何か言ったか。よく聞こえないなあ。まさか降参したっていいのか」

うなずくコーラルに露骨に不機嫌そうな顔をみせた少年。

「悪い、今の聞かなかった事にしてくれない？」

「クロード！」

アリスローザはこのまま見ていられなかった。コーラルは命を差し出すべきだと。いざとなったら自分が命を奪うと思っていたのに。

この恐ろしさは一体なんなのだ。

62・ 自ら決めたこと

恐怖を感じているのは、自分が好きだと思っていた方の少年。
そしてこの蛮行を今すぐに止めさせたいと。　コーラルを殺させた
くないと思っているのだ。

「止めて、クロード。コーラルの処遇は裁判で決められるわ。だから」

「いやだ」

その子どもっぽい言い草にアリスローザは驚いて立ちすくむ。
見た目は十四歳でも十七歳のはず。　なのに今の答えは何？

「せっかく海を越えてはるばるやってきたのにこれで終わりなんて嫌だ。こいつはおれが殺^やる」

「クロード」

「うるさい、黙ってろ」

アリスローザに冷たく言うと言を抜かしている男に近づく。

「ごちゃごちゃ周りがうるさいからさっさと済ますよ」

「お助けを、おた……」

クロードが命乞いをするコーラルの口に躊躇^{ためら}いもなく剣を突き立てる。
あがががと声にならない音とびくりと大きく体を一瞬反り返して、コーラルは地面に縫いとめられた。　細かく痙^{まひ}している男を一瞥してクロードは剣を引き抜く。

「竜印は無くなっても上位の魔道師というものはしぶといな。ラドビアス、後を頼む」

「はい」

返事を返したラドビアスが手にした剣で心臓を一突きして留めを刺す。　それを見ることも無くクロードが左手に持っていた剣を放り投げる。

『滅』

氷の剣は蒸気を上げて消えていく。

彼は利き腕すら使っていなかった。　　啞然とする群集の真ん中、
クライブの所へ歩いて行く。

「クロード、助けに来てくれたんだな。やはり君はわたしの弟……」
再会の暖かい挨拶がくるとばかり思っていたクライブは冷たく自分を見上げるクロードに言葉を失ってごくりと喉を鳴らした。

二年の月日はクライブとクロード、双子である二人の外見を大きく変えていた。似ていないのでは無い。美しいシルバーブロードの髪も藍色の瞳も同じなのにまるで違う。大人の体になっているか少年のままか。それだけでは無い、大きな違い。それはクロードの纏^{まと}う気配なのか　長く伸ばしたさらりと流れる髪。華奢な体、どこか中性的に見えるそれは以前の彼の師と同じもの。

「二つ目の心配」
手に持ったままの剣をクロードはクライブの首にぴたりと突きつける。

「クロード、一体？」
「おまえ、魔道師の支配しない国の王になるんじゃないのか？おれがいなくなった途端に趣旨換えするとは感心しないな。そんなに王が嫌ならおれに譲ってしまうか？」

「君がそう望むのなら、そうすればいい。君にはその権利はある」
顔を逸らすクライブの頬に思いがけず、クロードの拳がとんで口から血が飛び、地面に赤い染みを作った。

「ふん、放り出すというのか。だったらおれが貰ってもいいが、おれは臆病者だからな。おまえにいつ、寝首をかけられるかが心配で寝不足になる。だから、おれが王になるんならおまえには死んでもらう」

「ク、クロードまさか本気か」
「当然だ」

クロードはクライブの胸倉を掴んだままニヤリと唇の右端を吊り

上げた。

「おまえのことを罪人扱いしたのを怒っているのか、クロード？
だったら謝る。兄弟じゃないか。君が必要だと今でも思っている」

クライブの目に涙が光る。

「泣いてんのか　まったく。そういうところがおれを苛立たせる
ってわかってる？　お兄様」

クロードが横を向いてぺっと唾を吐いた。

「で、おれに王位を譲るんだったよな。じゃあ遠慮なくもらってや
るから、死んでくれ」

クロードが大きく剣を振りかぶる。

「もう、止めて！」

叫びながらクライブの体を庇うように身を投げ出したのはアリス
ローザだった。

「クロード、どうしたって言うの？　あなた、王位なんて望んでい
なかったはずでしょう。躊躇いも無く自分の兄を殺そうとするなん
て、どうかしてるわ」

「また邪魔する気？　アリスローザ。しかし、どうかしてる、って
いうのは解せないなあ」

面白くないように剣を指輪に戻してクロードは手に嵌めながらク
ライブにかぶさるようにしながらこちらを見上げるアリスローザに
ため息をつく。

「王位を簡単に投げ出すような王におまえたちは忠誠を誓えるのか
？　知らなかった。誰かに頼ってばかりいるような奴はまた、同
じ轍を踏むとは考えないのか。王の側に侍ろうとする者が善人ばか
りとは限らないだろうに。レイモンドール国の皆さんはお人好しで
困るな」

ぱしっと大きな音がしてクライブは大きく目を見張る。その音
は立ち上がったアリスローザがクロードの頬を張ったものだった。
「いい加減にしてよ。あなたがどう言おうと、レイモンドールの王
はクライブなのよ。あなたが出て行ってしまってから、クライブは

そりゃあ真摯^{しんじ}にがんばっていたのよ。あんなに荒れた国を立て直すのは大変だったはずだわ。簡単に放って投げ出したのは、あなたの方じゃないの！」

彼女の手形がついた頬をクロードは、痛えなあとゆっくり擦りながらクライブに向く。

「で、どうする？ おれはどっちでもいいけど」

「わたしは この国を導いていきたい。でも、やはり一人では出来ない」

クライブの言葉にアリスローザがクライブの足元にしゃがむ。

「わたしがおります。ハーコート公もいるではありませんか。陛下のために思う者は陛下が気付いておられないだけで、まだまだおります」

「おまえはわたしについてくれると言うのか。アリスローザ、クロードでは無く、わたしに」

「今まで本当に迷っておりましたが、本人に会ってわかりました。わたしが思い続けていたのはわたしの心の中で作り上げていたクロードだったのです。わたしが一緒にいるべきなのは陛下だと思います」

そうだ、二年前にわたしたちの進む道ははっきりと分かれていたのだ。それを認めたくなかった。あのままのクロードだと、自分だと思っていたかったただけだ。

「ありがとう、アリスローザ」

クライブは求めていた光を見つけたように膝をつく。そしてアリスローザを引き寄せてしっかりと抱きしめた。

「そうだ、わたしはレイモンドールの王だ。自分が決めたことだ。誰に決められたのでも無く自分が決めたこと」

誇らしかった自分。 あの戴冠式の自分を思い出して、クライブ

は決して投げ出したりしないと心に誓う。

63・ 出発再び

「おれは振られたってことかな、ラドビアス？」

「そのようですよ、クロード様」

クロードはその様子を見て、そうかと頭をかきながら二人に近づく。

「じゃあ二つ目は無しってことで、三つ目だな」

そう言いながら、アリスローザの胸元に手を伸ばすとペンダントを引きちぎって奪う。

「これは返してもらおうよ」

「クロード？」

「おれはここに帰ってくる理由を作って置きたかった。でも、それはもう必要ないし、君にも必要ないみたいだからな」

アリスローザはモンド州のイーヴァルアイの城で見つけた手紙の事を思いだす。

「クロード、イーヴァルアイはあなたに手紙を残していたのよ。兄として、ユリウスとしてそのペンダントを送ると書いてあったわ」「知ってる」

ペンダントに優しく触れながらクロードはアリスローザを見た。

「一度忘却術をかけに行った時、あそこへ戻ったからな。でも、あれが無くたっておれはユリウスを兄として愛しているし、彼の気持ちも知っていたよ。だから、このペンダントに他とは違う力があるだろうということも……使ったんだろう？」

今のクロードは自分の見知っているクロードだわ。

「だから、貸してくれたの？ クロード」

クロードはそれには応えず、後ろに控えていた従者を呼ぶ。

「ラドビアス、おまえの心残りも回収したし。 出発だ」

「そうですね」

「クロード！」

引き留めるように叫ぶクライブにクロードが背中を向けたまま言葉返す。

「もうしばらくは戻らない。だからしっかり自分の国の手綱を握っておけよ。じゃ、行くよ。それとおまえのこのダニアンって魔道師に言っておけ。何様か知らないがおれをもう呼びつけたりするなよ。それにおれは、王様なんてごめんだって」

剣で地面を突いて弾みを付けるとクロードは空高く飛び上がり、待たしていたアウントゥエンに跨る。またが

「帰ってこい、おまえを待っているよ。盤石な国にして。だから、帰って来い、クロード」

クライブの声に是とも否とも言えぬ笑顔で応じた少年は小さく魔獣に命を下す。その後に従者の乗った魔獣も空に舞い上がり、主人に続く。

「おれの存在自体がもう、この国には脅威だな。力のありすぎる魔道師など、この国には要らない。おれは 一人きりだ」

「わたしがおりますよ。どこまでも一緒にいたします、クロード様」
「そうだったな。おれにはラドビアスがいるか。どこまでも一緒にいこう」

クロードの言葉にラドビアスは嬉しそうに微笑む。

わたしこそ、クロードを離したくないと思っているのだ。

一人で生きていけないのは寧ろ、自分。そして自分は、はるかにクロードより長生きしてしまう。そんな事は阻止しなくてはならない。己を殺して主人に仕えていると見せかけて、いつでも自分は自己愛に支配されている。

ラドビアスは前を行く自分の主人を見ながらため息をつく。

一方クロードは黙りこくって前方に視線を向けていた。

さっき自分の事を殊更、非人間的に見せようとしたのは思いを断ち切ろうと考えたからだ。アリスローザの気持ち、いや俺の

方か。 向こうが引導を渡してくれないと自分からは出来ない。

おれは不甲斐ない奴なんだ。 今も自分が仕向けたくせに、こうやって自分を見る皆の顔に恐怖の色を見つけて傷ついているのだから。

しかし、こうやって退路を断たないとおれはここに居たくなってしまう。 見知っている国で、知っている人々の中に囲まれてぬくぬくと生きていきたくない。

でも、それは許されない。 おれはユリウスを殺したんだから。

「クロード様？」

氣遣わし気なラドビアスの声にクロードは後ろを振り返る。 そして、顔を向けた先の目の前に広がる景色を見た。

その途端、二年前も同じようにこうやって祖国を見たと思い出す。 あの時はずぐにでもベオークに行けると、あつという間に全てを終わらせて戻ってくると思っていた。 だが実際は大陸に渡って魔術の勉強と剣術、体術の修業に費やされていた。

ベオーク自治国は自分が思っているより遥かに遠かったのだ。

さようなら、クライブ。 さようなら アリスローザ。

おれ、君のことが好きだったんだ。 でも二年ぶりに会って君は大人に…… 大人の女性になっていた。 おれは変わらない。 前のままだ。 釣り合わないよな。 君にはクライブがいい。

おれは 子どもなんだから。 このまま歳を取らない人外の者だ。

おれの心を引きとめていたもの全てに今、別れを告げよう。

クロードは、両頬を涙が伝うのをそのままに姿勢を前方に戻すとアウントウエンに命じる。

「行け！」

空を見上げるクライブとアリスローザの視線の先から二つの異形の物は瞬く間にその姿を消した。

64・後始末

「帰ってくるかしら」

「クロードは帰ってくるさ。でも……今はわたしを見て欲しいんだけど」

あまりに無防備なクライブの言葉にアリスローザは噴出す。

「お、おかしいかな？ でも、やっと笑ってくれたな、アリスローザ」

「……陛下」

遠慮がちに笑うクライブにアリスローザは胸が詰まった。

こんなにも氣を使わせていたのか。悲しみに自分は我を忘れていた。浸っていたかったのかもしれない。ウイリアムとの甘い思い出に。しかしそんな事は自分の胸の内だけに仕舞っておかなくてはいけ。主君に心配をかけるわけにはいかない。

「陛下、ではそういたしますわ。いつもわたしやハーコート様が口うるさく見張って差し上げます」

につこり笑うアリスローザにクライブの手が彼女の背中に回わる。それに応えるアリスローザの笑顔。

やはり二年前とは違うのだ。クライブを支えていくと決心したのだから。アリスローザはクロードに心の中で別れを告げた。

コーラル王とマルトが外国から来た恐ろしい魔道師二人組みに殺されたという事は、事の真相はさておきそのまま国中に伝わることになる。

それは人々が魔道師を恐れる理由ともなったが、逆にクライブが王に返り咲くことに対しては好意的な目で迎えられるという恩恵もあった。

「ステファン。これから君にはサイトスでやってもらいたいことがある。残ってくれないか」

王の執務室に呼ばれ、かけられたクライブの言葉にステファンが笑う。

「アリスローザには聞かないんだ？ まあ国が落ち着くまでならいいですけど。まだ、体が本調子ではないし」

ステファンは勿体をつけるようにゆっくり歩きながら視線を送る。
「この城内にある蔵書室にいつでも出入りできるんなら」

「ステファン……君がコーラルの子どもだったなんて。つらい思いをさせてしまったな」

クライブの言葉にステファンは目を僅かに逸らせる。

つかの間の沈黙。

「だから？ 僕はあの人の子どもかもしれないけど、だからってそれに縛られてはいないですよ。僕は血の絆だけで物の道理を見誤るまねなどしない」

ステファンの精一杯の強がりは今、そのまま受け入れてあげたいとクライブは思う。

「解かった。いつでも閲覧できるように手配するよ。それと アリスローザにはわたしの側にずっと居てもらいたいと思っているんだ」

「勿論ですわ、陛下。今度は道を誤らないようにべったりとお付きしていますからね」

そこへかかる声。

「いい加減にあたしを無視しないでください。 あたしがここに居るのを忘れているんじゃないでしょうねっ」

その場にいた全員の視線を集めたのは頭の薄い中年の魔道師。

「ダニアン、忘れたわけじゃないんだけど。だってあなたの処遇はもう決まっているんだもの」

「へっ？」

「じゃあ、ボルチモアの廟へ帰っていいんですね。じゃ、失礼申し上げます……」

「違うわよ」

アリスローザの声にそそくさと部屋を出て行くとする魔道師の足が止まる。

「コーラルが死んで、他の高位の魔道師も捕らえられて一体誰がサイトスの祭祀庁の長になるっていうのよ」

「だ、誰って　まさかあたしになれと仰ってるんじゃないでしょうね」

「その、まさかよ。クロードがサイトスの主城の魔道師庁があった場所をそっくり壊していったんだから。その後始末も頼むわ。魔道師の不始末はあなたの責任よ」

「だ、誰が！　約束が違うじゃないですか。冗談じゃないですよ、結局ペンダントだって貰えなかったじゃないかったですか」

しかし、ダニアンの精一杯の抵抗もここまでだった。

「よく言うぜ。ぼく達を仲たがいさせ、ダリウス様を謀って裏切ったくせに。ぼくらを反目させて相打ちにさせる気だったんだろう、このはげ」

ステファンが思い出させるように言う。

「それは　鍵と契約されたクロード様を王としたかったからで。でもおかげで助かったんだからいいでしょう。もう、あたしを放っておいてください」

ダニアンの懇願こんがんに被さるクライブの言葉。

「わたしからも頼む、ダニアン」

「へ、陛下……わ、わかりました」

ああ、やっぱりこの娘と関わり合うとロクなめに会わないのだ。ダニアンはしょぼくれた体をさらにがっくりと落とした。

65・ 後春の吉日

それから更に二年の月日が流れて。

クライブも宰相補佐となったアリスローザ、内務大臣になったステファン。残っている高位の官吏全員、息つく暇も無いほど忙な日々を送っていた。

正式な場所ではいつも顔を会わせてはいるがなかなか他の場所では話することもできない。

アリスローザはハーコート公に目を通してもらう案件の書類を抱えて宰相の部屋に行くが、そこにはハーコートはいなかった。

おかしいわねえ、急ぎだからとハーコート様が言っただけなのに。

「ハーコート様はどちらに？」

「国王陛下の執務室だと思いますが」

官吏に礼を言ってアリスローザは国王の執務室へ急ぐ。

「陛下、ドミニク様がお見えですが」

「ああ、アリスローザか。入れてくれ」

お邪魔致しますと入って来たアリスローザは部屋を見渡してがっくりと肩を落とす。

「どうした？」

「あ、すみません陛下。ハーコート様がどこへ行かれたのかご存知ありませんよね」

一国の王に人の居場所を聞く非礼も彼女には許されているようだった。

「じきにここに来るだろう。ここで少し休んでいったらいい。君は働きすぎだよ」

「それは陛下も同じでしょう？」

「じゃあ、わたしも少し休むよ」

クライブは笑いながら言う中にもいた官吏たちにも休憩を言い渡して部屋から追い出してしまった。

「君は今の地位に満足しているのか」

急に聞かれてアリスローザは本意を計るようにクライブを見る。宰相補佐とは正式な官位では無い。暫定的にアリスローザが動き易いようにつけているだけだ。そして、それは彼女と離れたくないクライブの意向も影響している。

「わたしなんかこんな高い地位をお与えしましたこと、本当にありがたいと……クライブ様？　どういう意味です？」

周りに誰もいなくなった事を幸いに口調がいきなり砕ける。

「意味って、そのまんまの意味だよ。君が忙しく働いてくれるのはとても嬉しい。うれしいが、このところ少しもこんな風に会えないのがつらいんだ。君はどうなのか、教えて欲しい」

ああ、この人は本当に純粹で素直な人なのだ。それが危うさにもつながるのだろうか。

「クライブ様、わたしだって寂しいに決まっています。でもあと少しすればこんな忙しさとお別れですよ、きっと」

母親のように肩に手を置くとクライブは眩しいほどの笑顔になった。そして。

「いつ、言おうかと考えていたんだが。今、言うことにした」
一転して真面目な顔になる。

肩に置いた手を降ろされて、その後。

アリスローザの足元にクライブが膝をついて片手を取る。

「クライブ様！　何を？」

驚くアリスローザにクライブは続ける。

「そのまま……アリスローザ、私と結婚して欲しい。君とこの国を作っていききたい。君を愛しているんだ。ずっといつまでも一緒に生きていきたい」

暫くまったく時間が動かないかと思うくらいの沈黙。

「アリスローザ？　嫌なら、そう、言ってくれたらいい。勅命でも

何でもないのだから」

クライブが心配そうに顔を上げる。

いつか、こんな日が来るのかと驕りおごりでもなく彼女は思っていた。

それは隠そうともしないクライブの態度、表情、言葉から。

そして　自分はどうなのかと。

彼女を振り回す、気になって仕方がなかった人。　そしていつも置いていかれた。

または、包み込んでくれた優しくて頼りになる年上の人。　この頃やっと涙なしで思い出すことができるようになった彼。

クライブは二人とは違う。

当たり前の事だが。

激しく燃えるような、とか心が揺さぶられるような……　そういう事でなく。

わたしは彼を支えてあげたい。　政務だけでなく　心からそう

思う気持ち。

それも愛情では無いのか。

「陛……いえ、クライブ様。　わたし嬉しいわ。　ありがとう、でもまた気の弱い事を言っていると手が出るかもよ。　わたしは王妃なんて柄では無いもの」

アリスローザの返事に広がるクライブの笑顔。

「遠慮なく出してくれていい。　そういうところも全部好きなんだから」

手を引っ張ってアリスローザがクライブを立ち上がらせる。

「ここではいいけど、他の人の前で私が尻に敷いちゃってることをバラしてはだめですよ、クライブ様」

「了解した」

二人の笑い声が部屋の外に聞こえてきて廊下にいた人影も口元に笑みを浮かべる。

「いいご趣味ですね、ハーコート公爵様」

「何を言ってる。　何とかしないと一生あのままだと脅かしたのはお

まえではないか、ステファン」

二人は顔を見合わせてニヤリと笑った。

次の新年が明けた後春の吉日。

王クライブは明るい金髪にスカイブルーの瞳の、美しい女性を王妃として迎えた。

その妃は王より二歳年上で、影で王を叱咤激励して尻に敷いてい
ると言う噂が あった。

65・ 後春の吉日（後書き）

あと、もう少しになりました。引き続きよろしく
お願いします。

「その後レイモンドール国は三十年ほど続き、滅びましたが。結局魔道師から権力を取り戻し、立派な施政を行った王も大国に攻め込まれては成すすべもありませんでした。昔、昔。まだ魔道師が本場に魔術が使えて、ドラゴンがいた、そんな頃のお話ですよ。こんなおとぎ話が参考になりましたでしょうか？」

微かに空が白み始めていた。目の前の男から話を聞きだしてから夢中になって知らぬうちに朝を迎えてしまったらしい。

「こちらこそ、一晩中喋らせてしまい、疲れたんじゃないやありませんか。大変興味深い話でした。レイモンドールの黎明期れいめいきからの話など、どの文献にあたってもはつきりしなかったもので」

あまりの興奮に学生風の若者は身を乗り出して唾をとばしていた。一晩中しゃべっていたはずの男は疲れた様子も無く、立ち上がる。「お休みになられますか。それともお茶を差し上げましょうか」「それではお茶を」

若者は眠気などまったく感じていなかった。

イストニア連邦国、ダイニーズ州。

昔、この島国は一つの王国だった。それも魔術で結界を張っていたという。今は魔術の文献も遺跡の一つも残ってはいない。夏の長期休暇はその真偽を確かめる旅になった。昔の地図によるとこの険しい山脈のどこかにレイモンドール国の魔道教を統べる主廟があったらしい。

それを彼は、去年死んでしまった父親から聞いたのだ。

「おまえはレイモンドール王朝の血を継いでいるんだよ」

まさか、とその時は笑い飛ばしたのだ。この狭いキッチンに毛が生えたようなダイニングで朝食を囲みながら父親は寂しそうに笑

っていた。

その時はそれで話は終わり、彼も忘れていた。

思い出したのは父親が肺炎をこじらせてあっけなく死んだ、一週間後のこと。

父親の遺品を片付けていたカルーディは美しい螺鈿細工の小箱を見つけた。

「母さんの遺品かな」

まだ小さい頃に亡くなっていた母親の物だろうかと持ち上げて見ると、底に鍵がついている。

父さんらしい。こんなところに鍵があったんじゃあ、防犯の意味なんてないのだが。

この調子で銀行の通帳やカードに暗証番号を書いたりしていたのだった。

ふつと笑いが込み上げて、鍵をその箱に差し入れると、カチリとはまる音とともに蓋が開く。

「綺麗だな。まさか 本物？」

中には絹の台座にすえられた指輪が一つ。竜を模った恐ろしいほどの細かい細工。両方の目にはそれぞれ赤と青の石が輝き、まわりは透明な石が散りばめられている。胴体は燦し銀のようだが、もし、これが本物だったら大変な金額なんじゃないのか。

カルーディは唾を飲み込んで暫くその箱を眺めていた。

それから、気になって眠れない日が続く。昔、滅亡した王朝レイモンドール。

それからは大学をそっちのけでレイモンドール国の事を調べていた。

そしてこの夏。

一人用のテントと必要最低限の装備。一週間分の食料を大型のリュックに詰めて彼がこの山脈に足を踏み入れてもう十日以上。

軽く考えていた自分を呪いながら、手がかりも無く下山するルート
を捜してさらに迷う。

携帯電話も圏外の表示のまま。

そして、昨日の晩。 テントなど役に立たないほどの雷雨にたま
りかねて当て所なく歩いた先に見えた一筋の光。

それを頼りに真つ暗な中、石造りらしい戸を叩いていると中から
若い男が顔を出した。

「すみません、この雨で困ってます。 一晚家に入れてもらえませ
んか」

「それはお困りですね。 いいですよ。 どうぞ、こちらに」

家の主は目を引く背の高い痩せた男だが、物腰が柔らかく穏やか
な顔をしている。

薄い黒のニットのセーターにカーキ色のチノパンツ。 こんなと
ころに住んでいる変わり者には見えないが。

「先にお湯を使ってください。 風邪をひきますよ。 この先にバスル
ームがあります。 替えの服は良かったら私のお使いください。 棚
に置いておきますよ」

人の世話をしなれているのか、次々としゃべりながらも用事をこ
なしていく。

カルーディは結局、用心をしながらも男の世話になり、食事まで
ご馳走になった。 今は男の大きすぎる夜着に着替えて、リビング
らしい暖炉のある広間に置いてあるソファーに毛布を被ってすわっ
ていた。

この島に渡つてすぐに、大陸との気候の違いに驚く。 狭い海峡
をはさんだだけのこの地がなぜこんなに冷涼なのか。 その問いに
青年はああと応じる。

「外海のダルム海。 そこからの冷たい風はこの島の南北に走る山脈
にぶつかって和らぎ、大陸には影響を与えていません。 そのせいで

しょう」

「なるほど。ところで、昔レイモンドール王国が魔術によって国境に結界を敷いていたという話を知っていますか」

急に魔術などと言い出したら、変なやつだと警戒されるかと思いつながら、カルーデイは聞かずにはいられなかった。何かヒントを。レイモンドールにつながる何か。

ところが男は、カルーデイの心配をよそに何とすることもなく、世間話の続きに答えるように話し出す。

「魔術で結界ですか。あれは外海のダルム海沖に埋まっていた大量のメタンハイドレートが原因という説だったではありませんか。それにしても、レイモンドール王国。その名前を聞くのも久しぶりですね。それを調べにこんな山奥にいらしたんですか。では、せっかくですから古い話をお聞かせいたしましょう。ところであなたのお名前は？」

「お世話になつていたのに名乗らなかつたとはすみません。ぼくはカルーデイ・バンドールと言います」

「そうですか。あなたの髪と目を見てもしや、と思いましたが……」
「もしや？」

67・ 覚めない夢

「ええ、今ここで使われている言葉の発音はイストニアのもですが、昔は違いましたから。あなたの名前はレイモンドール王朝ではこう、読みます」

男は宙に指で字を書きながら言う。

「クロードと」

そう言って話し出した男の話に、いつしか引き込まれていったのだ。

朝日が昇りきると自分が思った以上に古い建物にいたことが分かってきた。

壁も石積みで部屋は驚くほど天井が高い。床も黒曜石と大理石が模様を組むようにはめ込まれている。縦に長く切つてある窓から朝日が長い光を部屋の奥まで通している大きな部屋。天井にも壁に刻まれているのは何かの模様なのか、釘で引つかいて描いたような文字。そして床の模様は円の中に複雑に外国の言葉や記号が描き込まれている。

「ここは、一体どこなんです？ 魔道教に関する物は何一つとして残っていないはずですよね？」

見回したカルーディは、お茶の用意をして盆に載せて入って来た男に問う。

「いいえ、残っていますよ魔道教は」

驚くカルーディに、につこりと男は笑いかける。

「イストニアをはじめ、この大陸で信仰されているイルアイ教ですが、さきほどのレイモンドール王朝の読み方ではイーヴァルアイ

と読みます。そして教祖の名前ですが」

「ドノアン……って、もしかしてそれじゃあ、話に出てきた、ダニアンって魔道師のことじゃあ」

「ええ、彼は百二十歳まで生きましたからねえ。そうそう、お祈りの最後に言う言葉の意味を知っていますか？」

噴出しそうな男を前にカルーデイは厳かに答える。

「エオー ウルズ ハガル」

「意味は？」

「神の祝福あれ、そうでしょう？」

男は笑いながらカルーデイを見た。

「古代レーン文字では、とつとと逃げろ、です」

「何でそんな……」

引きつるカルーデイに、につこりと笑う男はそれに答えかけたが、微かな物音にそれも中断する。

「あ、お戻りになりました。少し、失礼します」

お茶のポットもそのままに、男は嬉しそうにそそくさと部屋を出て行く。

勝手にお茶を飲んでもいいのかと聞こうにも、彼はまだ名乗ってもないことに気づいた。

そうつと部屋を出てホールにつながる階段から下をうかがうが、朝の光もここまでは届かないのか薄暗くて入り口に立っているのが誰なのかまではわからない。

しんとした中に聞こえるのは階段を軽快に降りていく足音。

耳をすませばホールで反響して聞こえてくる声。

「お帰りなさいませ。お疲れでしょう」

「ああ、サウンティトウダに無理をさせてしまった。汚れてしまったから外で待たしてある。水を多めにやって休ませてやれ」

「はい」

体を手すりから乗り出すように見ると階下のホールで何かが光った。

髪が光に反射したのだと分かったのは暫くしてから。

カルーデイは自分が何の中に足を踏み入れたのか、分かっていなかった。

それは、後戻りの出来ない魔術の結界の中。

何百年もの消えない夢の中……かもしれない。

そして彼の物語がはじまるのかも。

完

67・ 覚めない夢（後書き）

最後までお読みくださいました事、感謝します。

一応これでレイモンドール王国の話は終わりです。

旅立ったクロードの結末は外伝として出すつもりです。

ありがとうございました。

1・レイモンドール綺譚

2・レイモンドール綺譚（転成の章）・・・この小説です。

3・外伝 レイモンドール綺譚（創成の章）・・・レイモンドール国
ができた頃の話です。

4・外伝 クロード冒険譚・・・時期としては、本編の1と2の間の
話です。

（一話、一話独立した話になってます。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0252e/>

レイモンドール綺譚（転成の章）

2010年10月8日13時37分発行